

始



乙

東京

同志同行社發行

芦田惠之助著

第二讀方教授

特227
438



第二
讀み方教授

芦田惠之助著



序

本年三月東北地方へ旅行したのを手初めに、北陸・中部・近畿・中國・四國を旅行して、親しく讀み方教授を見ました。意想の外にひどくかはつてゐました。私はおのれを顧みるいとまなく、讀み方教授について立言を試みるのは、國家教育上今日の急務だと思ひました。またそれが自分の責任であるやうに感じました。歸來一ヶ月、ペンを執つて思ふまゝを書きつけました。

自己を凝視して書きました。参考した書は一冊もありません。それは私の純眞を保たんがためです。第一義の語をくるはせないためです。たゞ八月二三兩日東亞協會に於て、垣内先生の御講演をうかがひました。先生は當今國語教授研究界の第一人者です。私は私が殆んど書きあげてゐた第二讀み方教授と、先生の御研究を比較して、その關係を見ようがためでした。幸に先生の御意見は、私の立言に基礎を與へて下さいました。私は堅い自信を得ました。この書を刊行するにあつて、私は甚だ心強い感に充ちてゐます。

この書の使命が何か。この書がそれを果し得るか。それは今後の問題です。私はこの書の擁護と、立言の徹底に努めます。それがためには、如何なる惡戰苦闘も辭しません。いざさらば行け我が子、汝を見守る我のあるを力に。

大正十四年八月二十日

芦田惠之助 するす

目次

一 その後……………一

○ 世相の推移……………一

○ 読み方教授の推移……………一三

二 読み方の教材……………二五

○ 口ことば……………三五

○ 讀本の教材……………三六

三 読み方の教授……………九九

四 私の國語教授に關する追憶……………一五七

五 この後……………二〇五

以上

第二 読み方教授

芦田惠之助著

一 その後

○ 世相の推移

その後十年——大正五年読み方教授を旅立ててから——十年はまことに一昔で、世相がひどくかはりました。その過程には色々な事件が突発したり、それに伴ふさまざまの思想が流れたり、民衆の考がこれに動いたりして、静かな水面に波紋を生じ、浪をおこし、渦をまきました。いづれは靜穩に歸するのですが、それ

に到達するには、なほ永き月日を要しませう。幾多の犠牲をはらはなければなりません。人心の何とはなき不安も、決して無理ではありません。今まで幾百年、正しいと信じ、命を賭しても蹈んで来た道が、甚だ意義の乏しいものに考へなければならぬやうになつたからです。旅人が心の迷ひから、行くべき道を疑つ

一 その後

一



た不安さです。中にはその不安が焦燥に變じ、一切の考察をすべて他人に委せて、時々の波のまゝに盲動する者があります。この種の人によつて、社會の破壊せらるゝ事は、實に大なるものです。教育が進んで、この傾向を高めたのは、反省すべきことです。

しかしこの人心の不安盲動の傾向を悲觀してはなりません。一度起つた波動が靜止するには、靜止する事情が伴はなければなりません。これを悲觀することは、その事情をいよゝ惡しざまに導くものです。むしろこれを至美至善の世界に到達する過程・試練と觀じて、各自安んずる道を靜かにたどるべきです。決して同胞同族を猜疑し、反目してはなりません。最後に頼むべきものは、血を一にし、歴史を一にする同胞同族ではあるまいかと思ひます。

歐洲戰爭

歐洲の大戦は、今から思ふと夢のやうです。いつまでも考へさせられる事件です。その事の起りや推移には、もとより名もあり、理もありませんが、その結果を見ると、「兩虎共にたゞかへば、勢共に生きず。」との讀本の名句をそのまゝです。戰敗國のみぢめさはいふまでもありませんが、戰勝國の苦しみも、一通ではありません。戰爭によつてうまい汁を吸つたといふ國も、腹一ぱいに血を吸つた蛭の様に、吐いて悶えたり、その中毒で瀕死の状態になやんだりしてゐます。勝つも負けるもつらい事のやうです。

一青年の發射したピストルが、かの大戰をひきおこしたとは申しますが、その實はその音を傳へ聞いた一團の野心家が、狂ひだしたのがもとです。一家に狂者が一人出來ると、一家がその迷惑を蒙るやうに、世界に一團の狂者を生じて、その害は全人類が蒙らなければなりません。私のせまい觀察では、狂者は對他のに生きるものに多いやうです。否自己を見失つたものの當然到達すべき境地です。さういふ見地からする

教育者の任務

と、現代人の多數は、多少狂つてゐるやうに見えます。たゞその度の強弱によつて、狂と非狂とがわかれるだけです。歐洲戰爭もせんじつめると、狂者のあとから狂や非狂が走つたのです。勿論私も狂でせうが、いつまでたつても、歐洲戰爭に對するこの感じは消えません。

靜かに教育者の任務を考へてみると、實に重大だと思ひます。民衆をして日々の生活の上に、千古の大道を發見させ、天地皆春の理想郷をうちたてさせることです。精神病者を未發にふせぐのも、亦教育者の任務でせう。現在教育者の能不能はしばらく別として、國家が教育者に要求する所は、こゝではないでせうか。むづかしさうですが、興味の深い仕事です。

民本思想

大戰後には、民本思想が渦をまいておしよせました。とにかく耳新しい事なので、人心は之に靡きました。そのうちに多少事實となつてあらはれたこともありましたが、それがために世は活氣づいて來たやうでした。——經濟上の好況も伴つて——それは當然です。從來はたゞ因襲的に、他の爲に生きる傾であつたものが、己のために生きる傾にかはつたからです。生活の基本がかはつたからです。しかしあまりに急激な變化であるので、その精神よりも皮相に流れた感があります。はきちがへも随分多かりさうです。

私は自己の尊重すべき事を可なり強く感じてゐます。自己を外にしては、何物も存在しないかとさへ考へてゐます。自己に行はるゝ道を認め、これに安んずる事が、生きる本義だと思つてゐます。この本義にたゞないものは、何物の真相をも見る事が出來ないと思ひます。先覺の中にも奇怪な説をなす人がありますが、私は「この國に住んで、この歴史にはぐゝまれた人が。」と驚くことがあります。畢竟自己を見ない罪です。

日 雇人の定休

民本思想に觸れて、自己を見出した人も多いでせうが、自己を見失つた人も少くありません。雇人の定

尊重すべき自己

休日といふものが出来ました。出来たのははきちがへではありませんが、籠の鳥が放たれたやうに、自己を忘れて遊びあるいた所に大きなはきちがへを生じました。定休日の翌日は能率が上らないと、雇主はこぼし始めました。定休日の翌日はからだだるくて、雇人も気がついて来ました。どうも懐が不如意で、公平な經濟の前に叩頭しました。中には藪入のやうに楽しい定休日がほしいとさへ云ふものが出来ました。これはたゞ世相の一端に過ぎませんが、自己を失つては、何を得ても、それは幸福ではありません。自己の存する所は、大抵美しく楽しい所です。

金の價が下つて、物の値が上りました。生活が向上して、費用がかさんで来ました。見苦しい厚化粧が流行して、臺所には涼しい風が吹きはじめました。果然増俸や賃金増額の運動が始まりました。幾度か罷業が企てられました。資本家は幾度か譲歩しました。譲歩しないと、労働者は酬いるに怠業をもつてしました。勿論攻道具につかつたものですから、如何にそれが巧妙であつても、尊いものとは思はれません。しかし僅かに七十まで生きる貴重な一週間を、再び得難いその一週間を、修羅の思で、のらりくらりと過した事は、甚だ自己を侮辱したことです。人間の崇高な部面でない事は確實です。

資本家も中々に氣のきかないふしがあります。恒産があつても、恒心のある者は少いやうです。資金に對する利率が、一割とか一割五分にまはれば、それ以上の利益は積立金とするなり、労働者に分配するなりして、勞資共に生活の基礎を強固にし、日々に共榮共樂の道を求めればよいのに、労働者側から手強い要求があるまで、一日のがれにひきのばして、いよ／＼問題がこんがらがつて來ると、一時凌ぎの不徹底な妥協を求めます。妥協もよいことかも知れませんが、墮落を意味する場合があります。

大體労働者と資本間との間に正しい道はないものでせうか。誰がきいても、もつともだといふ地點がないものでせうか。双方そこがわからないために、之を求めるならばよろしいが、誰の目にもわかりきつてゐる見え透いたことを、わざと見えないふりして、一方はなるべく少く出さうとし、一方はなるべく多く取らうとして、さわぐのだつたら、人としてはづかしい事です。双方共に正しい道の上になつて、利益の分配をなすべきではありませんか。そこに資本家も労働者に感謝する念を生じ、労働者も亦資本家に感謝する念がわくのです。蓋し奪ひあつても、私腹を肥さうとするあさましい心には、感謝するなどいふ氣分は浮びまします。私は労働者がめざめることを大切だと思ひますが、資本家の覺醒はさらにそれよりも大切です。それは黄金といふ魔力を擁してゐて、とかく迷ひ易い事情にあるからです。

小作争議も亦時代の産物です。勞資問題の一面ですが、その範圍の廣い點と、利益分配の單純鮮明な點に於て、その争議が眞剣です。それだけ深刻な所があります。父祖幾代、その土地によつて一家が育くまれて來た小作、幾十年小作によつて、位置と名譽を保つて來た地主、いはゞ相利し相生きて來た共同生活者です。以前は相互の間に、きはめて美しい感情の流れたものでした。ところが世がせちがらくなり、勞金が高くなると共に、双方めざめて、小作もつまらないと思ひ、地主も立ちゆかないと考へて來ました。そこで小作料を下げよといひ、下げぬといつて睨みあつた擧句、作らぬとか、作らせぬとか、賣言葉に買言葉です。それを側から見ると、實に異様に感じます。作らないといつて、作らないでゐられませうか。家をすて郷土をすて、數口の一家を何處にはぐくまうといふのでせう。作らせないといつて、作らせないでゐられませうか。作物を仕付けたら、反に三石或は四石を收穫し得る田地を荒して、日々我等を照らし給ふおてん

たう様に、すむでせうか。人間が利害と意地からんで来ると、問題を變なところに持上げて、果は血を流したり、罪を得たりします。これも亦双方の立行く正しい道に解決して、ともに感謝の念に生きたらよいではありませんまいか。それ程のことは誰でも知つてゐるといふかも知れませんが、それならばこの問題の目的が、争議にあるのかを、念のためにきいておきたいと思ひます。

昔は親子で五斗俵をさしあつて、地主の家に運びこみ、運び終へての振舞酒に、首元を紅くして歸つて来たものでした。そこには双方感謝にみちた美しい人生がうかゞはれました。小作の家の不幸は、地主が決して他所には見ませんでした。地主の吉凶禍福は、小作は自分の吉凶禍福として慶弔したものでした。そこには互助の美しい人生がうかゞはれました。美しい感情は人間生活のくさびです。金銭で評價する事を許さないものです。所が今は権利と義務の念がよく、それがために滑らかに解決すべき事も、こちれて持ちも下しもならぬやうになります。何にしても、自己にめざめることは尊いことですが、それと同時にきはきちがへたら、國の禍です。靜かに安んずべき境地を求めなければなりません。

水平運動なども、因習にとらはれてゐた昔はともかく、人間は平等であるとの念の發達してゐる今日は、對等の交際、平等の取扱を要求することは當然です。もし不對等不平等の事實が存在したら、それだけ社會の結合は薄弱です。心ある者はこの差別を一日も早く撤廢することにつとめなければなりません。しかしながら、自ら安んずべき境地を見出して、之を一切解決の地點とするやうな努力もまた大切なことです。私は昨年夏北海道から樺太地方を旅行して、函館まで歸つて来た時、買つた新聞の中に、「群馬縣の水平社突如解散す。」といふ見出しのもとに、「他に利用されることをおそれ、自ら修養することの必要を感じて、斷然こ

水平運動

一切解決の
要議

こに解散す。」といふやうな宣言がのつてゐました。私は最初水平運動がとなへられた當時から、その主張には賛成してゐましたが、この新聞を見た時、水平運動もこれではじめて眞の道にのつたとよろこびました。その仲展はよし鈍くても、永遠の光明はこゝにのみ得られることと堅く信じました。

再び申します。自己を外にしては、如何なる問題も解決が出来ません。よし一時解決がついたやうでも、それは根本的のものではありません。相對觀にたつて争議・鬭争を解決の手段とする現下の有様が、那邊に終止するかは、推測するに難くはありません。要するにつまらない事だと悟る時があります。けれどもそれまでには多少血を見なければなりません。犠牲者となる不幸の人を出さなければなりません。それは誠にむだなことですが、忍ばなければなりません。

日本民族は自分の衰亡を知つて争ふ程、聰明を缺いてはゐません。大同團結は日本民族の長所です。結論の見えるのも早うございます。私は國の將來について、少しも心配しませんが、見えすいてゐる結論を見ようとして、相持むべき同胞骨肉の間柄で、いがみあつたり、なぐりあつたりすることは、如何にもあさましいことです。自己にめざめれば君子國、はきちがへると東洋鬼、二者の差は間髪をいれない所にあります。教育はいよ／＼盛にして、世はあらぬ方に流れていきます。情ない事です。

教育に關しても、この十年に色々な問題がもちあがりました。そのうち八大教育思潮の大講演が、東京高師の講堂で開かれましたのなど、特筆すべき事でせう。手塚さんの自由教育で、千葉が日本の千葉になりました。木下さんの學習法で、奈良が教育の研究所と目せられるやうになりました。その他創造教育といひ、藝術教育といひ、ダルトン案といひ、中々に賑はひました。いづれも自己にめざめた反映で、同根異花の感

教育上の推
移

煽られ氣味の教育界

が致します。お蔭でもつて、十三年前にはあれ程批難の高かつた綴り方教授の隨意選題が、無條件に承認せられて、流布して行きました。今日隨意選題など申しますと、やゝ時代後れのやうにいはいはれますが、私はすべての教育上に、隨選の精神、自由の氣分が深くなつて來たことを、まことに嬉しく思ひます。

教育に關する新しい諸思潮は、至極の大道を種々の方面から提唱されたもので、その大綱をきくだけでもありがたい事だと思ひます。これを主唱せられた諸先覺は、これによつて世の蒙をひらかうと努められました結果、痛罵を逞しくしたり、思ひきつた立言を試みたりなさいました。これに接した我が初等教育界は、煽られ氣味にそれを取入れました。一種の流行となりました。功をいそぐ者は、机の排列をかへたり、討論を教授に加味したりして、自分も喜び、人をもよろこばせました。しかし讀み方を自由に學習させるには、その材料やこれに關する設備が甚だ貧弱でした。綴り方のやうに、一念の轉ずる所、隨時隨所に資料を求め、その出來るものは、實行が容易ですが、讀み方となると、不完全でも、兒童圖書室がなくては動くことがむづかしさうです。私は舊設備の中に、新主義を實行しようとして、幾多の支障とたゞかはれた先覺諸氏に御同情申しあげます。自由教育には方法よりも、設備の完成、環境の整理が急務だとおもひます。

教育はいかに論議を重ねても、根本義はかはるものではないと思ひます。絶對觀にたつて、自己を見つめるやうに導くのが究極だと思ひます。この態度が出來ますと、そこに眞の發達があり、眞の愉快があり、人生の眞意義があります。自分の生活が第一義的に變つて來ると、極めて謙虚な心持になります。社會上・教育上の諸問題がすべてこゝに解決が出來るかと思ひます。現今の教育が人をこゝに導く努力として、尊敬すべきものであるか否かは、全く疑問です。私には東に行かうと志す人が、歩を西に轉じてゐるやうな點さへ

教育の本義

思想の歸一

見えます。決して口の悪いことを申すではありませんが、自己をはきちがへたのも、自己を失つて、爭議競争にうき身をやつすのも、維新後の教育がその備を作つたのではあるまいかと思ひます。

私は自分を内省する時に、今の思想の混亂に歸一點を與へることは、さして困難ではないと思ひます。私は相對觀に生きて下らない事に煩悶したり、他に勝たうと競争したり、ある時は手段を盡しても、我意を通さうと苦しんだことがありますが、さて我に歸つて道を見、我が生の尊ぶべきことを知り、さらに安んずべき境地に求めると、さきのいらいらした一切は、雲散霧消して、ほがらかな自分に歸りました。さきの我も今の我も、我は等しく我ながら、その差は頗る大なるものです。脚下に彌陀の淨土もあり、無間の地獄もあるなどいふ佛説もうなづかれます。そのいづれを選んで生きていくかは、私の態度で定まる事です。要するに我の一念です。一切の問題を一念につゞめてみると、歸結點を與へることは、さして面倒な事ではあるまいと思ひます。

今かりに内省修養の結果、自己を見つめてゐる人のみによつて、この社會が充たされたと致しませう。その社會には、大仕掛の警察も、監獄も、裁判所も、必要はありません。したがつて警官も、獄吏も、裁判官も、辯護士もいるまいと思ひます。もし全人類がすべてその境地に到達したら、國防の必要もなく、到る所に共存共榮の樂郷をうちたてて、日々の生を樂しむ以外、さらに思ふことはなくなりませう。かやうな事を申しますと、人は必ず「それは理想だ。現社會には望まれないことだ。」と一笑に附するでせう。けれども今日のやうに人心の流れ行くにまかせて、たゞその頹敗をなげくか、結論を自己に求めて、これが解決につとめるかといへば、後者に從ふのが當然です。少くとも教育はこゝを望んで、進むべきではあるまいかと思

内輕外重の
あやまり

しかし自己の覺醒は、自己のなすべきことで、教育の方法としては、如何ともすることが出来ないといふ人があります。内よりも外を重んじた、明治以後の教育のあやまりです。教育が自己の究明を重んぜず、智識・技能を主としては、その意義をなさないかと思ひます。故に智識はあり、技術はあつても、人として價値の乏しい人が出來たかと思ひます。油斷のならない人が、多くなつたかと思ひます。

自己の究明は、他から手がつけられないといつては濟まされない問題です。教育者としてはこの難關打開が當面の問題です。私はこれを甚だしい難關だとは思ひません。徒らに春を求めて、遠き山々をかけまはる者には難關でせう。しかし庭前の梅花一輪に、十分の春を見出すものには容易なことです。多くの偉人・傑士の行狀について、自己究明を學ばせようとしても、それは迂遠な道です。教育者が自ら自己究明者として兒童の前にたつ時、そこには既にその道が開けてゐます。これが唯一無二の方法です。

私は自己覺醒を思ふごとに、岡田虎次郎先生をおもはないことはありません。先生は岡田式靜座法の主唱者で、力の充實した方でした。私は四十歳の秋、その門に參じて、今日までその思恵に浴してゐます。始めて先生の前に座した時は、私は半信半疑、むしろ先生の虚をついて、そのまごつく様を見ようといふ反逆的山氣がありました。先生早くもこれを見て、私を目して「冷かし靜座」と評せられました。所が先生の力は偉大なものでした。全く冷かしに參じた私を、先生は固く捉へて、他を見ることを許しませんでした。私の左顧右眄する悪習を、たゞ一回の會見で奪ひ去つて下さいました。あぐらと腰掛けることにより知らぬ私の膝に、三十分間端座することを強要せられました。二十分位はどうか我慢が出來ますが、あとの十分が苦

岡田虎次郎
先生

しくてたまりませんでした。私は實に薄志弱行でした。十分でも要なき苦痛をうけることはない、自分で理由をつけて、いどこか靜座を中止しようと思ひましたが、さて之を決行する事は何となく不安で出來ませんでした。今から思ふと、この時既にかすかな光明を心のおくに見つけてゐたのかと思ひます。先生はたゞ「私を信じておすわりなさい。」とおつしやるきりでした。靜座の効果や理論についてきくと、「それは自然にわかつて來ます。」とおつしやるのでした。最初は「三年も座れば一通はわからう。」とおつしやいましたが、靜座三年の頃には、「十年も行けば。」とおつしやるのでした。その頃には私はもはや「靜座は終生の問題だ。」「靜座に成就の日はない。」「入門の日が、成就の日だともいはれる。」と考へてゐました。あとから「入門する人が、先生に質問することをきいて、自分の昔を思ひ出しては、極致の境涯をながめて楽しんでゐました。私は全く岡田先生に救はれました。」

ところが不幸先生は四十九にしておなくなりになりました。さしにも盛んであつた靜座も、ばつたり火の消えたやうになりました。この頃先生の高弟木下尙江氏を訪うて、「一度あなたにあつて、うかゞひたいと思つてゐたのは、先生の死についての御高見です。」といふと、「全く分らない。」といはれました。さうして「あなたはどう思ふ。」ときかれましたから、「先生御世界の當時、その門下の人々が、とやかくと説をなしたのは私には一つも満足するものがありません。要するにわかりません。」といふと、木下氏は「もつと座つたらわかるだらう。」とおつしやいました。「ではもつとしつかりすわりますかね。」といつて別れました。靜座の氣分が、先生の死のためにうすらいだことは残念ですが、我々のためには、活きた問題を殘されたものと思ひます。

私はまことに浅薄な體驗ですが、教育の眞諦は、岡田先生にうけた最初一年の指導に盡きてゐると思ひます。かつて私が綴り方は自己を綴るもの、読み方は自己を讀むものと主唱しましたのは、岡田先生に育てられた思想でした。今もその所信は變りません。私はその読み方と綴り方の主張に基いて、一身、一家の出來事を解釋してゐます。解決の針路を見出してゐます。私の國語教授は技術ではありません。私の生命です。私が安んじて生きていく至極の道を、國語教授にうつしたまでです。教育はこの義の外に存在するものではありません。

試みに世の中をごらん下さい。教育界の諸計劃でも、思想善導の諸運動でも、その方針計劃を仔細に見ると、あまりに外からの手段を重んじてゐるやうです。交通安全デー（大正十四年五月二十三日より三日間）といふに、殊に大故障が多かつたのなどは、勿論偶然ではありませんが、皮肉です。交通安全の計劃が少しも交通者の緊張を呼ばなかつたためです。新聞の記事に見えた従業員の感想には、交通安全デーの計劃が、意外な感情を刺戟した様に思はれます。とありました。とにかく内からの問題にふれないで、事の結果をのみいそぐのは、少時間人の目をごまかすだけです。中等學校入學試験の問題でも、一點のさますべき點を忘却して、とやかく論議するので、いつになつてもらちがあきません。教育者も覺醒すべき時が來ました。表彰や監督によつて、一時の緊張を見せたり、陳情や建議で事の始末をつけたりしてゐるやうではだめです。教育者自身の足元をあかるくして、世を動かす原動力となるやうにありたいと思ひます。教育者の團結ほど無力なものはありません。それはたゞ一點ポイントのうち所がちがつてゐるからです。

○読み方教授の推移

読み方の教授は、我が國に於ては、何の教授よりも最も早く開けたものと思ひます。それは文教渡來の當事、必要にせまつて、これが工夫をしたことは、想像することが出來ます。けれども私はそんな古い事から説き起さうとは思ひません。なぜかといへば、私の読み方教授は、そんな學究的の仕事ではありません。私は目前のこの読み方教授が混沌として、歸一點を失つてゐるのに目標を與へ、推移して來たその力を、正しい方向に向けなければならぬからです。

読み方教授は歸一點を失ひました。混沌として盲動してゐるやうです。けれどもこれは読み方教授の眞諦に到達しようといふ若き教育界の激瀾たる一活動と見るべきもので、よしそれが方向をあやまつてゐるとしても、その元氣の前には禮拜しなければなりません。この元氣は必ず眞諦に到達しないではやまないものであるからです。

読み方教授の推移は二つにわけて見るのが便宜でせう。即ち主としては教師がはたらいて、教へこむ事を眼目とした教師中心時代と、兒童の自學が主となつて、教師の輔導に學習を完うする兒童中心時代となりませう。

さて教師を中心とする読み方教授は、明治の初年から行はれたことはいふまでもありません。この教授は徳川時代の漢文教授をそのままに踏襲したものです。漢文の教授では、文字を讀み得る者は教師です。語義を解し得るものは教師です。書いてあることは生徒の生活とは縁遠い支那の事實か、日本の事實です。多く

は大人の事實でした。かうした事情のもとに行はれる教授が、教師中心となることは當然です。それより外に道がありません。寺小屋が小學校にかはりましたが、教材には變動のなかつた明治初年の讀み方教授は、鸚鵡返しの教師中心で、先生の音讀につれて、児童はあとからついて讀み、講義といつて、先生が意義を口語譯するあとから、児童は聲をそろへてついていつたのでした。今でも先生の音讀につれて讀む児童の聲をきくことがあります、それはちがつた意味からのやうです。もし讀む力をすゝめるための方法であるとしたら、殆んど無意義なことです。

人は何事によらず、習慣の前にはをかしい程盲目です。漢文を模唱によつて教へたといふ事實が、國語の假名書きの文でも、模唱によつて教へなければならぬと心得て、先生が聲高にさきへ讀むと、児童はこれにつれて、耳から口への聽音・發聲の練習をつゞけたものです。それが本を見てゐて、而も口先ばかりで行はれるのですから喜劇です。今から四十年も以前は、これが讀み方教授の大部分の仕事でした。こんなことをいふと、若い教師は「よして呉れ、自己にめざめてゐる者——新人——ではないか。」とおつしやるかもしれない。然し若い教師の教授にも、新語や新字の教授に主力を注ぎ、通讀をとかく氣にせられるのは、やはり徳川時代に、我等の祖先が、文字が讀めなくては、語義が分らなくてはといふ、先入觀念が支配してゐるのです。ことに入學當初に於ける假名教授などを見ると、教材が假名であるにもかゝらず、如何にもむづかしいことを授けるやうな様子です。これもまた喜劇に屬するものと存じます。

教師中心の讀み方教授は、仕事が全部教師によつて選定せられ、運ばれるのですから、教案はきめて精密なものです。十年ばかり以前までは、教案の精粗は、教師の良否を測定するものと目されたもので、校長の

檢閲を経るために、毎朝校長の机上につみあげたものでした。すると校長は盲判を押して、檢閲済といふことを證明されるのでしたが、思へばをかしなことです。しかしこれは校長の不徹底でもなければ、教師の不徹底でもありません。それを然らしめたものは時代の思潮です。教師中心といふ標識が立證してゐます。教師中心の讀み方教授が、校長中心の色彩を持つたとて、何の不思議がありません。教案の精記は教師中心の讀み方教授には必然のことです。

私が東京高師に奉職してゐた頃の教案簿が數冊、今も私の手に残つてゐます。大掃除の時などに取出して見るとはなしに見ると、さすがに自分の生命の過去の一部で、我をむかしに引返す魅力があります。そのうちに私が始めて學級を擔任した明治三十八年度の教案がありますが、それが最も精密で、その後は年々簡單になつてゐます。大正の初頃になると、たゞ仕事の順序だけを簡單に記して居るだけです。それが一日として缺けてゐないのが不思議です。こんな教案は、書いても、書かなくても、同じ事のやうですが、教授を自然に流さうといふことについては、可なり考へたものです。さうして結晶した所を、極々簡單に書いておいたものです。これも慣習に引づられる盲目的行動かも知れませんが、私はさうしなくては氣がすまなかつたのです。しかしこの無意識的の推移を、私は今からきはめて面白くながめてゐます。これは教師中心の教授が、児童中心にむかつて仲展していつたのです。それが學說や、新思潮から來たのではなくて、仕事に没頭してゐた私の努力が、かうした自然の流を追つたのでした。かはるともなく、かはつて行つたのでした。

私が東京高師附屬小學校の教壇にはたらいてゐました頃、多少教授がうまくいって、自分でもいくらか得意でゐると、參觀人から教案の拜見を申出られたものでした。察するにかうした教授をうむ教案は、どんな

精密なものだらうと思召してのことです。これには全くこまりました。見せぬといつたら、意地がわるい様です。見せるにしては、あまりに簡單粗雑です。こんなことを思ひながら、「あけてくやしき悲哀をお感じになりませう。」と教案簿を投出したものでした。するといつでも酬いられるものは、極々つめたいものでした。ごまかしといった風の表情をさへ、辱うしたことがあります。只今だつたら、さつぱりと「あなたは何を御覧になつたのですか。」とやつてのけるのですが、教師中心、教案萬能の參觀者と、教師中心の殻をやぶらうともがいてゐる私、——而もそれを自覺してゐない者——との出會ひですから、牡牛と牡牛のつきあひで、融通無碍のうまい所がありません。これも昔語ながら、今の世にも全くない圖ではありません。

教師中心の讀み方教授では、まづ素讀から手をつけます。素讀するには、新字が第一の問題になつて來ます。そこで新字の摘書が重要な仕事になつて來ます。次に語義に手をつけて、普通の意義が通じるやうにします。それから、精査・深究に入つて、文章法上の複雑な箇所、修辭法上の微妙な箇所を取扱つて、大意約習・應用といふに終るのが普通でした。文字は讀むために、語義は大體の意義を探るために、文法・修辭はなほよくその意義を理解する爲にといふのです。仕事は必然に仕組まれてゐるやうに見えますが、これで文を教へたとか、學んだとかいふには、あまりに淋しい感が致します。眼睛を點じない繪を見るやうな感じ

です。

教師中心の讀み方教授は、今から思ふと残酷に近いものです。先生が教授の目的を指示しては下さいますが、それは一時間見つめて進むことの出来るやうなものではありません。先生は因果必然の要求に應じて、仕事を按配して下さいますが、それが果して児童の上に必然であり、因果の関係があるかが不明です。それ

を教案といふ設計書によつて、逐次實行するのですが、時に教師の心持も、児童の心持も、全く教案とはちがつた流を生ずることがあります。すると教授はこゝに倒壞の悲境を見るのです。けれども小倒壞は、教師中心の教授には、たえず生ずることで、その都度色々苦しい工夫をめぐらすのです。管理といふことの必要なのは、特に教師中心の教授に多いのです。教授の進行が不自然で、注意のまとめ難い場合には、「手を膝において。」とか、「先生の顔を見て。」とか、教授事項とさらに關係なき事をくりかへします。管理に關する口數の多いのは、設計書——教案——の見込がひが、その主なる原因のやうです。

教師中心の讀み方教授が色々工夫せられ、研究せられた結果は、児童中心の讀み方教授を工夫しなければならぬことになりました。こゝにおことわり申しておくのは、教師中心の教授と、児童中心の教授は、標語が正反對のやうですが、發達の経路は、教師中心に児童中心があざなつて來てゐます。少くとも教師中心の教授が、その缺陷を自覺して、児童中心の教授を見出した時には、彼此相接してゐたのです。もし眞面目に讀み方教授を考へてゐた方がありましたら、私のこの所説には、必ず御同意だらうと思ひます。かういふ見地からいへば、教師中心の讀み方教授は、児童中心の讀み方教授を生んだともいはれます。新しいものをうちたてたといふよりも、彼は此の過程であつたと見るが、活社會の流轉として、意義が深いと思ひます。

児童中心の教授は、教師の目が内にむかつた所に、源を發してゐると思ひます。人は誰でも内省することによつて、尊いものは自己の生活であることをさとります。こゝに一切の事物、萬般の事象を徹見する、自己の存在することをさとります。自他不二のやうな感もおこります。人一度この感にふれると、児童をよそに見ることが出来なくなります。我には我が生活の尊きがごとく、彼には彼の生活以上に尊いものはないと

考へます。こゝに至つて、教師中心の讀み方教授は、一の罪惡をもつて目するやうになります。かつては二なき愛人のやうに、彼のために工夫し、研究したものが、弊履を以て目するさへ、快よからぬ迄になつて、つひに殻をぬぎすてたのです。それが洪水の大河が決したやうに、大抵の低い所は押流していききました。

反動は常に物の眞價以上に價をつける傾があります。教師中心の讀み方教授が爛熟の境に達し、その缺陷に堪えない感にみちてゐる所へ、殆んど全くその着眼點を異にする、兒童中心の教授があらはれました。その清新の感と、前者の缺點を補ひ得る豫測とは、これを禮拜し、讚美しても、なほかつ足りないやうに思つたのです。教育界はまづ驚異の眼を以て之を見、次にその清新の感をよろこび、さらに各自の生活を尊重する時代思潮の産物であることに想到して、これに走らざるものは人にあらずとさへ考へる様になりました。而してさながら手を翻すやうに、世は兒童中心の讀み方教授に流れていきました。

事實がかやう伸展していきますと、學者の之に對する理論は、一層深刻味を加へて、世人を喜ばせません。それがために今まで一向注意してゐなかつたことが、だん／＼注意されるやうになりました。兒童は兒童の世界に自己を見つめて育つことになりました。兒童中心の讀み方教授者はこの理論を得ると共に、安んじて驀進するやうになりました。

兒童中心の讀み方教授が唱道しはちめられた頃のことです。ある日これをつよく主張していらつしやるある先生の教室を參觀しました。時あたかも讀み方でした。先生は机間をまはつて兒童の質問に答へていらつしやいました。兒童の二三名は窓際に立つて外の體操をながめてゐました。おくれて來た一人が、帽子もとらず、先生に禮もせず、外套着たまゝ着席して、あたりの子供と話を始めました。教室内はまことに雜然

たるものでした。私は先生の顔色と、この場面とをあはせながめては、その苦心に同情しました。劃一の教師中心であつた過去の御經驗から、これを美しと御覽になることが苦しからうと。先生の顔色が幾度か晴れたり、曇つたりしました。けれども兒童の行動を抑制する事は絶対に仰せられませんでした。自由教育なるが故に。といった様な表情も度々見うけました。然し兒童中心の讀み方教授に、教師の内面的鬭争のある間は、似て非なるものではあるまいかと思ひました。近頃はよほど先生の腹もすわつて、教壇と靴の間に、すきが見えなくなりましたが、それでも時々無理があるやうです。教師と兒童の間にしつくりした融合と温味がありません。大抵の兒童中心の讀み方教授は、鈴の鳴る時が教授の終る時です。教授を主として考へるならば、あの鈴はうたないことにするか、鈴を主として考へるならば、仕事の一段落をつけることが大切だと思ひます。

兒童中心の讀み方教授に於てまづ力をそゝがれたのは、自學についての研究のやうです。種々の参考書によつて調べたことを、雜記帳に書取つて、一課に對して二頁以上にも亘る自習のあとを持つて來てゐます。稚い子供の努力として殊勝なことです。しかしこの學習法がいつまでつゞくかは、教師自身に内省すればわかる事だらうと思ひます。讀み方の學習が、文字や、語句や、事實調などに没頭して、精に入り、細に亘れば亘るほど、あさましい日が來るからです。

學徒の研究法は、必ずしも國語生活者の研究法と一致しないと思ひます。之は大なる議論の存する所で、私も今にはかにかうと言ひ定めようとは思ひませんが、兒童の性に即してといふ者が、學者の研究法を何等の檢覈なしに、兒童に強ひてよいものでせうか。御覽なさい、教授の際に教師と兒童の問答が、極めて活氣

のないことを。教師の間に對して、兒童が一々自習帳をのぞきこんで、結晶しないやうな、なまぬるい答を繰返すことを。私は甚だ奇矯の言を弄するやうですが、あれならば調べてこなかつた兒童が「知りません。」とか、「調べて來ませんでした。」とか、きつぱりといふ方が、國語としての眞價が十分であると思ひます。心なき人の課する自習、又は自習の處理は、國語教授にどれほどの價値あるものかを疑ひます。

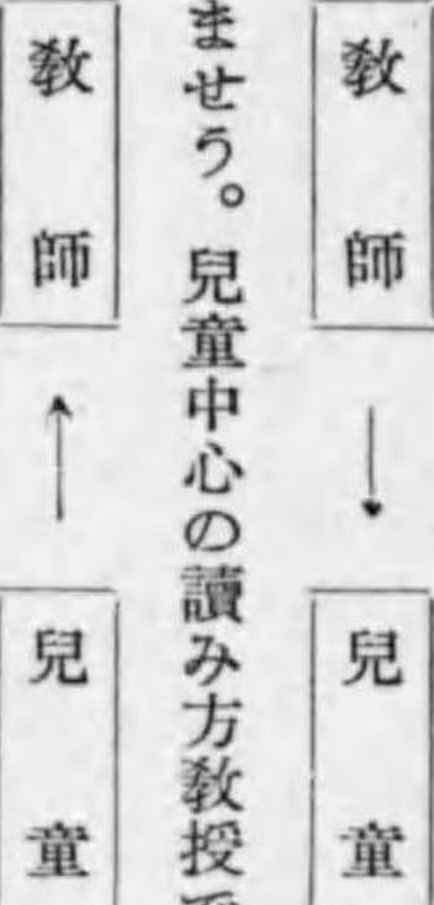
自習によつて拾ひ得た問題について、全級兒童が討議研究することが次に來る仕事です。甲の立言に對して、乙が言をさしはさむ場合、船人が多くて、船を山に漕ぎのぼすことが度々あります。それも船中の人になつてゐる兒童はよいとしても、乗り遅れたり、ことさらに乗らなかつたりする者の多い時には、甚だ異様の感をいただきます。討議は尊い研究方法ですけれども、事々物々討議の種になるやうでは、世の末です。今の兒童中心の讀み方教授を見ると、討議のために討議するといふ色彩が濃厚です。

次に先生のなさる輔導ですが、論議がかうじて、紛亂錯綜して來ると、論議以前の形に引返して、各自の信する所に従ふより外はあるまいといふやうに、まとめられる場合が多いやうです。見てゐては、「論議を盡してなほ論議存す。論議は眞を求める全き道ではない。」といひたいやうな氣がします。とにかく輔導の際に於ける先生の氣込を見ると教師中心時代の意氣はさらになく、當代の流行語をそのままに、「要なき事ながら言をはさませていただきます。」といった調子です。そのしをれた調子に兒童はつけこんで、先生の立言をつきくづさうとする事もあります。私は旺盛な兒童の活動をたゞへると同時に、眞理の光が群衆の聲によつて薄らぎ行く世相と酷似してゐるやうにも思ひます。

讀者諸君は、必ず私が兒童中心の讀み方教授に反旗をうちたてる者のやうにお感じになりませう。私は教

師中心の讀み方教授の中で育つて、その缺點を自覺し、徐々に殻をぬいで來たものです。さうして所謂兒童中心のすばぬけた讀み方教授を行つてみたことのないものです。その眞味はわからないのですけれども、虚心坦懐に見てゐて、兒童を解放したやうな長所の裏面に、前に述べたやうな如何はしいふしも見えます。もし私に兒童中心の讀み方教授に理解がないやうに見えましたら、それは實驗を持たない私の經歷が然らしめてゐるので、自分の愚昧をかなしむと共に、御寛恕を請ふ外はありません。たゞ兒童中心の讀み方教授研究者が、かつて教師中心の讀み方教授に缺點を發見されましたやうに、兒童中心の讀み方教授にも本質的に缺點があるやうに見えます。引ずつても、教師の思ふ所に兒童を引ばつて行かうといふ教師中心に缺點があるとしたら、兒童の行くがまゝに、教師がついて行かうといふ兒童中心にも缺點がありませう。引くにも罪があれば、押すにも罪がありさうです。教育はそんなに引いたり、押したりしないで、師弟共に向上の一路をたどるべきものでないでせうか。而もその間には、打てば火の出るやうな緊張が持続せられ、謙虛・満足・感謝の心持に運ばれるものではないでせうか。

教師中心の讀み方教授を圖解すれば、矢の方向は、



となりませう。兒童中心の讀み方教授では、

教師はむしろ受身でせう。そこで問題は當然流れて

↑ 教師

↑ 兒童

かうした圖のやうな教授がありさうに思はれます。これは論理的にせめあげたのではなくて、私が教師中心の讀み方教授に没頭してゐた頃にゑがいてゐた理想であつたと、この頃やう／＼氣がついたのです。

教師は兒童を教育することによつて、自己を向上させるのです。兒童は教師に導かれて向上の一路を辿るのです。師弟の間におかれる材料は、共に研究し、鑑賞し、批評する事によつて、双方發達の機縁となり、師弟相共に觸れる環境の一切は、師弟共に自然の大法を仰いで、自己究明の道にいそしむ底の教授がなければならぬと思ひます。

私の郷里は丹波福知山の近在です。今は福知山線が通じて、山陰線に連絡してゐますから、交通が至つて便利ですが、昔は不便至極の所でした。隣國但馬は牛の産地で、私の子供の頃は、博勞が一人で小牛を七八頭、或は十二三頭買出して來て、大阪街道を春の目永に通つたものでした。私はこれを限りなく面白いものと思つてゐました。角のまだ見えない牛が、大きな耳をばた／＼させて、ちよこ／＼歩いて行きます。そのはかどらない足にも、日に七八里はたしかださうです。時々廣い野に博勞は辨當を食ひ、小牛は思ひ／＼に草を食つてゐるのを見ることがありました。私は師弟ともに向上の一路をたどる讀み方教授を思ふ毎に、この但馬の小牛をそゞろに思ひます。志す所にむかつて、博勞の指導によつて歩を轉じて行く姿が、まことによく似てゐると思ひます。師を博勞に、兒童を犢にたとへたことは、甚だ不作法ですけれども。

この教授に何と命名しようかと考へましたが、國語を作ること——多くの人に承認せられる——は、甚だ困難です。それにつけても思ふのは、この幾萬とある國語は、我等の祖先が一々この生みの困難を味はれたものです。これを思ふ時、私は心から感謝の念が湧いて來ます。さてこの新教授法は、その傾向からいへば自然の大法に隨つたものです。誰が見ても、師弟共に研究してゐる様に見える、少しも無理を感じない教授です。その點からいへば、平凡の教授です。師弟共に向上の一路を辿る所からいへば、借調的の教授です。この意義と、この味ひと、温みを打つて一丸としたやうな國語を考へようとする時、私はしみ／＼私の無能を感じます。どなたでもお志のある方々、命名の勞をおとり下さい。これは切にお願ひ申上げておきます。

教授のかうした進展の道を、自然の流の上に見つけましたが、——現代の迷へる讀み方教授がこれによつてのみ救はれると信じてゐますが——不幸私の手には、これを實證し、坦々たる自然の大道を如實に表はして、人に證すべき兒童がありません。學級がありません。魚を水から引上げたやうなものです。泳ぐ術はあつても、泳ぐ場所がありません。教育者は教育すべき對者に離れては、公的生命はありません。教育者は教育の熱愛者でなければなりません。教育の熱愛者ならば、兒童と離れることは絶対にいけません。校長としてその器にあらずといふことならば、訓導となつて兒童と接觸を保つがよろしい。訓導としてその材にあらずとならば、小使としてなり、園丁としてなり、兒童と接觸を絶つてなりません。そこに偉大な教育の力が潜んでゐるのです。兒童と離れて、別世界に嘯く事の出来る人は、その昔或は教育者でなかつたのかも知れません。職業的であつたのかも知れません。少くとも教育熱愛者でなかつたことは明かです。私が朝鮮總督府編修官として、赴任いたしました當時、自ら願ひて、沐猴にして冠するものだと思ひました。官廳での高

等官は、その便所までがちがひます。椅子もちがひます。ねちでぐる／＼まはる椅子です。今まで毎時間白墨の粉にまみれて働き、遊戯時間には児童とかけまはり、教授準備の謄寫版刷から、教室の掃除まで、児童と共にやつたものが、いかに世のまはりあはせとはいへ、多少はあごで人が動くやうになりました。しかしこれが嬉しかつたり、得意だつたりするのは、全く皮相的のことです。私としては児童に離れたことが生命をけづりとられる寂しさでした。今までどんな堅牢な靴下でも、半月とは持たなかつたものが、いつまでたつても、破れるといふことがありません。破れないが、脂にしみて、はきかへなければなりません。その時よく靴下の破れざる悲哀、これがまことの教育者の悲哀だと痛感しました。この悲哀ばかりは生命に浸み渡つた悲哀で、俸給の少々多い位のことや、世人から受ける怪しい尊敬では、到底醫する事の出来ないものでした。今もなほその寂しさは續いてゐますが、慣れてはあきらめも伴つて、通學する児童を眺めて、時々たまらないなつかしさを感ずる位になりました。

私は新しい読み方教授を教壇上に移してみたさに、一策を案じました。まづ兵庫縣甲南の堤君、北海道小樽の沖垣君、京都市明倫の鹽見君に計りました。「一ヶ月君の學校に授業生として教鞭をとる事を許して下さいませんか。」と。理解ある三君は、私の爲に、かつは斯道のために、「便宜を與へよう。」と引受けて下さいました。あしかけ五年にして、たとひ三ヶ月でも、教壇上に復活致しますことは、私として限なき喜びです。いよいよこの試みによつて、私の新読み方教授が、多少安んずるに足るものとなりましたら、さらに知己の同情に絶つて、これが完成に餘命をさげようと思ひます。私は現に恩給生活者、生きていくに事を缺きません。たゞ児童の教授をまかせらるゝ恩恵に浴したいのです。

二 読み方の教材

○ 口ことば

口ことば

読み方の教材といへば、讀本の文章をさすことはいふまでもありませんが、その考察にすゝむ順序として口ことばについて少しく考へてみたいと思ひます。

私はいつもこんな事を考へてゐます。私の生れたのは明治六年一月八日の夜明方だつたさうですが、私が母體を離れる以前から、母と私を圍繞して、人々の語りつゞけたのは、この口ことばだつたでせう。私はいつ死ぬか豫定は出来ませんが、終焉の日にも、多分子孫や知人が、また私を圍繞して、何か彼か語りつゞけてくれるのは、この口ことばでせう。生るゝ以前から、死にての後まで、私の耳朶をうつものは、この口ことばです。口ことばと私の關係は、恰も最初の一呼吸から、最後の一呼吸まで、私が空氣と離れて生きられないやうなものです。空氣が身體の生活に缺くべからざるやうに、口ことばは精神の生活に缺くべからざるものです。ところが空氣が無代で自由に使用することが出来るために、その眞價が知れないやうに、口ことばも使用が自由なために、いかに尊いものであるかを意識しないものがあります。

口ことばのありがたみやなつかしきは、口ことばの通用しない所に行つてみると、よくわかります。支那語一つ知らず、露西亞語も全く通じなくて、長春からハルピンへの汽車に乗りこんだ私を想像して下さい。

口ことばの
なつかしき

車中露國のボーイが来て、何か喋々しますけれども、一語もわからぬ私は、たゞにこゝと彼を見上げて、切符と寢臺券を示すのみでした。すると彼は私の手をとつて、寢臺に導き、横臥すべき様を示していきました。身振はまさにエスベラントの一種だと、この時しみじみ感じました。たゞ困つたのは食堂に行くこと出来ないう事でした。これが二日三日と繼續するのだつたら、また新案エスベラントによるのだつたでせうが、午後二時か三時までのこと、旅に出ては半日や一日の斷食は珍らしくもありませんから、晏如として寝てゐました。しかし朝食ぬきの十五時頃には、何となく寂しきを感じて來ました。午後二時半ハルピンに着きました。我をとりまいた支那車夫のいふことが、一語でもわからばこそ、西しようにも、東しようにも手のつけようがありませんでした。助けるものの來るまで、ステーション籠城を上分別として、運を天に任せました。人も覺悟をきめると、存外落着いたものです。何處から我を見出したか、帽子の徽章に案内人と漢字で記した若者がかけて來ました。その文字がまづうれしうございました。「どちらへ。」といはれた時、それに答へようとする前、まづその人の國語を語り得ることを喜ばずにはゐられませんでした。「ハルピン小學校へ。」といふと、露國少年の馬車をさし兼ねて、同乗してくれました。案内料一圓、それは私が感謝にみちてさし出した壹圓でした。異域に於て國語に接した方は、私が「どちらへ」の一語を福音だといつても、音楽だとたゞへても、必ず否定はなさるまいと思ひます。

小學校については、「先生、よく來た。」と埼玉縣の本橋君にこゑをかけられて、知る知らぬは後のこと、まづその口ことばが嬉しくてたまりませんでした。紅葉屋旅館については、身のハルピンにゐる事も忘れて、足を伸してゆつくりねました。私はねてゐて靜かに考へました、「國語の行はるゝ所は、悉く我が領土であ

國民の全生活は口ことばに

る。」と。よしその地が何處に領有されてゐるとしても。さらに考へました、「日本民族が發展しようとするならば、國語を尊重して、その行はるゝ區域を擴張することである。」と。

國民の全生活は、常に口ことばに載せて取扱はれてゐます。善人が善事を行ふにも、悪人が悪事を行ふにも、事の正否を争ふにも、物の美醜を論ずるにも、すべて口ことばによつて取扱はれます。人の善事を傳へるのも、人の悪事を傳へるのも、皆口ことばによるのです。口ことばは國民の全生活の表現です。あまりに廣大無邊なものですから、まとめて考へるには私のやうな頭では不便ですが、考へても考へても、盡きることのない研究題目です。

私どもは國民の全生活に親しく接することは到底出来ませんが、國語にのせると、善人の生活でも、悪人の生活でも、雲上の御生活でも、細民の生活でも、すべて之を想像することが出来ます。國語あるがために國民生活に浸ることが出来るのです。全人類の生活に觸れることが出来るのです。一切の自然現象とも交渉を持つことが出来るのです。國語は智慧の慈母であり、精神的の血液です。私は純潔なる我が國語の中に、かうして日々生活する幸福をたゞへずにはゐられません。

私は國語を専攻したものでなく、識見もまたきはめて低劣なものです。國語に對して私が日常生活の上から考へてゐることを申し上げてみませう。國語はその大部分祖先の創作してくれたものです。それを代々使用し、改造し、うけついで來たものです。しかし私どもも亦創作し、改造し、之を次代に傳へるものです。言語學者の教へる様に、生命あり、生死あるものです。所が古きもの必ずしも死せず、新しきもの必ずしもいのち長からず。また改造に改造を加へて、原形を存しないまでになつて生きてゐるものもあれば、昔

私どもの持つてゐる國語

の姿をそのままに、今なほ生きてゐるものもあります。生死や生命のある事は、生物に酷似してゐますが、その生滅の様が生物とはまつたくちがつてゐます。これを靈的とでも申しませうか。

大昔に國語の創作された手續はどんな順序だつたでせうか。私は今の世に新語の出来る次第からおして、かうもあらうかと思ひます。まづ一團の人のあつまりがあるとして、その生活の上から、必要とする名詞・動詞・形容詞・副詞等に相當する、ある心的現象を生じた致しませう。それは團體の大多數が感じてゐるのです。けれどもそれは星雲のやうなもので、動搖不確定なものです。いひすえられた標識(國語)がありませんから、的確に思考することも出来ません。そのうちに誰かがその心持を鮮明に感知し、それをいひあらはして、標識としたとしませう。それが團體の何人にも共鳴して、如何にもさういひたい所だ。となることや、いひすゑられた形になつて通用しはじめます。それが次第に擴がつていつて、いよゝゝ動かぬ言語となり、通用區域が廓大せられて、つひに後世に傳はるのでせう。

國語の優秀な創作には、動搖がないが、二流三流の創作は、訂正し、補正されて、通用して行きます。言語の改造はその時々気分がもとゐるなすもので、生滅するのも亦そこから起るのです。創作は鮮明に感知した一人の仕事ですが、承認は團體全員のする事です。この點からいふと、承認者にも准創作的のはたつきがあるのです。餘談ですが、私は常に満二三歳の兒童が言語を習得する力の甚だ強いを見て、たゞ驚いてゐましたが、この頃孫のよし子——滿三年——が、苦もなく複雑な語を習得し、使用して、少しもあやまらなことを觀察して、單に記憶力の強烈に歸してゐた私の見解が、甚だはたらきの乏しいものであつたことにはづかしく思ひます。彼は言語の創作された當時の状態にさかのぼつて習得して行くやうに見えます。彼

新しいこと
ばの出来る
手續

國語の承認
者

は生活の必要から、いひあらはさねばならぬ心持を感知してゐる所へ、多年使用銑鍊を経た言語を得て、承認的創作といつたやうな調子でうけとるやうです。重荷を背負つた気分はなくて、創作のやうな心持で使用してゐます。故にその使用の大膽なこと、自信を持つてゐること、天下無敵です。生活なき場合は、記憶することは困難でせうが、生活が現存し、發表の必要を感じてゐる場合には、生活が即ち言語で、生活の準備として、言語を學習するやうな微温的なものではありません。私は孫よし子を師として、こんな事を屢々考へさせられるのです。

時代の推移とともに思潮もかはつて來ます。かはつた思潮や気分をあらはすに、もとのまゝの言葉を用ひてゐる事もあり、改造して用ひてゐる事もあり、新語を造つて用ひてゐる事もあります。語義なども嚴密にいへば、一日として同一な事はなく、語數なども日々ちがつて行く譯です。そこで國語教授上にも、大に反省しなければならぬことがあります。國語を浮いたものだとか考へてはいけません。國民生活の流轉をそのままに漂つてゐるものです。従がつて國民生活と國語の間は、血の出る程の眞剣さを持つものなのです。故に國語教授に故事や古典をひねくりまはして、時間を徒費するやうな時代はとくに過ぎ去りました。

世の中には學校教育をうける事の出来なかつた人で、目に一丁字なくとも、尙よくその思想活動共に教育をうけた人と伍して、少しも劣らない人があります。勿論異常の人です。私は異常人を以て通常人を律しようとは思ひませんが、さるにてもいかにして、かくまでに自己を育て得たかを思はせられます。その師は、その生活であり、また國語でせう。生活を直視して、専念道を求めるものには、國語は大導師です。ことにこの種の人に限つて、純潔な民族精神を育ててゐるやうに思ひます。勿論頑固なふしもあり、偏狭な點もあ

國語の變遷

國語に育て
られた人

國語の教育力

りますが、高い學校教育をうけた人々に比して、純潔さに於て、すぐれてゐる事を屢々感じさせられます。これは國語によつて育てられた國民的感情の當に然るべきことです。そこに國語獨特の尊さがあります。國語の發生には國民感情の一致が大なる條件です。その感情が出来上つた國語の上に宿つてゐるのが語感です。造化の三神を持つてゐるのは、日本民族太古の宗教思想の表現でせうが、天御中主神といふ語を以つて、その思想の標識とすると同時に、その動かぬ感に、尊くなつかしい感を持つのは、かくいひすゑた祖先以來の傳統的語感です。天照大神といひ、天つ日嗣といひ、日の御子などいふ語に、おのづからそなはる明るい感、尊嚴の感、蓋しこの國語の中に育つた日本民族以外のものは、うかゞふことの出来ないものでせう。語義は説明によつても、稍近いものが得られませうが、語感には歴史を要します。愛着を要します。私は毎朝目がさめて用ひる「お早う」といふ語から、「おやすみ」といふに至るまで、必要に応じて使用する數千萬語、悉く太古の我が祖先から生活即言語として使用して、我に至つたことを思ふ時、靈器を尊重するやうな氣分が、私の胸にこみあげて來ます。我は我の我にあらずとの情も浮び、この師の懐にいだかれて、我は純眞な國民とならうなどとも感じます。

語感

東洋には忠孝の思想が古くからあります。至誠を君に盡すを忠といひ、至誠を親に致すを孝といひます。その辭書的意義は、内地でも、朝鮮でも、支那でもかはりはありませんが、支那人に對して、私の持つてゐる皇室に對する溫い感情を承認させることは、至難といふよりは不可能です。朝鮮人に對しても同様です。國語の形は支那人・朝鮮人ともに自由にあやつりますが、語感の一點に到ると、到底似ても似つかぬものです。異民族に接してみると、國語の懐かしさをしみ／＼感じます。新聞の記事を讀んでゐても、日露・日支

外國語

の交渉などに、屢々わが國がペテンにかゝるやうに見えるのは、要するに外國の立言を、我が國語のやうに解して、我々が氣を揉むのではあるまいかと思ひます。純潔な國語を持つのは、國民の誇であります。それがために時々他に欺かれ、利用せらるゝことがあるやうです。

外來語を國語として取入れることは、彼我國民の往來が頻繁になり、互に外國文化の研究がすゝむにつれて、自然におこる必要ですから、國語の一進歩とも見るべきものでせうが、たゞ文化の程度の異なる兩國が接觸する場合に、他の文化を尊重する結果、自國語を卑しいものであるやうに、また外國語を使用することが一種の誇であるやうに考へて來ます。これは多少止むを得ない事情もありませうが、國民の輕佻な一面の發露とも見るべきもので、まさにいましむべき事と思ひます。東京女高師附屬小學校の主事北澤君が歐米漫遊の土産話に、歐洲戰亂の際、獨逸では外國語の出来る者の國民精神に、甚だ怪しむべき所があつたとかで、戦後國語教育を一層重んずるやうになつた。とかうかゞびましたが、浮いた心で外國語を學ぶもの、知らず／＼浸つて行く罪惡かと思ひます。

私が朝鮮總督府で普通學校の國語讀本を編纂してゐました頃、さる鮮人教師が私に「國語を朝鮮兒童に強く教授したら、朝鮮の民族精神は自然に鎖磨してしまふのではありませんか。」と聞きました。私が位置をかへても、問うてみたい問題ですから、私も深く同情して、親切に答へました。鎖磨といつては語弊がありませうが、國語教授が盛になれば、日本民族と朝鮮民族は次第に接近して、互に正しき理解を以つて融合するやうになりませう。それは併合といふ事から生ずる、當然の生活が産み出す自然の結果でせう。然し政策に國語教育を利用して、他民族を再び立つ能はざらしむるもの、朝鮮も今まさにその手に乗せられてゐるのだ

朝鮮民族に
國語を教授
したら民族
精神がほろ
びはせぬか

など考へるものがあつたら、それはあやまりです。日本民族の歴史には、外來語の爲に、可なり強い壓迫を受けた事があります。儒教・佛教の渡來當時、何等政治的の意義がなくて、隨喜渴仰の思で外來の思想に接し、外國語を迎へたのでした。聖德太子は憲法を漢文でお書きになりました。平安朝に紀貫之といふ國の守が土佐日記に「男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり。」と假名文書く事を恥ぢた程に、漢文が尊重せられてゐました。その中女流文學者は外國文の長所をよく取入れて、和文を作りあげました。徳川時代には最初漢文學を奨励したために、漢文が勃興し、これに刺戟されて、和文の研究が起り、國民が漢文や古文を學んでゐる中に、十返舎一九や、山東京傳等が、俗文を書きはじめて、朝を一方にとなへました。さらに明治になつては、歐米の文物が決河の勢で流れて來ました。英語が普通教育にまで取入れられました。すると一方には言文一致が氣勢をあげて、漢を排し、和を排し、日常使用の口語に立脚して、言文一致體の文を起しました。これから考へると、朝鮮兒童に國語を教授することは、國語によつて朝鮮語が整理せられ、進歩させられるといふ事で、夫が爲めに民族精神が銷磨されることはありません。もし銷磨される部分があるとしたら、それは民族精神の光ある部分ではなくて、或は暗い部分であるかも知れません。しかしかへすゝも自己を失はないやうにと注意しておきます。日本民族は漢文をうけとつて、これにかへり點をつけて、日本語として讀んでゐます。朝鮮では棒讀の支那をそのまゝのやうです。事大の精神でものを迎へたら、禍をなさないものは稀でせう。私は朝鮮民族が國語を學習するにも、自己を失はないやうにと切に願つておきます。」と説明しました。

私は言語學者のやうな綿密周到な説明は出來ませんが、ある民族が他の民族の言語を學ばなければならぬ

い事情におかれた場合、教へる者も、學ぶ者も、安んずべき統一地點をこの邊におくべきものだと思つてゐます。朝鮮の併合も、理由は色々ありますが、いはゞやむを得ざるに出たものです。日本・朝鮮兩民族が共存共榮、東洋の平和を永遠に維持しようといふが本旨です。白人が有色人種の植民地を持つなどいふ義とは、甚だしく異つてゐるやうに思ひます。したがつて朝鮮語がだん／＼整理せられて、同系の國語に近づくことは望ましいことです。序に一言しておきます。國語の擁護者日本民族は、つとめて自己修養に努めて、異民族に對する言動を慎まなければなりません。國語の品位は之を擁護する民族の品性によつて定まるものです。國語の流布は今後日本民族の修養如何に正比例するものだと思ひます。この事は發展的國民の切に注意しなければならぬことです。

國語は創作せられたものと、外來語をとはず、今日語られてゐるこの口ことばを、活力の最も強い尊いものと思ひます。もとより銑鍊の足らないといふことがないではありませんが、而も生活を表現する清新な眞劍味は之に上こすものはありません。私は時々世間話や井戸端會議を教育的に考察して、いづれも社會の教育的事實として、看過してはならない事だと思ひます。世間話は話題が自由選擇です。参加者の一人の語りだした話に、全體の注意がむくと、そこに話の花がさきます。そのうちに話は聯想をたどつて、だん／＼推移していきます。全く自然の勢にしたがつたものです。筋は全體を一貫してはゐないが、必要によつて運ばれる事は各節に十分あらはれてゐます。ことに参加者の語るにも、きくにも、全力を傾注することは美しい程です。第一義の言葉のみの用ひらるゝ世界といつたら、心のあつた同士の世間話や、井戸端會議の類でせう。

口ことばは
活力が最も
つよい

ことばの魂

こゝまで話をすゝめて来ると、國語は聲のみをさしてゐるものでない事は勿論です。内容をこめていふものであることはいふまでもありません。所で蓄音機のどんな巧妙なのをきいても、ラヂオの放送局で今吹きこんでゐるそれをきいても、かうした機械の力では、到底傳はらないものがあるのではあるまいかと思ひます。蓄音機で鍛太夫を稽古して、巧妙にその癖と長所を語る人があります。けれどもそれは鍛の歌としては聞けるが、鍛の力はありません。鍛の力は鍛につかなければ學ぶことが出来ません。その人につかなければ學ぶことの出来ない、傳へることの出来ないものは何でせうか。よく今の若い人々が心の叫だとか、魂だとかいひますが、それでせう。西田天香さんのおつしやるお光りといふものでせう。一語一語にお光があるなどいつては、天香さんのお叱を蒙るかも知れませんが、言々句々に人の光がかゞやくといふことは、理想の世界には當然でせう。とにかく人の語ることばには、音聲や内容の外に、一種の魅力があります。これが語る人の生命であり、ことばの生命です。

魂のこもらない言葉

魂のこもらない言葉の適例は、遊覽地の茶屋の女が機械的に繰返す、「一服召していらつしやい。」とか「お座敷があいてをります。」とかいふあの言葉です。誰でも心の底まで見えすいた輕薄なことばとして、不快の感こそおこせ、誰も之に引きつけられるものではありません。電車の車掌のことばの中にも、魂ぬきのが少くありません。たとひ職掌柄で繰返すことばであるといつても、全人格をこめて、「まがりますから御注意を願ひます。」といつたら、誰でも感謝して聞くにちがひない。それが蓄音機代用の様ないひ方をするから、誰でも「あゝ、冷たい。」と感じます。それが度重なると、氣の早い江戸兒は、他人の問題まで引受けて、車掌に食つてかゝる様な事になります。必ずしも遊覽地の茶屋女や車掌の言葉計りではありません。銀行員が事務

黙

的につかふ言葉も、多くはそれです。人を導く和尚様の説教にも、小學先生のことばにも、随分お座なりのものがあります。お光の乏しいものがあります。もしこの世から、魂のぬけた事務的のことばを一切放逐したら、そのことだけで、なつかしい世の中にならうものを。人は存外一語一語について無關心なものです。言葉の形骸を平氣でつかつて、我人ともに怪しまないのが不思議です。

言葉にこもる心の叫をきく所に、微妙な味があります。叫のない時には黙するがよろしい。黙は叫のないといふ叫です。國語の教育にこの點が考慮されるのは、實に大なる發展です。叫なき時には徹底黙し、叫ある時には徹底叫ぶ。そこに國語教授の潑刺とした勢を示すと思ひます。私は甚だ我田引水のやうな言分ですが、國語教育がその眞に徹しなければ、教育は論ずる事が出来まいと思ひます。

口ことばは讀み方教授の基礎

讀み方教授は師弟ともに日常の言葉を尊重し、注意することから始まらなければ、眞の成績を收めることは出来ません。いかなる名文でも、魂のこもつた口語の上に浮べて見なければ、その眞義をさとることは出来ずまい。さるにても口語の久しく虐げられたることよ。俗語といはれ、いやしい言葉とさげしまれまし。もし俗といひ、賤しといつた者に、これが使用を嚴禁したら、必ず狂疾を發したことでせう。その思想を踏襲してか、今もなほ口語を輕んずる傾があります。過去に生きんとする人は知らず、いやしくも未來に生きんとする人は、この口語によつて、多くの人々の魂に觸れ、自己を育てることにとめなければなりません。これによつて自己を教育する基礎は、漸次ふみかためられて行くのです。

私のこの立言は、私の狭い／＼環境からうちたてたものです。國語教授が既に五十年も研究せられて、なほ動搖がはげしく、歸結點に遠ざかつて行くのを見て、この一大缺陷——私にはさう見えてなりません——

國語教授の缺陷

を指摘したので。囊網ふところの尻ををむすばないで地引をしてゐる漁夫があつたら、世にも愚なものでせう。これが果して眞の缺陷であるとしたら、斯道專攻の學者は、迷へる群のために、特に御研究がお願い申したうございます。

○ 讀本の材料

讀本の編纂と私との關係は、可なり久しいものです。明治三十一年京都に第四回内國勸業博覽會が開かれた時、京都市教育會の企で、小學校創立三十年記念會を催しました。その附屬事業として、小學讀本編纂法といふ懸賞論文を募集しましたが、その頃園部の小學校にゐた岩内誠一君が當選しました。私はその時窺かに、「自分も讀本について立言するやうになつたら。」とうらやましく思ひました。

爾來轉々、東京高師に奉職するやうになつて専心國語教授について考へてみましたが、讀本の編纂は漠として考へやうがありませんでした。十八年奉職してゐるうちに、讀本が三度かはりました。その二度目の讀本——今の修正讀本の前身であつたと思ひます——が出た時、國語部でこれが研究をはじめ、甲是乙非議論様々でありました。私は席末にあつて、「讀本の批難は私には出来ない。自分一流の讀本論があるでもなく、それかといつて、時間を與へられても、之に匹敵するだけの讀本を編纂することは覺束ない。僕は讀本に盲従して、その取扱方を工夫する。」と聲明して、その後は讀本についてはさらには是非の言をさしはさみませんでした。これは當時の偽らざる告白です。しかし批難をしないといふことは、讀本を是認してゐるのでは勿論ありません。批難する力のないことを自覺してゐるだけです。

讀本の一課々々はどうなり取扱つても、教材全體を通じてまともな考を持つてゐない寂しさは、地圖なくして知らない土地を旅行するやうなもので、その不安さはお話になりません。けれどもそれが生命にかゝはるやうな問題でないだけに、なれてはかうしたものとのあきらめも伴つて、その問題を束ねて、手のつけられないもの——文部省に一任——として、すますやうになりました。この心事はたゞに私一人のみではなく、可なりな讀み方教授研究者も、同じ心持ではあるまいかと思ひます。言ふか言はないかの差でせう。

現行國語讀本の編纂が始まつた頃、八波・高野兩圖書官の間に、寄人といふ格で、幸田博士と私が参加しました。博士は材料について、私は取扱についてといふので、陣容がとゞのひました。私は何よりも讀本編纂學校に入學した氣で、週に一日讀本編纂室に通ひました。私が讀本について多少の識見を持つやうになつたのは、兩圖書官のおかげです。ことに高野先生にはよく叱られたものです。と同時に私もよくぶつかつたものです。唐竹割に兩断せられるのは痛快でした。晩年の師として私は景仰してゐます。お宅を訪へば、お酒が出る。飲めば酔ふ。談論風發、受身と相場は極つてゐても、踏みとゞまつて食ひつく事もありました。きれ味のよい所で、ばつさりやられる。そこで呵々大笑と來る。その後は室は笑にみちて、時を超越して來ます。先生の舌も怪しくなれば、私の目元もうとくして來ます。御迷惑なのはおく様ばかり。しかし讀本編纂學校の修行はかうしたものでした。

五年文部の讀本室に通つた、大正十年の初夏の頃かと思ひます。時の朝鮮總督府の編輯課長小田さんが、吉岡先生——當時第五高等學校長——の紹介で、私を東京高師の附屬小學校にお尋ね下さいました。「朝鮮總督府の編修官に任用したいが。」との事でした。私はかねてから年五十を公的生活の一段落としてと、堅く決

心してゐましたから、今更高位高官のつとめもつらいと、一旦は御辭退申しましたが、縁は異なるもので、その年の十月十日、京城旅舎の一室に、私はいかめしい肩書をもつて起居することになりました。

その途次熊本によつて、八波先生の御教示を仰いで行きました。八波先生があぶなかしう思召したらうとは、今思つても冷汗が出ます。朝鮮讀本は八波先生や吉岡先生の御指導によつて、まとまつたといつてもよい位です。さて多くの教訓を背負つて、朝鮮に渡りましたが、教へられたものは、いかにそれが高くても、深くても、到底我がものとして使ふことは出来ません。そこでよし螢ほどの光でも、内からそれを研出しなければなりません。さうなるとそこには無い物を産まねばならぬなやみがあります。下宿の一室に、七日・十日・二十日・一月と、その苦しみは實に甚だしいものでした。汝、編修官といふ。編修に關する所信いづこにありや。内からのこの呵責には、謹んで詐偽の罪を謝して、本國に立歸らうとまで考へたことが幾回でしたか。

然し、東京驛頭に十八年間の教へ兒や、その父兄や、知人・朋友や、縁者など、四百の人に送られて、萬歳を浴びせられたその刹那を思ふと、朝鮮海峡を手を空しうして歸ることは出来ません。私は本來退いて安きを求めるよりも、進んで危きを冒すが好きですから、こゝでも「行ける所迄行くさ」と腹をきめました。それからは専心讀本の編纂について考へました。時間は私を育ててくれました。私としての讀本編纂の意見が、だん／＼にまとまつて來ました。

朝鮮の在任を三年と定めてゐたのですから、第一年に六冊、第二年に四冊、第三年に二冊をまとめて、歸つて來ようと思へました。最初の一年半に六冊は出來ました。次に四冊をと考へた時、讀本はまづ八巻まで

を第一期として、あと四冊は第二期にといふことでした。どうした理由か知りませんが、それでは自分の任期を半年くりあげて、引上げることが出來ると考へました。第二年に二冊作つて、年末に歸京、明けるが早いか辭表を提出しました。けれども残務がありましたので、四月免官になりました。

大正十三年五月のことでした。文部省の圖書局長西河さんからお電話がありまして、南洋の國語讀本を編纂してくれないかといふことでした。ともかく南洋群島を一見してくれといふことでしたから、六月二十八日神戸乗船、七月一日門司出帆、五日小笠原の二見港寄港、九日サイパン着、一日碇泊、十三日ヤップ寄港、十四日パラオ着。こゝに三泊して、アンガオルにいつて來る我が船を待合せ、それで再びヤップ・サイパン・二見と寄港して、二十八日横濱に入港しました。パラオの南洋廳に出来ました時、事務囑託の辭令をうけて、いよいよ南洋群島國語讀本の編纂が正式に私の仕事となりました。

仕事の範囲もきまりました。本科一年・二年・三年用三冊、補習科一年・二年用二冊、その頁數本科一年用百二十頁、二年用百四十頁、三年用百四十頁、補習科一年用二百五十頁、二年用三百頁、以上九百五十頁の編纂・挿畫・印刷・校正・製本までを、大正十四年三月末日までにといふことでした。あます所僅かに八ヶ月、三面十臂の藝當です。この機をはづしては、南洋廳でも讀本の改訂がいつまでのびるか知れないし、私としても讀本一冊に修身・地理・歴史・理科までを含める讀本、萬能讀本を工夫してみたかつたし、かた／＼任せよう、引受けようと、話がまとまつたのでした。思へば無謀のきはみです。たゞ時間の不足なために、推敲や校正の手落は申譯がありませんが、新傾向の讀本の備を南洋に作つた私の満足は、いかなる批難も償つてあまりがありません。目のある人があれを一二回改訂したら、南洋の土人は可なり質のよい國語讀本

を持つことになるだらうと思ひます。

私は私と讀本編纂の因縁とを考へて、何かは知らず、感謝の念が湧いて來ます。文部の讀本室に通つたのが縁となつて、朝鮮總督府編修官に任用せられ、それが縁で、南洋廳の囑託となつて讀本の編纂に従事しました。十年以前にはこんな夢すら見たことがありません。今は現實に小さいながら足形となつて残つてゐます。ことに朝鮮では「讀本は足の裏で書くものだ」といふを標榜して、南鮮・北鮮・西鮮の目ぼしい所は見來ました。鴨綠江を越えた南滿洲から、北滿洲のハルビンまでのぞいて見ました。豆滿江を越えて間島にもはいつて來ました。馬賊のことを聞いたり、朝鮮ゴロや、滿洲ゴロや、西比利亞ゴロにも接したりして、私の處世觀を是正したことが幾何か知れませんでした。日本人の美質や、日本國のありがたさも、深刻に感じて來ました。同時に日本人の神經質な、こせこせした、意氣地のない所も、目のあたり見て來ました。私が殘年を國語教育——讀本の編纂とその教授——に捧げようとするのに、どれ程の心強さを與へたか知れませんが、私は昨今私がかうして生きてゐる意義をやゝ鮮明にさとりました。私は少しの遲疑もなく、これに驀進します。世評はこれを人にまかせて十分です。

さて讀本をその用の上からなげると、どう見ても、讀み方教授の方便物です。こんな事をいふと、編纂者は、目に角をお立てになりませう。けれどもそれは眞實の事です。方便物とは從屬的のものゝ義ですが、從屬的であるがために重要でないといふことは出來ません。あだかも長官と屬官のやうなもので、長官が屬官のために生き、屬官が長官のために生きてゐる事を思へば、必要に差はない譯です。かう申しますと、讀本を方便物とする主體は何かと問はれませう。それは教師です。教師の國語に關する力です。この力で讀本

讀本は讀み
方教授の方
便物

を方便として、兒童の讀む力を養ふのです。所が世の中には、石が流れて木の葉が沈むやうなことが多く、讀本に引きずられて、讀み方教授を行ふ教師もあれば、之を教授細目にあはせて、過不足なく傳達することを、讀み方教授と心得てゐる先生もあります。監督官も教師をこゝに追ひこんで、優良たらしめようとする傾があります。讀み方教授が存外生氣の乏しいのは、この本末顛倒に起因してゐます。勿論弱い力の教師が井蛙の見で、我がまゝをふるまふのもほめたことではありませんが、自己をみつめてゐる者は、そこに些のくるひもありません。井蛙が井蛙の見をすてゝ、何處に生くべき道がありませう。たゞ我がまゝをしなければよいのです。謙虚であればよいのです。そこに生にひらめく眞研究が發芽するのです。

もし讀本をその質の上から考へたら藝術品です。編纂者が最善の努力をもつて、いかなる國民が今後最も幸福なるべきかといふ見地から、材料を精選し、これを兒童の生活に響きやすいやうに順序し、取扱上等にも工夫して、少くとも一卷の編纂修了のその利那は、最善最美の物として、之を印刷者に交附するのです。編纂者の生命をうちこんだ物です。その生命は教師の國語の力によみがへつて、兒童の上に流れるのです。思へば讀本編纂といふことは、意義の深いことです。よい讀本を持つか否かは、國家の消長に大なる關係があります。

讀本を編纂するにはまづ材料をあつめます。一材料々々々をよく吟味して、語法の不正を正し、流の不純を改めて、しかも文中に響く作者の叫を、いよ／＼鮮かならしめるやうに工夫します。朝鮮の讀本では、材料について討議する場合にも、文の叫については作者の主張を尊重して、最後の決定は作者に任せるやうにしました。さうして材料が三四十あつまると、こゝに一卷の編纂がはじまります。これは多勢では出來るも

讀本は藝術
品

のではありません。編纂の責任者が、二日も三日もその材料とにらみつくらしをして、これを第一位に、これを末位に、これを中軸にと、前にしたり、後にしたり、様々に工夫して、それが背景となる想、いかなる朝鮮人が、今後最も幸福なるべきか。といふに交響をきくまで、さしかへぬきかへて苦心するのでした。私はその任にあつて、夜をふかしたり、未明におきて考へたりしました。その度が重なると、文の叫をまぎ／＼と聞くのでした。生きてゐる文を見るのでした。さうして材料の位置が定まり、時には二三材料のさしかへによつて、全巻が借調的になるのでした。生命の流をも見るのでした。私はこんな心持で讀本の編纂に従事しました。

かうして原稿がまとまると、私はそれを清算することを怠りませんでした。一の巻は初経験ですら、清書が十回にも及んだかと思ひます。二巻以下も六七回は必ず清書しました。清書は推敲の最上方法です。ことに文の叫をきき、生命の流を見ようとするには、讀み行くのでは深刻味が伴ひません。したがつて文の機微には觸れません。筆端で讀むのにかぎりません。

かやうには申しませんが、朝鮮の讀本が、他の讀本に比較して、出来がよいといふではありません。私としてはこれ以上のものが作れなかつたといふだけです。かうして批難をうけるならば、安んじてそれがうけられるといふまでにしたのです。蟹は甲に似せて穴をほるといひます。人間の仕事はそれを安心の天地としなければなりません。この苦心をしたものには、はじめて他人の苦心がよめます。眞に謙虚な心持になることも出来ます。

讀本と編者

かやうに考へて來ると、讀本は編者を異にすれば、かはつたものの出来るのは當然です。同じ文部省の編

纂でも、明治七年の田中義廉氏編輯・那珂通高氏校正の小學讀本、所謂翻譯讀本から、明治十九年伊澤修二氏によつて編纂された尋常小學讀本、所謂模倣讀本、それから民間讀本の簇出中でも、坪内博士の富山房から出た讀本、所謂趣味讀本、教科書事件の醜態を曝露して、その結果國定となり、その第一期に出た吉岡先生の編纂せられたイエスン讀本、所謂語法讀本、その第二期に出た芳賀先生の編纂せられた讀本、所謂古典趣味の讀本、現行の國語讀本修正讀本まで、仔細にながめて來ると、編纂者と讀本は離るべからざる内的關係があります。この事實を眞面目に考へる時、讀本編纂に關して、國家はもつと慎重に研究しなければならぬものだと思ひます。

我が國に讀本論ありや

私が常に飽きたらず考へてゐることは、我が國に新教育がおこつて既に五十年、讀本の編纂については、文部省及び民間を通じて、幾度か経験を重ねて、而も一篇の讀本論なく、一の編纂趣意書らしいものもありません。もし少しくまとまつたものを求めたら、三土忠造氏が東京高師の卒業論文、讀本編纂法——茗溪會雜誌の古い所三號かにわたつて出てゐます——があるきりです。それほどこの事が不急のことかと思ふと、可なり我が教育界も眞面目を缺いてゐると思ひます。文部五十年の経験をまとめて刊行せられても、立派な讀本論が出来ませう。それが小學教師の讀本に對する眼を開く上に、大なる効果があらうと思ひます。當にあるべきこの讀本論すらない我が初等教育界は、甚だ寂しいものであると同時に、遺憾とすることが少くありません。

無記の讀本

そこで讀本の問題は、いかにして材料を選択すべきかといふに移らなければなりません。もし私をして思ひきつた立言を許さるゝならば、人間を圍繞する一切の自然・人事、これは無記の讀本であるといつてみた

いのです。記した讀本の先驅をなす讀本といつてみたいのです。その無記の讀本は吾人の祖先がまだ猿のころをしてみた頃から展開されてゐて、これを目でよみ、耳でよみ、口で讀んで來ました。それが祖先の生活といふものでした。それが時の流につれて、社會となり、國家となり、だん／＼に進歩して、今日に至つたものです。音聲を媒介として思想し、談話したものが、文字を媒介として讀んだり、綴つたり、考へたりするやうになつて、記された讀本が出來たのです。讀本は展開された環境から選ばれた模式的のものを記したものです。環境によつて生活が律せられ、自己の力によつて、生活がいつも向上の一路に導かれることは、何人も経験する所です。讀本はその環境と自己との間に介在するもので、これによつて環境が模式化され、自己が生活に對して向上するやうに基調づけられるのです。いかに基調づけらるべきものかは、今後の國民はいかにあることが最も幸福であるかといふ事によつてきまるのです。そこに編者の人生觀が加はり、時代の推移による大なる支配をうけるのです。讀本論はまさにこの邊に源を發するものではあるまいかと思ひます。

原始的生活は兒童は、入學前に経験するのですが、入學後に於ても隨時隨所に展開せられてゐる自然の讀本は、活眼によつて之を讀破する事を努めさせなければなりません。自由教育の眞領土はこゝです。勿論模式的材料によつて、生活の基調に培ふ場合にも、自由教育の義を失つてはいけません。便宜上師あり、學友あり、さうして共に研究學習する場合には、個人で研究し、學習するのは事情が違ひます。ゆく／＼社會の一人となり、國家の一員となる兒童には、事情の許す範圍に於て、自己の最善活動を營む修練をさせる事が大切なことです。入學後はとかく記されたる讀本に眼がくらんで、それが自然に展開せられてゐる無記

の讀本の上を開けてあることに心づかない者があります。甚だしきは選ばれたる模式材料で、自己の生活が基調づけられるのだといふ事を知らないものすらあります。それで語句や文字にあくせくして、眞精神を逸してゐるかと思はれるものがあります。これでは読み方教授が不完全な辭典・字書位な仕事より出來ないのは無理もない事です。

問題は面倒になつて來ました。國語萬能をとへる下心ではないかと疑ふ方もありませう。何事の研究者でも、自分の畠を生活の全部と考へる傾があります。私としては國語以外のことは全くわからないから、これが全部だと思ふのはあはれむべき一面で、また同情すべき點でもありませう。私は私のこの弱點をよくよく知つてゐますから、國語萬能などいふことは決して申しません。然し自然に展開せられた讀本を見ると、その中には動植礦をはじめとして、有機無機は一切、人間萬般の科學が生きたる形に於て露頭してゐます。深い科學はその道を専攻しなければわかりませんが、この間口の廣い科學は、各科學研究の態度を定めるには十分です。研究は人間生活の一部面ですが、生活全般に對する態度も、また読み方教授によつて定められるものです。國語は智識の慈母ですが、國語教授は智識傳達を目的とするものではありません。生活の全般に對して、人生の意義を悟らせるものです。故に読み方教授はどの教科にも隸屬してゐるものといへるが、一面にはどの教科に對しても、これを學習する基調を整へてゐるものともいはれます。

さらに補充讀本や中等程度の讀本を見るに、文學に偏した材料が多く採つてあります。或は各教科が分立して、各程度深く研究の歩をすゝめるのだから、讀本文學方面を分擔すべきだといふ見地から、文學を重んずるのかも思ひますが、果してさうだつたら、私の所見とはちがひます。しかし文學といふものが、人間

讀本は文學
に偏すべき
ものか

の全努力を傾倒した、後我の境地をあらはしたもので、たとひその事が研究であらうとも、労働であらうとも、主義主張の立言でも、冒険でも乃至探偵であつてもかまはないといふならばよろしいが、もし文學を感情の畠に限るといふならば、讀本の使命をせまい天地に限りたくないと思ひます。やはり全生活の基調に培ふといふことを忘れたくはないと思ひます。

以上私の所説をふまへて、讀本にはいかなる材料をとるべきかを陳べなければならぬ事になりました。そこで私としては朝鮮の讀本と南洋の讀本を編纂した時の思ひ出を書くより他に何物もありません。勿論系統だつたものではありませんが、何かの御参考にもと書いてみませう。

まづ信仰に關する材料について申しませう。人として信仰なきものは、殆んど向上といふこともありません。それは必ずしも朝鮮人とか、南洋土人とかに限つたことではありません。私がこゝにいふ信仰とは既成宗教を信ずる義ではありません。自然の力の偉大なことを信じて、太陽の無邊なる功德を渴仰してもよいのです。とにかくその力の前に、衷心禮拜するものであればよいのです。さうしたものを内に持つてゐる人とゐない人とは、生命ある人と生命なき人の差です。そこで今日にのみ生きてゐる人には、享樂主義とか、耽溺生活とかが起りますが、今日の生活を永遠の生活の一部と考へる時に、一言一行を慎む心持を生じ、緊張する氣分が湧いて來ます。私は自然の力の偉大を信じ、自己の微力を信じてゐますが、まだ禮拜の止むにやまれぬといふ境地には到達しません。いづれの時か手を合せる時が來ませう。頭をさげる時が來ませう。その時は私の信仰が純化されるものと思ひます。

明治・大正の新教育は、禮拜といふ方便から信仰に入らうといふには不適當な教育でした。偏智教育とか

信仰に關する材料

いひます。この洗禮をうけた者は、理智を最上のものとして、何でもこの試験紙に浸して見ようと思ひます。酸かアルカリかで、試験紙に反應するものはよろしいが、反應しないものまでも、これによつて驗しようと思ひます。それは當代人の教育によつて受けた色彩です。幸か不幸かといつてみたいほどです。かういふ時代には禮拜を強ひるよりも、内から宗教を樹立する法、即ち道を内に求めて、これが自然の大道に合致する事を悟り、その信仰が進んで、親しみを持つと共に、それを人格化して、圓滿具足の佛陀とし、神として、禮拜するやうな傾向をとつて進ませるのがよいのではあるまいかと思ひます。

信仰は説明を許さないものです。故に信仰材料は信仰ある人の境地を知らせるより外に道がないと思ひます。信仰ある人の境地は、いかなる場合にも美しいものです。田夫・野人の行動も、其場合は神です。佛です。人類はさうした話にあこがるゝ本能を持つてゐます。その點は教育上特に注意を要する事です。私は朝鮮の讀本に、博多の七里恒順師をとりました。今日の朝鮮人に信仰を培ふ事はかの民族を向上させるのに、大切なことと存じます。種々なる煩悶に逢着すべき事情にある民族は、人間のきれいな境地をうかどはせなければなりません。それはあきらめのためにいふではありません。悶々として自暴自棄に到達せしめない爲です。そこに民族として永遠の目標を認めて、新しい力を養はせるためです。朝鮮の佛教は政策上儒教の下におかれた歴史があります。七里恒順師をとつたについて、その當時すでになぜ儒教からとらなかつたか耶蘇教から採らなかつたか、ことさらに鮮人の輕侮してゐる僧侶からこれを探つたかとの批難も受けました。が、私は近代の儒者には七里和尚ほどの境涯を見ないので、採らなかつたといふまでで、別に儒を貶したといふ譯ではありません。近代の耶蘇教徒にも亦七里和尚ほどの境涯を見ないので採らなかつたのです。こと

に朝鮮の耶蘇教は、とかく物議を惹起する傾があるとかで、教義をたてに反抗の氣分を煽るとか噂してゐます。私はいかなる名に於ても、朝鮮人を煽動して、反抗氣分を助長することは、その耶蘇教徒であると、儒教徒であると、佛教徒であるとを問はず、鮮人を眞に思ふ所以ではないと思ひます。私も可なりきれいな血もあり、涙もある日本民族の一人です。祖國が併合された鮮人の遺恨を察知せられない程の鈍感でもありません。けれども鮮人の反抗は、自ら絶滅に走る道です。朝鮮民族の爲には今日は、小文天祥はいりません。悲歌慷慨はつひに滅び行く道です。大文天祥が出て、安んずべき天地に民族を導いて、その發展を企劃し歩武堂々靜かに朝鮮のためにはかるべきだと思ひます。私が耶蘇教徒から信仰材料を採らなかつたのは、誤解をおそれたからです。もし千萬人中一人でも誤解者を出したとしたら、それは耶蘇教徒に對して大なる非禮です。私はそれを深く／＼おそれたからです。

私は今も時々思つてゐます。露國の赤軍に追はれた白軍の避難民七千五百人が元山港に入港して、日鮮兩民族の同情に、やうやう生きる道を見出したのを親しく見た時、「赤化思想が韓國時代の朝鮮を襲つたら、これにも増した悲劇が、所々に演出せられたのではなかつたらうか。」と。渦中の人は自分のまはつてゐることを知りません。私は虚心坦懐、「いかなる朝鮮民族が今後最も幸福なるべきか。」専心思つて、讀本を編纂しました。鮮人がこれを見て、或は政策的の言だといふかも知れません。もしさういふ人があつたら、私は國語を用ひるに第一義を以てすることを一言すれば十分です。

さて七里和尙のお話を申し上げます。私は嘗て福來博士に和尙の話に似よつた話をききました。朝鮮に赴任して、加藤咄堂氏の話材教材中に、恒順師の話を見出しました。私は早速朝鮮讀本の材料とするために、内

露國の避難民

七里和尙

地に出張して博多に來ました。さうして七里恒順師の御子芝順師に面會して、親しく教をうけました。まづ來意をつけると、芝順師は「何處でその話をきゝつけて來ましたか。」と不審がられました。「その話は父がなくなる二三日前、枕邊にゐる私だけに話したので、その時まで家のものも誰一人知らなかつたのです。私もその事をきいたきり、今日まで誰にも話した事ありません。それがどうしてあなたのお耳にはいつたのでせう。」といはれますから、私は「盜人の口からも、役人の口からも漏れたでせう。」といつて、話材教材にのつてゐた筋を話しますと「なるほど、話が二つ三つ一緒になつてゐます。父の話しました話は。」といつて、話して下さつたのは次のやうでした。

「ある夜泥棒が忍びこんで、『起きろ／＼。』と父を呼びさしました。父が目を開くと、覆面抜刀の大的男が立つてゐます。父が蒲團の上にすわると、『金を出せ。』といひます。父はしづかに『金をだせといふことはわかつた。しかしお前は見た事のない男だが、他人の家にはじめて來て、拔身をさげて挨拶をする法があるか。』といひました。すると泥棒は早速刀をさやにをさめました。父は徐ろに立つて『こちらへ來い。』とさきにたつて、泥棒を奥の一間に伴ひ、『その用單司に金がある。ほしだけ持つて行け。』といひました。すると泥棒は引出しからありつた金の金を出して、みんな持つて逃げて行かうとしました。父は急に呼びとめて『その中には、明日拂はなければならぬ金がある。これ／＼は残しておけ。』といひますと、泥棒はそれを勘定して、もとの引出しにをさめて逃げ出さうとしました。父はまた呼びとめて『お前はまことに心得のわるい男だ。早く本心に立歸れよ。悪事はいつかあらはれる。あらはれた日に悔いてもおそいよ。人に物を恵まれたら、一言の禮をいふすべぐらゐは、知らなくては人ではない。』と弟子にでも物をいひきかすやうに、懇に

話しました。すると泥棒は両手をついて、叮嚀に「ありがたうございました。」と禮をいつて、金をさらつて出て行きました。

しばらくして町奉行所からさしがみがつきました。父は何事かと出頭して見ると、「萬行寺に泥棒はいりましたでせう。」との事です。「いいえ、はいりません。」といふと、役人は「おかくしになるには及びません。既に犯人が自白してゐます。」とのことです。父は「たとひ犯人が自白致しましたが、萬行寺には泥棒はいりません。」と申しました。これをその傍にゐてきいてゐた細付の泥棒は、父の足許に轉がりこんで「和尚さんは泥棒はいらないとおつしやるが、私はぬすみにはいつたのです。」と申しました。父はその顔をつくづくと見て、「さういへば見覚えがある。けれどもあの夜私が金をくれたら、お前は叮嚀に禮をいつて歸つたではないか。人に物を貰つて、禮をいへば、それは盗んだのではない。」といつて、父は歸つたのださうです。

「父が私に話したのはこれです。私は今日の今まで、人に語つたことがありませんから、この話は言行録にも乗つてゐません。」との事です。私は讀本を足の裏で書きたふとさが、こゝにもうかゞはれてうれしうございました。

私はこの話をきゝながら、若い頃に讀んだ「噫無情」のミリエル僧正をそゞろに思ひ出しました。悪漢チヤンバルチヤンが警吏の壓迫に宿るべき所がなくなつて、つひにミリエル僧正の宅にとめてもらひました。苦役幾年、しみく改心したチヤンバルチヤンも持つて生れた魂は致し方のないもので、夜中たゞ夢心地に銀の燭臺一基をかすめて逃さうとしました。かうあらうと門前に張込んでゐた警吏は、矢庭にとりおさへて、ミリエル僧正の前に突出しました。すると僧正は「昨夜一對與へておいたのを、なぜ一基しか持つて行

かないのか。」といつて、奥から他の一基を持つて来て、チヤンバルチヤンに渡されたといふ、ユーゴーが腹の底から感じいつて書いた文を思ひ出しました。さうして七里和尚の泥棒から一言の禮をとつておかれた自然さと、その廣大無邊の功德をありがたく思ひました。僧正の徳も高いけれども、實在の七里和尚をユーゴーに一度見せたいやうな氣がしました。

私が萬行寺をたづねましたのは、當時の福岡縣視學立石君と附屬小學の伊藤君と一緒にした。歸途七里和尚の事について、色々語りあひました。立石君に「お寺にいつた時『記念碑の靴脱』と私の下駄をなほしながら小僧さんがいつたが、あれは何だかね。」ときくと、立石君はいく、「君の靴をなほしたあの長いみぎのかゝつた石はね、あれは七里和尚の記念碑となるべきものだつたのだよ。」と。なほ語り續けたのは、「之も和尚の終焉に近いある日の事五百の弟子が萬行寺につめきつて、『報恩の爲に、寺の庭に和尚の記念碑を立てようではないか。』といふことになつた。この際この議に、誰が反對しよう。早速釀金して、石屋を呼んで、石を運ばせ、磨かせて、文字を彫りこむ計りに仕上げた。その中に『かうして記念碑をたてるのだから、和尚の耳にもいれておいてはいかに。』といひ出したものがあつた。『それもよからう。』といふので、高弟の某が枕邊にいつて、この度の企を語ると、和尚は手をかすかに左右にふつた。『御不承知ですか。』といふと、うなづかれた。そこでこまつたのは高弟だ。事の次第をくはしく話して、ひたすらお許を請ふと、『私は年來ほしいくと思つて、まだ得作らなかつたのがその縁側の靴脱石だ。丁度よい。そこに持つて来ておいてくれよ。私の記念碑は五百の弟子の頭に建ててある。』とおつしやつた。高弟も二の句が出なかつた。そのことを弟子仲間に報告すると、誰も最後の説法に接した感で、一人として異存をとらなへる者がなかつた。見たまへの

靴脱石の前を通る時には、誰でも會釋をするよ。」といふのでした。私はいよ／＼感じいつてしまいました。教育者で、教へ子に確かに記念碑が建ててあるといひ得る者が幾人あらうか。記念碑として鳥に糞をかけられるより、踏まれても會釋せられる靴脱石が、どれほど尊いか知れないと思ひました。かうした信仰に生きてゐる境涯は、これをうかゞふことによつて、我等の行くてに、美しく清い世界が展開せられていきます。この清く美しい境涯、即ち別世界をながめる事によつて、人はさながらに美化せられ、清められるのです。しかしこれを遠くにながめることは禁物です。脚跟下にこれをながめる時、そこに修養がおこり、一跳如來地にも入ることが出来るのです。

那須の與市
小澤軍曹

讀本の定石材料ともいふべきものに、那須與市の扇的といふがあります。奇蹟的の史話として取扱はれてゐるやうですが、もすこし深くながめたら、之は宗教材料でせう。目を閉ぢて、下野の日光大権現、那須八幡大菩薩を念じ、開いて的を見た時、ねらひを定めて矢を放つたその刹那は、自なく、他なく、全く生死の外の境涯です。源氏が鞍壺をたゞき、平氏が絃をたゞいてほめたゞへる聲が天地にとゞろいた刹那に、與市は人間にかへつたのです。弦をきつてはなつた時は神です。佛の境地です。歴史美談もこれに別の世界を見てこそ、眞に教材とはなるのです。

こんな事實は必ずしも遠き昔に求める要はありません。私が朝鮮に赴任する日關釜連絡船に乗つたのは、大正十年十月の九日でした。この日の船内の話は、小澤軍曹の飛行機が、玄海灘に於て、錐揉みの様になつて墜落したといふので持ちきつてゐました。人々がさながらそれを目前に見たやうに話しますので、同じ羈旅の身の上とて、私は人一倍同情したことでした。その後十數日たつて、小澤軍曹が支那に着陸して無事だ

との新聞を見た時には、實に我が事の様になれしうございました。九州の太刀洗を出て、朝鮮京城に飛ばうとしたのが、東支那海を横斷して、江蘇省に着いたといふのですから、地理的に見ても、價値は十分であるし、空に迷つての七時間には、必ず軍曹の心の推移に偉大なるものがあらうと思つて、書を所澤の飛行場に寄せて、「新年歸京の際に、少時間の面會を許されたし。」と願ひました。私はどうしても之を教材としてまとめようと決心しました。

小澤軍曹に面會を求めたのは、大正十一年一月の十二日であつたと記憶してゐます。飛行學校の門衛に來意をつけると、早速電話で飛行場の曹長——その時は軍曹から昇進して——に通じてくれますと、「今自動車をやると、それに乗つて來るやうに。」との事でした。しばらく待つてゐると、自動車は疾風のやうにかけ來ました。私が乗るや、頭を轉じてもと來た道を風をきつて引返しました。まもなく飛行服の小澤曹長の前に私を下しました。曹長はにこやかに、「今一飛行して來たら、手がすきます。さうしたら何時迄でもゆつくり話をするから見えて下さい。」といひ殘して、機上の人となりました。こんなのをうまいといふのでせう。範を示されたものか、しばらく飛行して着陸せられました。

それから下士室で、お正月の切餅をストーブで焼いて、二人で食ひながら、十二時過から三時頃まで色々話をうかゞつて來ました。大正十年九月二十七日、長春訪問の國際的飛行は開始せられて、四機は所澤をたつた。途中滿洲の黄沙に苦しめられながら、我は廣島に一旦着陸して、太刀洗にむかつた。所が黄沙は日々濃厚となつて、いつ晴れるかわからない。四機は太刀洗にゐて、たゞその晴れるをのみまつてゐた。

十月四日いよ／＼京城まで飛ぶことになつて、午前九時十五分太刀洗を離陸した。福岡の上空から唐津に

出て、それから海上に出た。すぐに壹岐を見、對馬を見ることが思ひの外、濃霧の襲來にあつて、全く展望がきかない。唯羅針盤を力に進んでみると、やう／＼濃霧を出た。壹岐を求めるが見えない。對馬を探すがそれも見えない。その中に機は深い／＼黄沙の中にはいつた。どうしたことか、羅針盤がからまはりを始めた。補助羅針盤で補正しつゝ進んだが、これもまたからまはりを始めた。空で羅針盤が狂つては、盲が杖を失つたよりもみじめだ。黄沙の中を行方定めず飛行してゐるので、全く空に迷つてしまつた。時に十時四十分。たゞ心あてに、今迄の方向をくらはせないやうに、ハンドルを力に進んだが、三十分にして小山のいたゞきを見た。海中の一孤島だ。無人島らしい。そのちかくを小蒸氣がかけて行くのを見た。これに力を得て下降してみたが、着陸する所がないので、また高く飛翔した。何處だらうと私はしきりに考へて、これを日本海中の小島と断定した。今から考へると、我が機は既に方向を過つて朝鮮多島海の一端に來てゐたのだ。そこにある小島であつたのだ。それを神ならぬ身のどうして知らう。左折すれば、朝鮮半島の何處かを横斷することと信じて、かちをまげた。思つてもぞつとする様な話、我が機は果なき東支那海に向つて去つたのだ。

二時間飛行したが、朝鮮半島はおろか、島の片影だも目に入らぬ。いよ／＼空に迷つたと思つて、油量をしらべると、なほ三時間分をあましてゐる。黄沙は深くこめて展望は全くきかぬ。あふげば蒼天、俯せば蒼海、たゞ目に映するは、光なき眞紅の太陽のみ。西へ西へと傾く太陽、もしこれを目あてに進んだら、萬一支那大陸の何處かに着くかもしれないと腹を据ゑて、迷ふ事なく、かちを太陽にむけた。行けども／＼海と空ばかり、そのうちに色々な妄執が群がりおこつて、わけもなく自分を苦しめる。身はどうなるのだらう。

三機は既に京城について、盛んな歓迎をうけてゐるのだらう。たゞもういら／＼して來るばかり。それにしてもこの機は迷へる我を乗せて、あてどもなくすべつて行く。機にもし靈あらば我の不覺をうらむだらう。油つきて墜落する時は、最後の一呼吸まで泳がうか、いやいや、この温かい飛行服を、どうしてぬぎすてる事が出來よう。共に沈まう。機とともに。名も知らぬ海に沈まう。せめて飛行した時間だけでも、木片に彫つて、後のかたみとしたい。小刀取出して彫りはじめたが、機の動揺がはげしくて、終に果さなかつた。こんな思ひで、三千五百メートルの高空を飛行すること二時間。再び油量を検すると、あますところ僅かに五十分。我が生命も五十分と限られては、もはや死出の覺悟をしなければならぬ。先バンドを解いて、機體との縁をたつた。前方の太陽を西とすれば、之に反する後は東だ。水筒に少し残つてゐた水をすつかり飲みほして、靜かに後方東にむかひ、聲を限りに天皇陛下の萬歳を三唱した。次に郷里山梨にある母に暇乞を申し上げた。なほ兄の一族の安泰なるやうにと祈つた。もはや思ひのこすことはない、正しく坐になほると、にはかに橘中佐の琵琶歌がうたひたくなつた。そこで最後の一節を聲はりあげて歌つた。すると心機一轉して、今までいら／＼してゐた心持はどこへやら、生何物ぞ、死何物ぞ、生よるこぶべきにあらず、死おそるべきにあらず。我はかくして生き、かくして死ぬ。たゞ大道を行く様なものだ。かう考へては、ハンドル持つのも執着のきらひがあると、つひに放してしまつた。機は心ある様にすべつて行く。だん／＼右に傾いて墜落の度に達すると、左手がしづかに出て、ハンドルを引く。これがために、機はだん／＼左に傾いて、また墜落の度に達すると、右手が出て、ハンドルをひく。かくして行くことしばらく、そのうちにはるか低空に雲の一團を認めた。たゞちに陸地だと直覺した。下げかちをとつて、千メートルに下ると、雲の下には

大河が流れこんで、海の波とたゞかつてゐた。我は夢ではないかと思つた。又無人島かとも思つた。川について上つてみると、耕地があり、人家もあつた。廣い耕地を選んで、低空飛行で耕作してゐる人を追ひはらひ、そこに着陸した。油量を見ると、僅かに二十分をあますだけだつた。

八百餘名手に手に得物をたづさへて、押しよせたのには驚いた。大きな鳥だと思つたといふには、なほ驚いた。我は支那官民の手あつた保護によつて、再び日本に歸ることが出来た。

私は曹長の話を涙でまみりました。更に青島守備隊の成澤大尉——軍曹を迎へにいつた方——に願つて、材料をいたゞいてまよめました。空に迷ふ。」と題して、朝鮮讀本の八の巻に、をさめました。地理の材料としても、國際的資料としても、更に「人はさながらに神だ。」といふ信仰の緒としても、尊い材料だと思ひます。さらに現存の人を教科書中に採つた新しい試は、單に今までの型を破つたといふばかりではなく、今後に生きる兒童に對しては、現代の事實を教材とすることが有効であるといふ一新主張であります。こんな材料も心して採つておかにければ、程なく煙滅してしまひます。「教材の蒐集を現代に試みる」といふことは、之を古書に求めるよりも、さらに重要な事ではあるまいか。」といふ警告の意味もあるのです。まことに長々と信仰に關する意見をのべましたが、日常生活のうちに、信仰的事象を求めて、これによつてその緒を開發することは、教育上は極めて重要なこととてさせていただきます。

藝術に關する立言、それは私の任ではありません。しかし人間はすべて藝術にあこがるゝ心の持主である以上は、藝術品にたいして鑑賞する仕方を指導するのは、教育の旨でなすべきことです。さるにても、今の學校教育を瞥見すると、藝術尊重の叫びばかりが高くて、その實の非藝術的なるには驚きます。藝術を好愛す

藝術に關する材料

る心の培養は、一冊の藝術論や、コスメチックの香では動きがつかないもののやうです。

人間安心の境地は生きた藝術であり、善をなす心、眞を追ふ心も藝術です。たゞ未顯の藝術とでもいはなければなりません。凡そ事に直面して、没我の状態にあり得るものは、悉く藝術となり得る實體かと思ひます。して見ると、人間の眞生活は即ち藝術であるとも言はれませう。藝術品はそれらの實體を藝術化して表現したもので、繪畫・彫刻・建築・音楽・文學等が夫であります。私の所見はかうした簡單なものです。さて兒童をして、いかにこれに親しましむべきかが教材の問題で、讀本編纂上の問題となるものです。

私は朝鮮の國語讀本を編纂する際、材料蒐集のために、百濟の舊都扶餘に行きました。扶餘は忠清南道にあつて、全くの廢都です。宮殿のあとの扶餘山は、昔ながらに小高い丘陵で、こはれた瓦と、燒米にその古を語り、落花巖に滅亡の哀話をとゞめてゐます。白馬江——錦江の上流——は洋々としてその傍をながれてゐます。もし内地にその似た所を求めたら、「さゝ波や志賀の都はあれにしを。」といつた頃の志賀の都か、現在でならば、奥州の平泉かと思ひます。たゞ平泉よりは扶餘がすぐれて明るい様です。とにかく佛像・經文を始めて我が國に獻じた百濟、その百濟は私が、日本歴史を學びはじめた頃からのなじみです。その舊都にたゞ一基の平濟塔以外、別に見るべき物の何物もない荒涼たる様を見ては、詩人ならずとも、斷腸の思がします。私は扶餘山をえつちらおつちら上りながら、堆き布目瓦の破片の中に、拇指の跡の深く印せられてゐるのを一つ見つけました。「おや、百濟の人の指形だ。」と拾ひあげて、その指形なりに私の拇指をあててみました。するとその指の主が誰であるかは知れないが、手のひねり具合を私は肌で感知する事が出来ました。扶餘で拾つたその古瓦一片は、優に朝鮮人をして、朝鮮古代の文化に注意をむけさせる適材であると思ひま

扶餘の古い瓦

した。私は今もこれを秘藏してゐます。

「それが藝術品か。」さうしたいら／＼した間はしばらくまつて下さい。古瓦の破片、決して藝術品ではありませんが、藝術を味はう心には、このあたたかみがなくてはなりません。この心を助長したら、そこに自己に立脚した鑑賞眼が開けて來ると思ひます。私の鑑賞眼は、藝術を弄ぶ人によつて、あらゆる方に導かれていつてゐました。私の今までに接した藝術品には、多くの文句がついてゐました。我が眼で見ると、他人の話をきいて、さうしたものかと考へてから、見なければなりません。藝術品にはすべて法外の價格が付けられてゐました。趣味を黄金で評價する所に、我が藝術眼は狂ひを生じてゐます。我が國の藝術品は金満家の蒐集本能によつて弄ばれた物です。稚い兒童の藝術眼を開くには、すこぶるよくない社會の事情です。それで神前の燈籠がいかに不恰好でも、これを苦にする者はなく、社前の狛犬の製作についても一考する者すらない。我が民衆の藝術眼の低劣な事は、稻荷社前の鳥居や、狐の彫刻物を見れば、すぐにうなづかれます。

朝鮮人は藝術的に恵まれた民族です。新羅の彫刻、高麗の陶器等を見ると、人をして恍惚たらしむるものがあります。だれかが東洋の藝術を通觀して、日本は色を以てまさり、朝鮮は線を以てまさり、支那は形を以てまさるといひました。まことに新羅の藝術に接して、誰でも一番さきに感ずるのは線です。弱いやうななつかしみのある線です。朝鮮民族の祖先が、この藝術を千年以前に持つたといふことは、民族の永遠のほこりです。同時に今後民族の行くべき道を暗示してゐるものです。餘談ですが、朝鮮全土で私を最も強く引きつける所は慶州です。新羅の舊都です。大邱から二時間、自動車で慶州にむかふと、だん／＼慶州に近づ

くと共に、感じは大阪から奈良にむかふと同じです。奈良食都の裏面には、新羅の人がゐたのではないかとさへ思ひます。私は新羅がかつて熊襲の尻押をしたといふので、子供の時から嫌でしたが、その地を踏んでみると、いかにも根強い發達を遂げた所です。ことにその藝術品や、美しい古墳に接する時、いひ知らぬなつかしさを感じて、終生忘るゝことの出來ない所となつてしまひました。藝術の力は永遠のもので、強いものです。

慶州の三逸

序に今一つ餘談をきいて下さい。私は慶州をあらこちから見歩いて、堂々たる三逸を見つけました。夫は奉徳寺の鐘と、武烈王陵の亀趺と、吐含山上石窟庵の佛像とです。私が佛像に心から懐かしみを持つたのは石窟庵の佛像を見た時でした。石窟庵は二十餘町の山嶺にあつて、日本海に向つてその口が開いてゐます。圓い窟の中央に釋迦如來を安置し、まはりの壁面に四菩薩十大弟子、釋迦の眞後に十一面觀世音菩薩が浮彫りにしてあります。春分と秋分には、この眞正面から日が上るので、まづ中央の釋迦如來の白毫に輝き、顔が明るくなり、胸が明るくなり、胴に及ぶ。その反射光線が、壁面の四菩薩、十大弟子、最後に十一面觀世音に及びます。やはらかな光によつて、線に優れたふくよかな佛像が浮び出ると、たまらない懐かしみと尊さを感じます。私が慶州の普通學校長大阪氏と共にこゝに上りました時は、日海上を出ること數尺でしたから、明け行く釋迦の顔を見るには遅かつたのですが、やはらかな反射光線に照らさるゝ十一面觀世音を見るには、頗る好機でした。釋迦にむかつて右からまはると、觀世音はいとにこやかに、「よく來たね。」とおつしやりさうです。左からまはると、たゞの石佛です。私が釋迦を中心として右し左することが、慶州通の大阪氏にはどんなにかしかつたらうと思ひます。所が大阪氏も曲者、一言も説明を加へないで、私の目で、

私の見るまゝにまかせる自由教育主義でした。下山の途中私が歎美の聲をもらすと、その箇所だけきはめて言葉少なに補説して下さいました。石窟庵の釋迦ほど、すぐれて美しいものは世にあるまいと、今も思つてゐます。

私は大阪君にいひました。「木浦までの出張を終へて、なほ囊底があたゝかでしたら、半日奈良の博物館を見て來ます。」と。木浦について、囊底を検するに、優に奈良行をさゝへることが出來ます。太田から京城に歸るのを、逆に釜山に出て、奈良に奔りました。半日博物館にはいつて、佛像の數々を見ました。どれも名作には相違ありませんが、石窟庵の釋迦に對し、觀世音に對し、四菩薩に對するやうな、懐かしみを感じるものはありませんでした。慶州はやはり奈良の兄だらうかと、いさゝか寂しみを感ぜました。

まはりまはつて、不圖支關の監守の後に立つていらつしやる二體の佛像を見ました。向つて左の一體は、さしてとも感じませんでした。右の一體、唐招提寺寄託大自在王菩薩像天平時代とある前にたつて、私はびたりと止りました。鼻もかけてゐるし、両手もくちてゐます。けれどもそんなことはさら／＼苦になりません。ながめいつてゐると靈感身にせまつて、懐かしさが胸一ぱいになります。この一體をこの博物館に見出したことは、奈良に走つた私の大なる満足でした。

さき頃も奈良女高師附屬小學校の國語教授を參觀した序、博物館に行つて、この大自在王菩薩を拜して來ました。尊き故舊にあつた感でした。また私はその前を去りがたく思ひました。この心持を「懐かしき佛像」など題して、まとめましたら、藝術品鑑賞の端の一路を示すことが出來るかとも思ひます。とにかく藝術教育は一般民衆としては、文句なしに鑑賞することが大切でせう。さながら文を味はふやうに、作者の叫びに

靈感を得て、これを好愛することが肝要です。藝術教育の要はこの邊にあるのでないかと思ひます。再び申します。兒童の藝術教育は、優美なる藝術品の前にかれをおくことです。さうして靈感にうたれたものを、常に愛重させることです。そこに彼の眼は開け、耳も開けて來ます。田舎では藝術品が乏しい。したがつて藝術眼を養ふことが出來ない。」と。それは甚だ近視のきらひがあります。自然界は四時をり／＼に委をかへ、これに排する人物も、時々形をかへて趣を添へます。これを活きたる繪、活きたる彫刻と看取することは些細な注意によつて出來ることです。天は決して田舎の人を虐待するものではありません。

研究に關する讀本の使命は、知識の傳達ではなくて、研究心の啓培です。今の知識がいつまでその眞を失はないでせうか。日進月歩の世の中で、十年二十年、その價値の變じないものはまれでせう。故に旺盛な研究心を養つて、世の進歩に順應し、さらに新研究に向ふやうに仕向けることが肝要です。その材料としてはある人の研究發明に關する苦心のあとをとるか、古來長年月の間に進歩發達して來た事實を探つて、研究の態度・方法を仔細に觀察せしむることが大切です。

眞を求めるのは人間の本性で、科學はその活動の上のうちたてられたものです。必ずしも程度の高い研究發明の事實に材料をとらなくても、兒童の日常生活中に、小なる研究、小なる發明がいくつもあります。これは讀本の編纂上重要な材料ですが、その適材はまだ多くは得られません。したがつて現行讀本中の研究材料が、大人の着物を借着してゐるやうな材料ばかりであるのも、止むを得ない事です。

私は朝鮮讀本にタンポポといふ材料をとりました。私が東京高師の附屬小學校で、尋常二年を受持つてゐた頃、春の暖い日に、兒童を伴つて、高師のわきの小さい雜草園にいきました。そこにはタンポポが今をさ

かりとさきみだれてみました。高く花軸を抜いた先には、白髪の実がまだ風にも吹き飛ばされないので、完全な形で幾本かありました。二年生は花には少しも疑を起しませんでしたが、白髪坊主には殆んど全體が注意しました。ある子が「先生、これはなんですか。」といひますから、「タンポポの種だ。」といひますと、「生えるでせうか。」と申します。私は「蒔いてみなければ分らない。」といひますと、「どうしてまくか。」とききます。「一本の種を一つ残さずとつていつて、泥鉢に七分目ばかり土をいれて、その上にその種を一つも落さないやうにまく。さうして土を二分どほり覆つておけば、生えるか、生えないかがわかるさ。」といひました。二年生はみんな採集して、紙につんで、持つて歸りました。私も最も大きき一つを採つて、持つて歸つて、泥鉢にまきました。それを花壇の片隅において、つい忘れてゐました。三十日ばかりたつたある日、子供の注意で、さきの泥鉢に、タンポポの密生してゐるのを知つて、子供に示しました。すると兒童は「幾本はえましたか。」といふ。「數へてみなければわからない。」といふと、「どうして數へますか。」といひますから、「ざるに入れて、水道の栓の下で、土を洗ひ流したら、根と葉のそろつたタンポポのこる。それを數へたらよからう。」といふと、「やりませう。」といひます。早速水道の下で洗つて、數へて見ると、百二十二本ありました。子供は驚きました。私も實は驚きました。すると「みんな生えたのでせうか。」といひます。これは私の手落で、はじめに數へて蒔けばよかつたのですが、それをしなかつたために、何とも答へることが出来ませんでした。念のために最も大きな花の數を數へたら、百三十六ありました。それから考へて、百二十二は成績のよい方だと思ひました。

私はこんな偶然的な一事實でしたが、之によつて兒童の生活中には研究の萌芽と見るべきものが、非常に

多い事を悟りました。うまく之を引出せば、研究心啓培の材料は、いくらも得られる事のやうに思ひます。その後ある子が「先生、タンポポの根は、長さがどれほどあるか知つてゐますか。」と申しました。「知らないが、五六寸もあるかね。」といふと、彼は突立つて、「昨日辛苦して掘つてみたら、一尺二寸あつた。」と申しました。こんな事が影響したといふのか、この二年生は蟻の巢を瓶の中に作らせて観察したり、ストーブの傍で線香に火をつけて、その煙の動き方で、空氣のあたゝまつて行く事を實驗したりして、喜ぶやうになりました。私はこんな経験から、文部省は兒童の研究心啓培の材料を得るために、ある研究所をおくか、ある學校を指定して、研究を委託されるがよいと思ひます。さうでない、編纂に當つて科學書を引っぱり出しても、兒童讀物をあさつても、思はしい材料が到底得れまいと思ひます。さうなると、何時までも、兒童が大人の借着をしたやうな教科書を持つてゐなければならぬと思ひます。

餘談ですが、私は東京高師在職の頃から、今の理科教授があまりに、大人の研究法を兒童に強ひる傾があるのをなげいて、尋四に理科の加へられた當時、校庭理科と題して、校庭の自然現象を十時間ばかり取扱つて見ました。かなしいことに私は理科の力が乏しくて、何等準備なくて、こんな大仕事に手をつけたことを悔いました。併し私は國語の次に好きなのは理科です。所謂下手の横好といふ格で、研究心の啓培に縁の乏しい今の小學理科教授には、甚だあきたらず思つてゐる一人です。一昨年滿洲を旅行して、奉天に参りました時、奉天小學校の訓導山本正君に始めて會ひました。君は福井縣の人、師範在學中は哲學に興味を持つてゐましたが、滿洲に渡つてからはフアブルに私淑して専ら自然研究に没頭しました。時には學校の幹部に睨まれたこともあつたさうです。ところが研究に忠なる君は、よくその中をきりぬけて、とう／＼その研究

をまとめようといふまでになりました。初めてあつた時クモとトンボの寫眞各二十餘枚を恵まれました。クモは夕方巢から出て、古い巢を食ひ、新しい巢を張つて、始めて蟲を捕へるまで、七時二十分から十二時二十分までうつしたもので、トンボはヤゴの背がわかれて、そこからぬけ出て、完全なトンボになるまでを撮つたものでした。私は私の多年求めてゐた人に、はじめてあつたやうな氣がして、何ともいへぬうれしさを感しました。なほ研究をつゞけられるやうにと、深く望をかけてわかれましました。その後時々の通信に、清新な理科教授上の意見などをきいて、いよいよ尊敬の念を高めました。昨年の五月朝鮮の殘務を片付けるためにまづ大連に出て、再び旅順から奉天を廻りました。その時山本君にあつたら、「研究録が大分まとまりました。蘆田書店から出して下さるか。」との事でした。私は微力な蘆田書店の運命を賭しても引受けてみようと思ひ、蘆田書店から出して下さるか。ところが研究録二十五冊のうち、二十四冊を間もなく送つて來ました。かついはく、「先生に迷惑をかけてはいけません。名もなき私の著としては必ず賣れまい。先生と共著にして、内容は私、形式は先生と、責任をわける事に致しませう。」といふ事でした。商略上さうした事も必要かとも考へてみました。さて圖版の製作にかゝらせ、原稿の文章を整理してみますと、その研究の精緻な事、實に驚くばかりです。この尊い研究にどうして共著などいふ不純な考がさし加へられませう。賣れる、賣れぬなどいふことは、眞劍の研究の前には問題ではないと考へました。

第一編紋白蝶を出しました。丘博士、岡崎常太郎先生が稱賛して下さいました。私は私の目がなほ物を鑒別する力を失はないことを喜びました。第二編タンボボ、第三編蚕上、第四編蚕下、第五編カヘル、第六編夏の草花、第七編クモ、第八編七夕の空と發行しました。あと十七編は引續き發行する豫定です。漸く識者

の注意を引いて來たことを、私は光榮に存じます。

既刊の八編中について見ても、讀本の材料として好適のものが數種あります。私は山本君のこの著を得て私の最も弱い部面の確實に補はれたことと思ひます。讀本編纂といふやうな、三面十臂のはたらきは、山本君のやうな人を得て、自由な働が出来るかと思ひます。今後の理科教授研究者、讀本の材料研究者——研究心啓培の材料研究者——は、山本君に負ふ所頗る大なるものがあらうと思ひます。

修養に關する材料について申してみませう。人の惡を去つて善に就かうとするはたらきを、こゝにしばらく修養とまとめていつたのです。さて修養とは、自己を究明するの義で、自己が何であるかをみつめる時、徳にむかはうとする心の芽生えは、そこに認められるのです。自己徹見などいふことは、終生の仕事としてもなほよくなし得るか否かは問題ですが、それでもこれに志してすすむ時、第一に感知することは、我が生の世にも尊重すべきものであるといふことです。我をして道を體驗せしむるものは、我が生です。これを見つめることが、修養の第一義だとも感じます。我が生の尊重すべきことを知れば知るほど、他人の生の尊重すべきことを感じます。自他ともに一つ心に生の進展して行くことをさとる時、そこにいひ知れぬ親しさ、樂しさを感じます。これが即ち道に根ざした愛で、崇高無類の愛です。これには私は可なり深刻な體驗を持つてゐます。

岡田先生の坐下にあつまつた靜座者は、随分澤山ありましたが、座つたといふその一事が、相互に道の友同行者といふ感をおこすと見えて、誰に對しても美しい親しさを持つことが出來ます。その中の十數人、特に靜坐に熱心なものが、一學期に一回、傳通院の西川洋食部で晚餐會を催したのですが、大抵六時頃に始

まつて、食事をすませて、語りはじめると、赤電車をきづかふ頃まで、話がきれませんでした。さうしてこの一夜の清遊を、静座者はいかに喜び、いかに待つたものか知れません。先生の歿後この機會の得られなくなつただけでも、我が生は強い寂しさを感じます。私は道を説くことは出来ませんが、道に直面したやうな感を持つてゐます。道は千古かはらないもので、我が生の上には、日々新たなもののやうです。

私は朝鮮に赴任して、各地を旅行しました時、到る所に鶴の飛んでゐるのを見て、朝鮮にふさはしい鳥だと思ひました。歌ガルタに興じた頃からのおなじみの鳥で、愛すべき聲は持たぬが、姿はいかにも朝鮮美術を象徴したやうな鳥ですから、朝鮮に於ける親しきものの一つとして、毎朝我が庭に来てなくのを持つ様な心持になりました。ある時私は不圖内地にある朝鮮人が、さぞ鶴を見ないことが寂しからうと思ひました。そこで内地に鶴をうつさうと思ひ、京城標本製作所主、野田林氏の賛同を得て、四十羽の雛をとつて飼はせました。そのうち十八羽死んで、四羽は六月に上野の動物園に持ち歸りました。八月滿洲旅行を終へて、京城に歸るや、立派に育つた鶴十八羽を内地に持ち歸つて、宮城附近に放たうと、早速標本製作所を訪ふと、その後十八羽のうち六羽は死んで、十二羽は大きく美しく育つてゐましたが、一昨日の暑さで、全部一日に死んでしまつたとの事でした。私は掌中の玉をうばはれた感が致しました。いづれの時にか、この計畫は實行したいと思つてゐます。それでも六月につれて歸つた四羽の中一羽だけ死んで、この春まで三羽動物園にゐました。今もゐることです。私は内地の風物に離れて、心に寂しみを感ずる所から、密かに内地にゐる朝鮮人の上を思つたのではあるまいかと思ひます。何にしても内省が道を求め、愛のうるほひにひたる唯一の道かと思ひます。餘談ながら鶴が鳥と共に、宮城の松や櫻にとびまはつて、これを雲井の方々が、一視同

鶴

仁の目で御覽遊ばす時、内鮮融和の美しい光が、仰がれるかと存じます。

さて生を尊重すべき思想が、國家の事業として現はれてゐるのは天然記念物保存です。この事業の精神は教育の眞髓にしつくりとあつてゐます。もしこの精神が國民の内心から湧いて来るやうになつたら、事々しく教育を云々する要はないとさへ思ひます。私の子供の頃は丹波あたりの泥田にすら、丹頂の鶴が来て、立つてゐたこともありました。東京の附近の浅草田圃にも、鶴が年々來たといひます。無自覺な人間が、精巧な鐵砲といふものを持つたからたまりません。血を見て楽しむといふ、世にも劣悪な趣味に染んで、鳥といふ鳥に銃口をむけました。鶴のやうな靈鳥は、自分の命よりも、人間の淺ましいその心根にあいそをつかしたのでせう。鶴はさておき、鷺、鷹、鴨などの大部隊を日本の空に見る機會は殆んどなくなりました。私は常に思ひます、鳥の聲は貧者の音楽だと。鳥獸の姿は貧者の彫刻であり、繪畫です。金をかけて美術品を床の間に眺める事の出来ない者は、これを自然界に見るより外に道はありません。これは天の恩恵であると同時に、貧しき者の權利です。國家は十萬や百萬の狩獵税のために、富者の惡趣味を助長するために、民衆のこの清き娛樂を奪つてもよいものでせうか。鳥獸を狩るといふことは、耕作に對する害をふせぐ程度にとゞむべきもので、これを娛樂の手段とする事は、いかなる名に於てるも罪惡です。狩獵家もやがてその非をさとる時が來ませう。狩るべき鳥獸のなくなつた時、いかに寂しいものかといふことをさとりませう。要するに自分の生命を狩つて楽しんでゐたといふことがわかりませう。

朝鮮の讀本に採りました山口縣熊毛郡八代村は、我が國に於ける鶴の渡來地の二箇所の一として、近年世人の注意をひいた所です。西から來れば島田驛に下車して、自動車で三里餘、一時間ばかりで着きます。四

天然記念物
保存

八代村の鶴

方低い松山にかこまれてゐる盆地で、水田四百町歩、戸數四百、而して海拔千二百尺の高地ですから、全く鶴のすきさうな村です。私がこゝに行つたのは、十二月のはじめでしたが、鍋鶴が八十羽ばかり来てゐることでした。こゝに五六羽、そこに七八羽、或は三七・八羽の大部隊がゐるかと思ふと、親子と見える三羽の——一羽は途中で失つたのだらう——寂しいのがゐます。鶴は私等の様な洋服姿をきらひますが、村の人は荷車を引いて通らうが、自轉車でかけぬけようが、少しもおそれません。それもその筈です。村人の鶴を愛することは格別で、年内は田螺や落穂で、鶴の食物がありますが、一月二月は食料が缺乏します。そこで村人は穀を田にまいて、鶴を養ひます。多い年は百五六十羽来たことがあるといつてゐます。この鶴は滿洲・蒙古・東部シベリアに卵をうみ、雛をそだて、北方が寒くなると、朝鮮から日本海に出て、見島に渡り、津和野に渡り、次に八代に来るのです。八代の人温かい心が、鶴仲間にも知れると見えて、年々その數をますとか。世智辛い今の世の中には、神代さながらの様な話でせう。

自己を内省して我が生の尊重すべきを悟つた心を、親にむける時、まづ感謝の念がわきます。更にその生を尊重して、安泰ならしめなければならぬとの念が浮びます。古來孝養は東洋の美德で、和漢共にその數が少くありません。しかし眞に孝の至れるものを求めると、容易には得られません。朝鮮讀本には、李坦之が重圍の孤城にある父が、病ときいて、單身城に入り、その終焉までの看護をしたといふけなげな孝子を、高麗朝の金石文から採りました。朝鮮に極めて多い孝子の行狀、親の今はの際に、自分の生血を進めて、二日その命をのべたなどいふ類は、情に於て孝は孝だが、親の徳を損する事はないでせうか。内地の孝子談にも、父は「雨がふるかも知れないから、下駄をはいて行け。」といひ、母は「晴れるから草履をはいていけ。」

孝

柴木甚介

といつた。そこで孝子は下駄を片足、草履片足で、町へいつたといふ話があります。これ等も孝は孝でせうが、父母の徳を損する事の大なるものです。自己にめざめた父母に對して、自己にめざめた子の行ふ孝は、かうした捉はれたものであつてはなりません。さてさういふ目で過去の孝子傳中に材料を求めると、私は岡山縣の柴木甚介の孝行ぶりに、心から信をおこします。南洋讀本にはそれを採用しておきました。

甚介の行狀には、孝行らしいものはありません。母の安眠した後でなければ、自分が眠つてもこゝろよくない。母のこゝろよく食事をしないうちには、自分は何を食つてもうまくないといつた風で、いかにも自然のままの行が孝道に合致してゐるやうに見えます。ことに母が年八十を越えても壯健で若々しかった。人に語つていはく、「私の元氣がおとろへてよいものか。甚介がよく氣をつけてくれるので、心はいつでも楽しい事ばかり、殿様のおふくろでも、この安心は得られまい。」と。私はこの母にして、甚介もはじめて孝養を全くする事が出来たのだと思ひます。私が更に甚介を尊敬して止まないのは、その田畑がいかなる不作の年にも、よくみのつたといふ事です。人は孝子を天が助けるのだといつたといひますが、私は甚介のする事が天地の大道に合致してゐるからだと思ひます。母を思ふ心で、五穀の上を考へてゐたのだらうと思ひます。母の生を尊重するやうに、禽獸草木の生をも尊重したのでせう。我が儘な親の意にそむかなかつたといふ程度では、孝道の至れるものではないでせう。

忠

内省して自己の尊重すべきことを悟つた目で、皇室の御上を思ふ時、まづ思ひうかぶのは、皇室は上にあつて國安かれといのりたまひ、萬民は下にあつて、この國土に生を安んじて來たことです。それが建國以來一日もかはらなかつた事を思つて、まづ感謝の念が湧くと共に、皇室のいよ／＼榮えさせ給ふやうにと、誰

も祈らないものではありません。上には萬民がその處を得るやうにと自然の大法を如實に示したまひ、萬民はその大法を仰いで而も内省によつてこれをおのれに會得し、上下心を一にして、この國家を擁護することが上下を通じての重大な任務です。我が國の大革新が常に上から起つて、下に及ぶ歴史にかんがみても、社會主義者——共産黨——の活動など、あまりに氣の短い話ではあるまいかと思ひます。

皇室に關する材料は特に注意して選擇しなければなりません。今までは皇室の事は雲井の空のきはめてはるけき所、うかゞひ知るべからざる事のやうに説きましたが、皇室も亦この國家のために盡されたまひ、我等臣民も亦これを翼賛し、力を致してゐるのです。さうした間柄でありながら、遠く遙かに望んでゐるやうな心持では、到底上下一心、舉國一致の生々した國家は現出しません。私は私の過去を省みて、皇室の事といへば、常に、硬くなつて考へたやうに思ひます。深い親しみを持つやうな材料を持つてゐなかつたかと思ひます。

本年二月十一日紀元節の佳節に、御下賜になりました皇太子殿下海外御巡遊日誌は、既に全國各地の小学校に於て、教材化するため、繰返し拜讀してをられることは存じますが、この空前の海外御巡遊を教材化する力の如何によつて、今の教育界の識見がためさるゝのではあるまいかと思ひます。私は御日誌の印刷になりました最初の物——東京大震災の前、宮内省から印刷局へ三千部御註文があつて、刷上つたうち三百五十部は震災前に宮内省に納本になりました。——を一冊、宮内屬の佐野君からいただきました。當時私は朝鮮にゐて、八の巻に探るべき皇室材料と、外國の地理材料に苦心してゐる際でした。ある民族の讀本を編纂するには、そこに込入つた事情のあるものです。皇室材料は、日本民族には歴代天皇の御聖徳のいづれ

皇室に關する材料

皇太子殿下
海外御巡遊
日誌

を採つても尊い材料ですが、皇室に親しみのうすい朝鮮民族には、さていかにすべきかと躊躇致しました。ことに忠といふ概念が、内鮮それ／＼にちがふやうですから、日本民族なりに材料を選択することは出来ません。外國の地理材料は、私としては内地の讀本から轉載するより外に道がありませんが、生憎それがアメリカの材料です。アメリカといへば、自由博愛の國で、日本の啓發者です。内地の讀本にこれをとることは當然のことですが、朝鮮にはどうした行掛りか、誤解があるやうです。事實かどうかは知りませんが、歐州大戰の結果ウキルソンの民族自決といふ事が認められて、朝鮮民族はまさに獨立すべきものと解してゐたらしいのです。この民衆の傾向を悪化宣傳に利用しようとしたのか、但しは悪戯か、誰かがウキルソンが飛行機で、朝鮮民族を救はん爲に、京城に來るよしをいひふらしました。罪な事です、自分の便宜のために他を犠牲にするなんて。事情を知らぬ朝鮮人はそれが歡迎のために、京城周圍の山嶺にあつたといふ事です。私はその事實如何を確める要はありません。讀本編纂者としては、かうした人氣の流を知ればよいのです。かういふ流の上に、日本民族のためには指導者であり、愛敬するアメリカのたよりを轉載することは忍びない事です。若しアメリカに對して鮮人が變な聯想を持つたり、あらぬ誤解をするやうなことがあつては、アメリカに對してまことに申譯のないことで、非禮のきはみです。私はかういふ見地から、アメリカだよりは轉載することに躊躇したのです。

讀本に採らなければならぬ材料で、その適材のどうしても見つからない場合を想像してみても下さい。私は全く策つきて、唯一人苦しんでゐました。ある朝出勤してみると、編輯室の私の机の上に、本の小包が載せてありました。開いて見ると、佐野君から送つて下さつた皇太子殿下海外御巡遊日誌でした。私はこれを

手にした利那に、天は自ら助くる者を助くだと直覺しました。なほ一擧にして皇室材料と外國の地理材料が併せ得られたと感じました。どつかり腰をおろしたきり、退廳時間まで讀み耽りました。下宿に歸つてからも、なほ讀み続けました。再讀三讀の後、全體を採らうか、部分を採らうかなど、色々に考へた末、全體を採つて、その中私が拜讀した際に、悲しいでもなく、嬉しいでもなく、もつとく深い所から涙の浸み出た所、即ち三月三日横濱御出帆、つづいて葉山御用邸沖に於ける御遙拜、ロンドン市長の歓迎の際に於ける御成功、及び目出度お歸りになつて、日本の領海にはじめて艦隊の歓迎をうけさせられた所をとりました。私はこの御日誌によつて、私の任務を全うする事の出来た幸福を、今も常に感謝してゐます。

さらに南洋讀本には、シンガポール在留のある日本人がさしあげた小猿の事を、二荒伯の著御外遊記と御日誌から探つて、「猿」と題しておきました。

大正十年三月二十六日、皇太子殿下にわ印度洋を御航行中のごさいました。

さきにシンガポールに御寄港の時、居留民がさしあげた小猿が、たいそう殿下のお氣に入つて、いつもおそばちかくに遊んでゐました。この小猿わいたつていたすら者で、ちよこ／＼ちよこ／＼わるいことをしてあるきました。水兵が一ばんこまつたのわ、軍艦にそなえつけてある器具のねじを、ひまにまかせてぬきとつて、それを口にふくむことでした。殿下はとくにこの事を御承知になつて、一方に水兵の迷惑を御心配になり、一方に水兵が強く小猿をこらしめるようなことわないかと、御心配になりました。

今日も水兵と小猿の間に、ねじのことから争がをこりました。小猿がねじを持つてゐるのを見て、水兵がとらえようとなりました。小猿わたちまちそれを口にふくんでしまいました。水兵わあせつて小猿を追いま

猿

すが、猿わ輕妙ににげまわつて、どうしてもとらえることが出来ません。水兵も少ししやくにさえました。殿下は之をごらんになつて、甲板にお出になりました。

「どうしたのか。」

とおたずねになりました。水兵わふりかえつて、驚きかつ敬禮して、

「猿がねじを取つて、口に入れました。」

と申し上げました。殿下は輕く、

「そう。」

とおうせられて、猿をとらえようとなさいましたが、猿わたゞにげまわるばかりでした。

この時殿下わ、

「角砂糖をもつておいで。」

とおつしやいました。水兵わうけたまわつて、取りにまいりました。小猿わお手をお出しにならぬ殿下を見上げて、相手ほしげにあたりを見まわしてました。

そこえ水兵が角砂糖を持つてまいりました。うやうやしく殿下にさしあげますと、殿下は見上げてゐる小猿にそれをおやりになりました。すると小猿わそれを取つて、口にふくもうとしましたが、ねじがじやまになりますので、はき出してしまいました。

殿下わそのねじをとつて、水兵にお渡しになりました。そうして氣の毒そうに、

「猿わこれを悪い事と思つていないのだから、この後もしかようなことをしても、代りの物をやつて

とるようにせよ。かならずいじめてはいけない。」
と仰せになりました。

この小猿わ、いつか三治じという名をつけられて、殿下のおそばかくにいました。そうして艦内かんないの人氣者にんきしやでした。

(附記) 南洋讀本の假名遣・振假名すべてそのまゝです。内地ならば尋常四年の後期によむのです。——南洋は本科三年、補習科二年で、各學年の讀本は一冊、しかし頁數は内地の二冊分。——補習科の生徒といへば、身體の發達が内地の高等小學校生徒位に見うけられます。より大きいのもゐます。教科書は讀本だけで讀本萬能です。修身・地理・歴史・理科等の教科書はありません。一生にまとまつた印刷物としては、一般には讀本以外のものには觸れる事がないでせう。さうした事情のもとに編纂した讀本です。内地の讀本のやうに、簡潔ではありません。冗漫のやうな感がありましたら、それはことさらにさうしたのです。教科書が簡潔の文を尊んで、つひに教科書體の文を作つてしまひました。考へ物だと思つてゐます。私は今後の皇室材料は、申すも畏多いことながら、人間味の豊かな上に、神性の輝いてゐる物を求めなければならぬと思ひます。ことに兒童に共鳴し得る底のものでなければならぬと思ひます。私は注意して沼津御用邸のお正月の御様子や、秩父宮様御渡歐の送別運動會に於ける宮様の御答辭等を集めてゐます。讀み方教材は之を書冊、記録の上のみ求めないで、事實に直面して、それから教材を作りあげるやうな工夫を試みたいと思ひます。

虎の門事件

虎の門事件は我が國歴史上の恨事でございます。然し攝政官のその際に於ける御態度は、まことに現人神

にましますと景仰致します。この大事件の直後にあげたまひし議會開院式に於て、御態度に此の變もあらせられず、議員諸氏も式を終つて、はじめて承つて驚いたといふことです。大法顯然露堂々たる所、却つてかの不吉事のために、明かに私どもが御性格を仰ぐことが出来たともいはれます。けれども一凶漢の出たといふことは、思想の流が甚だ日本民族らしくなくなりつゝある事を思はせまします。私は學徒に深く反省してもらひたいと思ひます。自己を失つた者の、論理の上のせて運ぶ研究は、結論を變なところへ持上げて、禍を國家に残すやうなことがあります。この土地に生れ、この歴史にはぐくまれたものは、そこに總ての基調をおかなければなりません。年やう／＼二十六、まだ乳の香のうせないものが、社會改造の先驅者として、銃を携へて白晝行啓の途筋をおびやかすなどは、自己を逸することの甚だしいものです。第一自分が年齢僅かに二十六であるといふ事を忘却してゐるのです。二十に二十の世界があり、三十に三十の世界があります。乃至四十・五十・六十には四十・五十・六十の世界があります。自己の生の尊重すべき事を知つて、他の生の尊重すべき事を知らない者が、この不遜をあへてするのです。藝術家が創作する様に、直接に累を他に及ぼさないものならよろしいが、社會主義者などの運動は、他の生活をおびやかしたり、犠牲者を出したりすることが多いやうです。またその考が藝術家のやうに清く眞剣なものであるかも問題です。とにかく偏智教育の落着く所は、自己の所信に固執して、他を理解する餘裕の乏しい事です。戒めても戒むべき事です。

御巡遊日誌を拜讀して、切に感ずることは、國際教育の必要なことです。殿下が到る所の帝室、大統領、政府等の歡待、國民の歡迎をおうけになつたことは、一通りではありません。殿下がその間に處して、よく殿下として、また日本國民を代表して、その誠意を披歴し、感謝の意を表せられたことは、打つて火の出る

強さと美しさを感じます。國際上の事は、とかく辭令の末に流れ易い様ですが、全く個人間の交際と同じく相互に生を尊重する義の發露で、決して利害の打算などから來るべきものではありません。殿下がパリにお出になつた時は、佛國民の注意のまとなり給ひ、非常な歓迎をうけさせられたといふ事です。その感情が轉嫁して、その頃日本人がパリの市街を通行すると、彼の國人は必ず眼を注いで、莞爾として笑ひ、或は萬歳と呼んで祝意を表し、労働者は奢つてくれと、罪のない事をいふものがあつたさうです。この好感は至誠の發露で、國際教育の要です。日本民族がどこかに偏狭な感情をもつて、外國人に異様な視線をなげたり、支那國民に侮蔑の語を放つたりすることは、排日思想の根本で、我に偏狭の感情の存する間は、拭はれないこととせう。日本民族發展の妨害です。反省することによつてのみ、内にその大敵の潜んでゐることを悟ることが出來ます。

修養に關して孝と忠について申してみましたが、全材料に及ぶことは、この小著に於ては不可能です。たゞ自己を究明する所に、一切の解決の鍵の存することを御承知下さい。偉人の行狀に接するにも、大事業の跡を尋ねるにも、常に自己を内省して、偉人と共通する點を見、大事業を我が生活中に認めることを忘れてはなりません。偉人が遠く離れたり、大事業が手のとゞかぬ事に考へたりしては、偉人の偉も、大事業の大も、徒らに自己を小ならしむるに終るのです。偉人を内にながめる者のみ、よく偉人たり得るのだと思ひます。大事業をわが生活中に認める人のみ、よく大事業をなし得るのだと思ひます。

よい讀本は必ず時代の推移に隨ふものです。次代のために考へる所がなくてはなりません。これは餘談に屬する部ですが、現行我が國の讀本に、特に要求してみたいと思ふ二三を陳べてみませう。

偉人をいかに見るか

國の接觸が今日のやうに頻繁になると、民族精神の美點・缺點がともに鮮明になります。美點はこれを助長すると共に、缺點はどこまでもこれを改良しなければなりません。私は朝鮮に赴任して、次第にかの民族に親しむと共に、日本民族の美質をきはめて多く見ました。

日本民族は正直者です。詐るとか、盗むとかいふことは、中々に心苦しい事に考へてゐます。外交の折衝などを見てゐても、時々だしぬかれるやうなことがあります。私は常に日本民族がこれによつて受くる目前の損失よりも、詐り得ざるることによつて、永遠に益する所の大を思つて微笑してゐます。ことに盗むといふことに對して、之を嫌忌する情は日本民族の特有とも稱すべきかと思ひます。大陸に渡りますと、とかく物が紛失し易いのです。なるほど支那の古い文では夜雨戸を閉さず、途おちたるを捨はずといふを、太平の象徴の様によつて喜びますが、稀にこそどろや極稀に強盜のある位の日本では、そんな事象はさして泰平らしくありません。家の構造から錠前や鍵の工夫まで、すべて盜にそなへるやうな設備の所では、戸を閉ざすといふことは大なる問題です。況んや途おちたるを捨はざるに於てをやです。日本民族のほこりとして、錠にサルとエビとしかなく。トランクの鍵が、殆んど共通で、鍵を忘れた場合の税關の檢閲が、他の錠の流用によつて無難にすまされる便宜のある事など、要するに錠や鍵は心に存する物で、實際のものといつては、たゞ氣休に過ぎない心意氣を、せめて日本民族自身は知つてゐたいものだと思います。笑話の材料としたら世界を呑む様な味が出來ませう。

きかぬ氣象も日本民族の特有です。持久性が乏しいといふ人がありますが、さうでもなささうです。日本の外交ほど失敗また失敗といはれるものはありますまいが、それでゐて、私がおぼえてからは、だん／＼國

日本民族は正直者

きかぬ氣象

民が膨張していくばかりです。學校の試験等によく出来たといふものに、よく出来たためしのないやうに、失敗を痛感するものの標準は、或は完全十全で、それを律してゐるのではないだらうかと思ひます。とにかく日本民族のきかぬ氣は、大陸をふんでみて頼もしいやうに思ひます。私は常に便々たる我が腹を撫して、この中にそれがあるかと思ふ時、シベリヤでも、南洋でも、心の欲するまゝに我行かんといふ念がおこりません。

東京の震災後を見舞つて、朝鮮に歸りました時、某鮮人から「鮮人を斬つたのは本當か。」ときかれて、心苦しうはございましたが、斬らぬと詐ることがさらに苦しくて、「斬つたさうだ。」と申しました。「幾人」と窮迫されて、その頃の東京の噂をそのまゝに、「二千五百か三千」といひますと、鮮人は「ひどいことをする。」といかにもくやしさうでした。そこで私は日本民族の民族精神を語つて聞かせました。「日本民族は、共に泣かうといふ者とは、相擁して泣く民族である。共に笑はうといふ者とは相擁して笑ふ民族である。しかし之を逆の手で取扱つたら、きかぬ氣が承知しない。利害も得失も顧みない。引裂いてたゞきつけて、とゞめをさゝなければ承知しない。君も知つてゐるだらう。六師團の兵で、清國をむかふにまはして戦つたことを。また露國の南下を憤つて、舉國一致でその銳鋒を挫いたことを。これが日本の民族精神といふものだ。君は激し易い短所だといふかも知らぬが、我はこれが日本存立の原動力だと思つてゐる。震災の當事、罹災者はすべて生の危殆を感じてゐた。その時鮮人の中には私利をはかつたものがあつた。騷擾の計劃もあつたやうにきいてゐる。それは一小事だつたかも知らぬが、風聲鶴唳で、流言蜚語を生んだのだ。私も氣の毒に思ふが時の勢如何ともすることが出来なかつたのだらう。」といつたら、「それではじめて事の真相がわかつた。」と、却つて喜ばれました。

日本民族は
涙もろい

た。と、却つて喜ばれました。

日本民族は實に不可思議な民族です。怒りつばいが、涙もろい。餘裕が乏しいやうだが、がま口と生活とを結びつけてだけは、満足の出来ない民族です。背越しの金を持たぬといふも、缺點とばかりはいはれませんが、きれいな所です。私は昨年旅順の海軍記念日を見ましたが、國家の干城である兵隊さんが、安來節の鱈すくひを、田舎娘の姿で踊つてゐました。私はこれを見て、禪機豊かな民族だと思ひました。餘裕もあり機に生きる妙味もあります。自分もこの仲間の一人であることを、ほこらしく感じました。五節句ことに女の雛祭、男の鯉職や吹流し、七夕の星祭など、何といふ優美なものでせう。國民が内省によつて開けた眼でこれらの我が國に生ひたつた風俗・習慣を見る時、バタの香の鼻につく今の世が、異様に感ぜられてなりません。どうしても手拭のきび／＼した感は、これをタオルに求めても得られません。

植民地の材料については、今後の讀本に特に注意して採らなければならないと思ひます。明治二十七八年戦役以前、植民地の少しもなかつた頃ならば、内地の現行讀本のやうでも濟まされるかも知れませんが、今日では臺灣・樺太・朝鮮・南洋と、既に四箇所まで異民族と協力して、その地の文化をすゝめなければならぬ事になつてゐます。滿洲・シベリヤは我が國の植民地ではありませんが、日本民族の東亞に於ける發展すべき地として、特に注意を要する所です。私はひそかに日本民族の進展も衰退も、一に植民地の經營誘導の如何にあるかとさへ思ふ程です。

朝鮮は大陸へかけられた長い橋のやうなものです。臺灣は表南洋へ飛ぶ足だまりで、また我が國の寶庫です。日本民族と臺灣人が相利益する所です。樺太は北海道にあふれた日本民族が、北進する實習地で、南洋

植民地に關
する材料

の防禦第一線とも見られ、遠洋漁業の足だまりとも見られ、さらに南進の飛石とも考へられます。日本民族は幸に有色人種で、寒さにも、暑さにも、相當耐え得る力があります。その上に國が南北に細長くて、北する者、南する者、すべて自分の慣習に最も適する方向を選んで進めばよいのです。行くには日本民族を待つてゐる地が澤山あります。内地は暑いといつても、寒いといつても、肌にくるよい程度です。こんな上國は世界にもあまり多くはないでせう。日本民族が郷土に戀々たるのも、決して無理ではありません。人は濕氣の多い國だといつて批難しますが、大陸の乾いた空氣の中に暮して見ると、年中湯上りのやうな皮膚をしてゐることの快さは、日本獨特です。山を見ても、平野を見ても、潤ひに満ちてゐるといふ感、日本の特有です。故にこの郷土をすててといふことは、日本民族には堪えられないこととせうが、こゝを基石の目として、周面の何處までものびて働き、老後は故山のなつかしい天地に、安き生を送るやうに、循環植民の方針を立てればよいと思ひます。

朝鮮にゐる初等教育者は、誰もいつてゐます、内地の國語讀本は朝鮮海峽に太い一線を引いてゐると。いふ心は朝鮮が眼中にないといふ義です。「朝鮮人夢」と「京城の友より」位で、あつさり片付けられてゐることを、面白くなく思つてゐるのです。いたづらに朝鮮材料を多く入れてほしいなどいふではありません。かういふ讀本によつて育てられた者が、果して將來朝鮮を率ゐる義を解するだらうかとあやぶむのです。私がかやうな事をいふと、甚だ内地の讀本を難するやうで、申譯がありませんが、日本民族が植民地經營のまづいのは、その素養がないからだと思ひます。占領した、併合したといふことには、強い興味を持つやうですが、これをいかに導き、いかに處置すべきかといふ事には、注意が甚だ淡い様です。占領や併合は武力を

以ても出來ます。之を開發誘導することは、その地民族の協力にまたなければなりません。その協力の原動力となるものは、共榮共樂を欲する強烈な愛です。日本民族の崇高な信念にまつものです。

植民地の問題では、民族の精神的融合が最も肝要なことと思ひます。内鮮融和、或は日支親善、これを口にするのは容易ですが、その實をあげることは、永き年月を要しませう。理に於て内鮮日支民族が融合の必要を認めても、情に於て二にして一となる事は、よほど理解の進んだ後でなければならぬと思ひます。故に植民地材料とは、植民地の地理的材料をとりこむことではなくて、その兩民族感情の源泉を清め、固き握手を欲する念を養ふ底の材料をいふのです。

さてこれを内鮮の間に求めると、幸なことには、内鮮は古來交渉の頻繁な所であつたために、その間に交渉の深い傳説、又は事實があつて、材料は頗る豊富です。しかし朝鮮が獨立國であつたがために、そこには困難な事情がないではありません。日支間にもまた親善すべき事實が澤山にあります。臺灣・南洋・樺太、それ／＼重要な材料がありませうが、内鮮日支のやうに、困難な事情は少いかと思ひます。私は朝鮮の在住が比較的長うございましたから、朝鮮をや／＼はしく説いて、他は讀者の推測にまかせようと思ひます。

内鮮は自然の上からも、歴史の上からも、交渉の多い所です。日に二回の關釜連絡、今は景福・昌慶・徳壽の三隻で、八時間で安全に出來ますが、昔は玄海を難處として、餘程苦しんだもののやうです。しかしこの海峽を越えて、儒教も渡り、佛敎も渡り、醫學・曆學、その他織縫の工女まで渡つて來たのです。まして日常生活の必需品等も渡つたことと想像されます。渡つただけならば、朝鮮は先進國、内地は後進國のわけですが、儒教も佛敎も内地化されて、發達をとげました。數十年この方、歐米の文明が非常な勢で流れ込ん

で、これまた我が國に發達をとげつゝあります。東洋の文明の基礎の上に、歐米の文明をとり入れて、内地の文明を作りました。それが併合以前から、不完全な連絡船で、半島に流れはじめましたが、近年はその勢が日に／＼加はるばかりです。昔は朝鮮から内地に流れ、今は内地から朝鮮に流れてゐます。昔は昔、今は今と觀する所に、内鮮の進むべき道もわかり、融和の必要も解せられるのです。

自然の上に見ても、日本海の海流によつて、内鮮の交通がはじまつてゐます。それがいつの世からか知れませんが、親潮が朝鮮の東海岸を洗ひ、暖流が裏日本の沿岸を流れて、樺太に達してゐます。そこに日本海の還流を生じ、沿岸民族の交通を産んでゐます。新潟美人も、恵比須様も、祖先の祖先を洗つたら、或は對岸ではなからうかと思ひます。私は丹波の産です。時々私の何十代かの以前の血には、對岸民族の血が流れてはゐないだらうかと思ひます。日本の古代文化の研究者和辻哲郎君は、いつか「私の血にも朝鮮の血が流れてゐます。」と話しました。和辻君は播州仁豊野の人、或はさうかも知れませんが、但馬の出石に石神社として天日槍がまつてゐるので、たしかな證據はないとしても、さういふことが考へられるのでせう。

國文學の先生が非常にお喜びになる出雲國引の歌の精神が、朝鮮には完全な傳説、日月の精となつてもつと精しく、もつと脚色されて残つてゐます。我にあるものを朝鮮に強ひることは出来ませんが、彼にあるものを我が知らないといふのは、彼を指導する任にあたる者としては不用意です。ことに朝鮮の正史に立派に残つてゐる新羅第四代の王、昔脱解の事實は、内鮮融和の材料として尊いものかと思ひます。話の筋は倭國——九州——の東北千里多婆那國——丹波？——あり。その國王の妃、はらんで七年、大きな卵を生みました。王之を見て不吉として、海にすてよと命じました。王妃は悲しみに堪えず、美しい箱を作つて、その

日本海の海流

昔脱解

卵を入れ、まはりに財寶や由緒をくはしく記したものを納めて、固く封じて、海に流しました。箱は流れて金官國——任那——につきました。土地の人は之を見て、怪しい物として、又海におし流しました。箱は流れて新羅につきました。一人の老婆がこれを見つけて、拾ひあげて、蓋を開いて見ると、中には玉のやうな男の子が生れてゐました。この時まで一羽の鵲がその箱を守つてゐましたから、鵲の字の鳥を去つて、昔を姓とし、箱を解いて出したから、脱解といふ名をつけました。老婆は其兒を家に伴れ歸つて育てましたが十歳ばかりの頃から日々海に出て、魚をとつて老婆を養ひました。老婆はある時脱解の素性をあかして、これから學問に志し、立派な人になるやうにとすゝめました。脱解はその言葉に従つて、師について學びましたが、その進歩著しく、漸く名を知られるやうになりました。新羅第三代の南解王は、脱解を召して、政治上の御相談をなさいました。南解王はその女を脱解にめあはせ、後にはその位をお譲りになりました。現に脱解の立派な古墳は慶州にあり、今の昔氏——石氏——の祖先でありますから、大正七年崇信殿をその居城月城の跡に建てました。新羅の王は朴・金・昔の三氏で、朴と金は子孫繁榮し、昔は稍おとろへました。ことに漂泊の王として、他二氏の壓迫もあつたやうです。それが日韓併合の詔勅が出ると、その子孫は大いに喜んで、早速崇信殿の建築を思ひ立ち、七年に完成したといふことです。これも亦我が國民が知らなければならぬことと思ひます。

これはたゞその一例を傳説や正史の上にとつたのですが、濟州島の創世紀でも、奈良が慶州に似てゐる所を見ても、さまざまな想像を逞しくすることが出来ます。必ずしも古い所にはかり求める要はありません。私が赴任して後の出來事にも、日本民族ことに内地學童の幼く美しい心によつて、意義あらしめなければなら

らぬ墓が、京城の近郊清涼里に一基できました。左に私の國語小讀本に入れようと思つて、整理してゐる材料をのせて見ませう。

晋殿下

晋殿下

一

大正十一年四月二十六日、午後七時三十分、李王世子良殿下、同妃殿下、——梨本宮方子内親王——及び晋殿下はおそろひで、京城驛におつきになりました。私はプラットホームにお迎へ申しました。世子殿下・妃殿下は、長い／＼プラットホームをお進みになりながら、出迎の外國人に、一々握手をたまはりました。

晋殿下もそのあとから乳母にだかれて、私どもの前をお通りになりました。すこやかさうなまる／＼とした頭を、右に左にくり／＼と向けて、にこ／＼と笑つていらつしやいました。私は「この君がはやく生立ちたまひて。」と思ひましたら、何かは知らず、涙がしみ出て來ました。

二

二十八日午後三時、世子殿下、同妃殿下に拜謁を仰せつけられました。參殿して、一室に待つてゐますと兩殿下は前面數尺の所まで、御出ましになつて、會釋をたまはりました。長い旅のおつかれもなく、うるはしき御機嫌を拜して、まことにうれしうございました。

三

五月五日は私にとつて記念すべきお節句でした。李王家から世子殿下、同妃殿下の御入國について、御招

待をうけました。午後一時秘園にまゐりますと、こゝに集つた人々は、朝野の紳士淑女二千五百餘人、さかなな餘興がありました。李王殿下、同妃殿下、李王世子殿下、同妃殿下、その他御一門の方々もお出になつて、共に御覽になりました。三時半爆竹の音と共に、食堂が開かれました。つゞいて園遊會がありました。

私は秘園のおくぶかい所に、きはめて大きい鯉轡と、色のあざやかな吹流しのたててあるのを見ました。

晋殿下のために特に初節句のお祝はないとうけたまはつてゐましたが、その心ばかりのお祝が、かへつてうれしく、李王家のいよ／＼さかえたまふやうにといのりました。

四

九日は三殿下御出發の日でした。お見送り申さうと京城驛にむかふ途中、晋殿下御病氣のため、御出發御延期。」との告示を見て引返しました。

五

十二日午後四時過、電話がかゝつて來ました。

「晋殿下、本日午後三時十二分おかくれになりました。」

と。私は受話機をにぎつたまゝ立ちすぐみました。二十六日京城驛でおむかへ申した殿下のお姿が、あり／＼と目の前に見えました。御病氣は何だつたらう。皆様のおなげきはどんなだらうなど、色々と思ひつづけました。

六

五月十七日晋殿下のおとむらひがありました。私はその朝告別の御焼香をいたしました。御父上、母上とわかれたまひて、この君たゞひとり、この朝鮮にとどまりたまふと思ふと涙はとめどなく流れました。

七

五月十八日午後八時三十分、李王世子殿下、同妃殿下御出發といふので、京城驛にお見送り申しあげました。雨がしと／＼と降つてゐました。お出の時はお三方でしたが、今お立ちになる兩殿下を拜して、仰ぎ見るものではありませんでした。御心中を御察し申すも涙の種でした。

八

五月二十一日は日曜でした。私は朝早く清涼里の晋殿下のお墓におまゐりました。新しい假の丁字閣(拜殿)のかあなたに、小さい土まんじゆうたゞ一つ。郭公や黄鳥のなく聲の中で、靜かにねむつていらつしやいました。

私はその後たび／＼おまゐりましたが、一年祭には立派なお墓が出来ました。内地の幼年・幼女・少年少女にいつまでも記憶されなければならぬお墓です。

晋殿下の御病氣が何であつたかを問ふ要はありません。また何等想像を加へる要もありません。しかしおなくなりになつた事は事實です。いやしくも内鮮融和に心ある者は、晋殿下のお墓が清涼里にあることを忘れてはなりません。殿下の死を永く有意義のものとしなくてはなりません。

私は日本國民としての朝鮮民族にも、他民族と握手して發展する道を求めさせるために、「鴨綠江の鐵橋」と題して、卷の七に左の文を載せておきました。

鴨綠江ノ鐵橋

第十三 鴨綠江の鐵橋

- 鴨綠江ニハ昔カラ橋ヲカケタコトガナカツタ。明治四十二年朝鮮鐵道管理局ガ、此ノ工事ニ着手スルト、誰モソノ成功ヲアヤブンダ。中ニハ無謀ダト笑ツタ者モアツタ。トコロガ四十四年ニ出來上ツテ以來アヤブンダ人モ笑ツタ者モ渡ツテ居ル。
- 橋ノ長サガ三千九十八呎、橋ノマン中ヲ鐵道ノれゝるガ通ツテ居テ、兩側ニ八呎ノ步道ガアル。十二アル橋桁ノ中程ノ一ツガ、結氷期以外、日ニ四回開閉スル。開ケバ十ノ字、閉ヂレバ一ノ字ニナル。誰カガ日本ノ鐵道ノ三大工事ノ一ツダト言ツタガ、ホンタウダトオモフ。
- 五百噸以上モアル一ツノ橋桁ガ、四人ノ力デマハルノハ不思議ノヤウダ。橋桁ノ中央デ、四本ノ挺子ヲソレ／＼穴ニハマテ、四人ガ同方向ニ押シ始メルト、先ヅれゝるガ上ニアガル。次ニ橋桁ノ北端ガ西ニ南端ガ東ニ向ツテ、シヅカニ動キ始メル。橋桁ガ中央ノ一本ノ柱ニ支ヘラレテ、動イテ居ルノヲ見ルト、人間ノ工夫モオドロクベキモノダト思フ。
- 橋ノ開クノヲ待ツテ居タ大型ノじやんくヤ帆船ハ、ツマイテ通過シ始メル。サスガニ鴨綠江ダ。上下スル船デシバラクハニギヤカデアル。
- 橋ノ上ヲ渡ツテ居ルト、イロ／＼ナコトガ思ハレル。鳥ハ自由ニ川ノ上ヲ北ヘモ南ヘモトブ。風ガ吹クト、安東ノ柳モ、新義州ノ柳モ、同ジ方向ニナビク。晴雨寒暑ニ國境ナク、月雪花ニモ國境ガナイ。
- 鴨綠江ノ水ハ幾萬年、晝夜ヲワカタブ流レテ居ル。朝鮮カラ流レ出タ水モ、支那カラ流レ出タ水モ、一ツニナツテ流レテ行ク。

□ 此ノ橋ヲ渡ツテ、安東ニ買物ニ行ク人モアレバ、此ノ橋ヲ渡ツテ、新義州ニ働キニ來ル人モアル。日支兩國ノタメ、此ノ橋ノ功ハ大キイモノダ。

私は鴨綠橋上に生きた想を得ようと思つて幾度か安東へ、新義州へと行きつもどりつしました。その間に得た想はこれでした、國境といふことは、人の定めたもので、決して必然的のものではありません。勿論犯したり、占領したりすることは罪惡でせうが、共存共榮を目的として、その土地を協力開發することは、決して壓迫を加ふべきことではありません。現に間島にある朝鮮人は三十萬ださうです。北滿及びシベリヤにはいつて、正業や不正業に就いてゐる鮮人も可なりの多數です。これらはすべて、自然の勢にのつて流れ込んだ者です。火田民——咸鏡南北道あたりでは、平野の生活で失敗した鮮人は、一族を提げて、山奥に移住します。さうして山に火をかけて、そのあとに作物をしつけ、その收穫物によつて生きていきます。年に二回は收穫物を携へて、里に出で、鹽にかへて歸ります。——の稍大仕掛なのに過ぎません。鮮人には既にこの運動があるので、これを若し民族活動に結びつけたら、日本國民は滿洲・蒙古・シベリヤの荒蕪地に次第に寶庫をうちたてるのが出來ませう。

日本民族全體の目が植民地問題に開いたら、南米やメキシコはあまりにかけはなれてゐるとしても、さしづめ日本海が近江の琵琶湖化して、對岸各地に吾人の穀倉をたてるのが出來ませう。日本はあまりに表裏關を立派にすることに腐心しました。今後は裏口を整理して穀倉との交通を便利にしなければなりません。人口の激増を氣にする前に、この考を堅めることが肝要です。双子でも、三つ子でも生むがよろしい。北すれば、必ず空漠たる原野に到達します。

海に關する
材料

朝鮮と樺太を除いては、日本の周圍はすべて海です。海は船といふ交通機關によつてむかへば、平野よりも自由な世界です。この世界に活躍すれば、世界的の商業を營むことが出來ます。また世界貿易品のサイトリも出來ます。海産物に目をつけたら、遺利はまだ澤山にありませう。とにかく日本民族は海に親しめば發展し、海をうとめば衰退します。徳川三代將軍の鎖國のお蔭で、日本民族はたちおくれをしきました。戸を閉して惰眠をむさぼつてゐる間に、戸外には大盜が横行してゐました。地圖の上では、誰が見ても、東亞民族の活動舞臺として與へられた南洋諸島、及び濠洲は既に他の占有する所となりました。目ざめて驚きましたが、既におそい、たちおくれです。意氣のあがらぬことおびたゞしいものです。しかし悔んだり、憤慨したるすることは、この間に處する道ではありません。要はたゞ一、日本民族を海に親しむやうに仕向けて、世界の公海に自由に活動させることです。

世界の商業交通に従事するにしても、海産の遺利を拾ふにしても、海をおそれないことが第一です。日本民族の若き血を、海にむかつて沸らす事が大事です。私は生れが丹波で、海のない國です。船に乗つては、よふことを知つて、楽しむことを知らない者です。忌々しいとは思つてゐましたが、自分を海上になげ出す機會が全くなくて、修業の道が立ちませんでした。關釜連絡船など、何回のことでも、海の修養にはなりません。所が天未だこの老いたる者をすて給はず、昨年夏南洋に行かなければならぬ機會が與へられました。六月二十八日神戸から乗船、門司・小笠原・サイパン・ヤップ・パラオまで行つて、四日間、パラオに滞在、またヤップ・サイパン・小笠原・横濱と歸つて來ました。其間ちやうど一ヶ月、航海二十三日かうなつてはよつてばかりも居られなくなりました。長い航海になると、船長もあまり忙しくありませんから、筑後丸の

南洋行

船長高瀬さんを師として航海の事を學び、船内くまなく見學などしました。私は船は浮いた國家であると思ひました。船の数が殖えるといふことが、領土が殖えるのと同義だと思ひました。この浮いた領土は、國民教育の場所として有效な物だなどと思ひました。同行の北垣恭次郎君と屢々語つた事でした。「青年期のある期間は、自己を育てる爲に、船員生活をさせる事が肝要である。」と。まことに海を解する民族は榮え、海を解しない民族は衰へます。

仁平宣威君

かうした機會に、私の海に對する理解のいとぐちが開かれたと同時に、私が尋一から尋六まで、我が子の様に育てた仁平宣威君が、水産講習所にはいつて、唯今遠洋漁業科に在ります。仁平君は武士的の海員です。父は日露戰役に沙河附近で討死せられた中佐で、その一人子です。海を熱愛する青年です。私は常に仁平君に語ります、「君の稚い時には私が師で、私が老いては君に師事しなければならぬ。」と。仁平君は隨意選題育ちの能文家で、様々な海上生活をまとめて私に與へてくれます。君曰く、「先生は海にかけてはだめだ。私が代りに書いて來て上げます。」と。この點に於て私は非常な幸福者です。老いたる一面と若い一面を持つてゐると思ひます。

トロール船

彼がトロール船の練習を終へて、歸つて來た時の話に、「先生、トロール船は海上に於ける不良少年と仇名せられてゐるのです。頗る大膽であるが、一面また小心です。船が鋼鐵製で、吃水が深いから、波浪いかに高くとも、難破のおそれがありません。故に低氣壓の襲來を、無電が報じて、「また肩休めか。」といつて、氣にする者はありません。けれども下關の魚價については、甚だ敏感で、一日として之を知らないでゐることはありません。作業は四時間おきに網の袋をあげて、魚の始末をしますので、陸上の生活とは、睡眠

時間が全くちがうので、乗船一週間ほどは、頭が馬鹿になります。それもなれると何でもありません。トロールの船長が話してゐたといふ話に、ある時化の後で、波のまだ高かつた時、水夫がデッキで作業をしてゐた。波がデッキを洗つて、足をさらはれさうです。大きな波が來ると、互に警戒して、前に引いてゐる網につかまる。すると大波は腰から下を洗つて行く。行けば又作業に従事する。こんな事をしてゐる時、遙かの波の峯に、一抹の黒煙が見えた。それは驅逐艦だつた。水夫等がかへりみて、「今頃驅逐艦が何しに來たのか。」と。いつてゐると、無電がかゝつて來た。「難破か。」と。トロールからはたゞちに返電した。「冗談いつちやこまる、作業中だ。」と。私はこれ聞いて、海の痛快味はこゝだと思ひました。人はかうした痛快な一句を言ひきることを目的として、働いてゐるのかとさへ思ひます。」

私が仁平君から送つて來た手紙によつて、まとめた海に關する二編——南洋讀本に採つておきました。——を左にかゝげます。是非とも私のために、祖國のために、目を通して下さい。

三十七 責任 (南洋國語讀本卷一補習科用)

鮪の流網をあげてしまつて、熱海の沖を出たのは、八月十八日の午前一時でした。目ざすは大島波浮の港です。しけようとする強い南風をまつこうにうけて、突進するのでした。

僕は舵輪を握つています。左には水夫長、右には春木君がいました。船が進むにつれて、波はだん／＼大きくなります。白波もまじつて來ました。常には水面から一間半も出ている船を、波わらくにのんで、船橋にいる私等三人にぶつかつて來ます。身わびしよぬれになつてしまいます。ローリングもするが、ピツチングがひどい。舷が波の峰から谷にすべる時、「また來た。」と思ふ間もなく、頭から潮をあびる。そ

れが目にしみて、あけてわいられません。やつと腕でぬぐつて、前方を見ると、船の進路がいくらかくるつています。それをなおしてわ進みました。ただ航海ランプが、私ども三人に勇氣をよめるようにかがやいています。三人わ一言も話しません。きこえるものわ、風と波と、エンジンの音で、實にすごいものでした。

「來たぞ。今度のわ大きい。悪魔が大きな口をあけて、笑つているようだ。」

僕がこういふと間もなく黒い小山のやうな波が、もく／＼と頭をもちあげて來ます。舳にぶつかつて、左右兩舷にわれ、それが船橋の下で一しよになつて、船橋に舞い上つて來ます。残りのものわ艦え流れて網にくだけてしまします。わづかに十七噸の七號艇、航海しているというよりわ、潜航しているといつた方が適當です。時にわ波の峯にのつて、スクリーンのからまわりする音が聞えます。

交代する時が來ました。春木君が舵輪をにぎりました。この時始めて、

「えらいめにあいますね、今夜わ。」

と水夫長がいました。僕わ急に寒くなつたから、機關室にはいつて、十分ばかりたつて出て來ました。見ると航海ランプのせいにしてわ春木君の顔がいやに青い。

「どうかしたのか。」

ときいてるうちに、春木君わ舵輪をにぎつたまゝ後に倒れて來ました。

「しつかりしろ。」

と脊活を一つ。

「腦貧血らしい。」

といます。

「まてつ。ウキスキーを持つて來てやる。」

急いで行つて、持つて來ました。一二はい飲ませると少し、元氣が出ました。

「春木、休めよ、なあ。」

と僕はいました。

「春木さん、お休みなさい。あとわ三時間くらいですから、仁平さんと私で大丈夫です。」

と水夫長がいました。けれども春木君わ、

「かまわないでくれ。」

といつたきり、舵輪を握つています。

「むりをなすつちやいけません。からだをこわしてわだめです。ねていらつしやい。」

水夫長わまたこういしました。

「ほんとだ、春木休んでいろよ。」

と僕が春木君の手をとつて、連れて行こうとしましたが、どうしても舵輪の手を放しません。そうしてきつとして、しかも靜かにいしました。

「待て、おれには今ワツチといふ義務がある。責任がある。この義務をすてて、ねむれるか。死んでもかまわない。しかしおれわ死にやしない。大丈夫だ。もう三十分かじをとつてからねる。」

春木君の目にわ、涙が光っていました。斷乎とした決心があつたのです。水夫長も僕も、今わ何ともいふことが出来ませんでした。

僕わ波の高い太平洋のやみの中で、春木君の偉大な心にふれました。また責任感のつよい春木君を、私等の仲間を持つことを心強く思いました。

六 流し網 (南洋國語讀本卷二補習科用)

鮎の流し網をほうりこんでから、まだ一時間しかたちません。日わとつぷりと暮れてしまいました。僕はやみの中でただ一人、見はりをしてゐます。七號艇わ今江の島の沖十湮あたりを流れているのです。風わものすごくマストにうなつています。波わふなばたをうつたり、デツキをあらつたりしています。船長が突然、

「イナサだぞ。」

といました。南の風が南西にかつたのです。

「イナサじや、今夜わしげますね。」

と水夫長わ笑ひました。

變な風が吹きはじめました。雨も降つて來ました。かつばを着ていても、雨が肌にとりります。首元からしずくがぼたり／＼とたれると、それが脊すじを傳うので、自然と身ぶるいが出ます。夏でもこれですから、冬わどんなに寒いでせう。

雨わ小やみになりました。星が二つ三つ見えて來ました。十二時半、總員デツキに出ました。皆かつば

を着て船にしばりつけてある流し網の網をといて、「えんやーえー」と引きはじめました。網わ少しずつ近づいて來ます。

長さ六百間幅三間の網を、「えんやーえー」とたぐりこむごとに、夜光蟲がさつと光ります。實に見事です。まるで網全體にイルミネーションをしたようです。美しいといふよりも、すごいくらいです。

網を引き上げている茶色のかつば十五名のうち、半數は船によつて、青い顔をしています。ただ「えんやーえー」と調子をそろえて網をひくばかりで、むだ口一つきくものもありません。ぎろりとした眼、むすんだ口に、男らしい決心があらわれています。デツキを洗ふ波に、足をさらわれないようにふみしめています。航海ランプの青い光にてらされたこの作業の有様わ、どんな畫家にも書きあらわすことわ出来な

いと思ひました。

網わすん／＼上るように見えますが、一度に二尺とわ上つてきません。ローリングのひどいデツキでのこの作業わ、實に苦しいものです。

「とれたぞ、鯉が二十ばかり。」

と船の一人が叫びました。之に力を得て、網わ船から中央え、中央から鱸え、たぐりこまれて行きます。がまんがしきれなくなつたと見えて、誰かが

「苦しいなあ。」

といました。その時仲間の一人が、
「ばかつ。」

とどなりつけました。そうして

「苦しいといつたつて、苦しいのがなおるか。むだ口をたぐく、苦しくつても、だまつて作業をするのが、僕等の美しい所だ。」

とつけくわえました。全くです、それが海に生きるものの意氣です。

「また降つて來やがった。」

と一人がいました。すると

「えー、雨わどんどよ、そりや舢たぐくよー。心なやます西の風よ。そりやまつたくだよ、えーだよえー。」

とだれかが歌いはじめました。つずいて

「激浪ごう／＼よ、元氣わつのるよー。舢うちこす浪の山よー。」

と歌いました。この歌わおかできくのとわ全く心持がちがいます。歌というものは、うれしい時のみ歌うものでありません。苦しくてもうたいます。これがしんけんの歌でしょう。

網をすつかりあげてしまつたのが午前一時半、ちようど十二時から作業にかゝつたのですから、一時間半はたらいたわけです。網が全部艦にきれいに積まれた時にわ、舢によつかゝつて吐いている者もありました。

作業がすんでから、

「こんなに苦しんで、僕等わ船乗中の船乗になるのだ。」

とだれかがいいますと、

「親に見せたら泣くだらうよ。」

と、また誰かがいいました。

僕をはじめ海は美しい所、楽しい所とばかり思つていましたが、海に生きるには苦しい事もあります。しかし苦しい底から湧いて來た楽しさでなければ、眞の楽しいものであるまいと思ひます。私の生きる所は海です。

船室にはいつてぐつすりねこんでしまいました。目がさめて見ると、私は三崎の油壺の中にいました。海國民の持つ讀本にはかうした材料を缺いてはならないと思ひます。

足引の山鳥の尾の長々と、讀本材料に就て書いて來ました。これには讀者もさぞ驚かれた事と存じます。これが最近三四年間讀本の編纂に没頭してゐた私の止むに止まれぬ叫で、この中には讀本編纂についての苦心もあり、内地に於ける現行國語讀本をいかに讀むべきかといふ暗示もあり、さらに日本民族の持つべき今後の讀本についての希望もあります。概念的に個條書に書いても、世の人をうなづかせる事は浅いのです。骨にはふくよかな肉がついて、血が通つてそこに美があり、愛が生じるのです。私が何を目的に何を書いてゐるかがちよつと分らないやうなこの百數十頁を、よく／＼讀み味はうて頂きたいと思ひます。その御努力によつて今後いかなる國民が最も幸福なるかといふ輪廓の中に、兒童の實生活や想像生活から、いかに國民生活の基調を培つていくべきかといふ私の最初の立言が、會得せらるゝだらうと思ひます。

私は私の愚なる努力に近いこの所説に、目を通して下さる方々の、國語讀本を前にしての國語生活を靜か

にながめたいと思ひます。今までは簡単な文として、深みのない文と御覽になりました讀本の文が、意外に生氣に富んだ人生の記録として、御讀みになることが出来るだらうと思ひます。讀本が皆様の國語生活の重要部に位置を占めるやうになりましたら、讀み方教授の新生命は、そこから溢れて流れ出ませう。讀本各課の異つた味を、兒童と共に味はへられるやうになりませうか。

かへすくも讀本に關する意見としては甚だ粗雑で、かつまとまつてゐないことをお詫び申します。しかしまとまつてゐないものは、まとまるといふ將來のあることを御承知下さい。それは私の任であるか、皆さんの任であるか、あるひは共同の任であるか、そこは見る人の心々です。研究の幼稚な者は、即ち若い氣分にみちたものです。かはいがつてやつて下さい。

三 讀み方の教授

東京高師創立記念日

讀み方の教授に關して書きはじめようとする時、古い記憶であるが、東京高等師範創立記念日のことが突如として浮んできました。六七年以前の事でした。創立何十年かの記念日に、午前九時講堂で記念式があつて、たゞちに餘興にうつりました。迎賓橋のかなた、百尺山の麓にしつらへた舞臺には、軍樂隊がさかんに演奏してゐました。森の樂隊といふ環境にふさはしい曲に進みました時、前の方にきいてゐた赤總の一年生が、一人つくんと立ちました。まるく太つた右手をたくくあげて、コンダクターのタクトにあはせて、拍手をとりはじめました。まつたく曲の中にとけこんだといつた風でした。これを見た附屬小中學及び本校の職員生徒は、皆微笑して、之を眺めてゐました。また一人立ちました。これは前の赤總よりも少しせいが高うございました。二人の動作は曲につれて美しく流れていきました。

昨夜の嵐に引きかへて、今日は快晴の日本晴、今も中秋の清い日光が餘興場を一ぱいに照してゐます。どこから飛んで來たのか吹き切られた一間あまりの蜘蛛のいとが、四年生の男の子の三角帽子のかどにひつかゝつて、風に吹かれて流れてゐます。それが時々うねりを見せると、日光がこれに反映して金箭を射るやうに光るのでした。この光がまたこの場にはふさはしい面白いものでした。

私をとりまいてゐた尋六の女兒が、「先生、軍樂隊と、かの小コンダクターと、この金箭の光をあはせての感じ、これが本當の記念日氣分といふものでせう。」といひました。私のいひたいと思ふ事を、彼がいつて

くれました。こんな気分につけて、記念日の時は静かに流れていきました。

私は今も何かの機会に、これを思ひおこしては楽しむのです。私は私の新しい立言のもとに、多少かはつた読み方教授を考へようとするたゞ今、この舊記憶がうかび出ました。しづかに考へますと、これが私の教授の全部のやうにも思はれます。この場面即ち餘興場に於ける軍樂隊、赤總の小コンダクター、帽子のところがかりから流れる金箭、之は教材です。讀本でいへば文章に相當するものです。これに對して師弟ともに生々とした感情に浸つてゐるのです。そこに卒業式にも、三大節の儀式にも、味はう事の出来ない獨特の気分がたゞよつてゐるのです。それは師も特に感じてゐたが、弟子の口によつて發表せられたのです。そこに結晶した記念日気分といふものを眺めて、この一日が極めて有意義のものとなつたのです。私の新しい読み方教授といふのは、この外には何物もないのです。これが全部です。

これから説きますことは、もはや蛇足に近い事ですが、しかし老婆心でそれを添へてみませう。教授はそれが何科であつても、如何なる材料であつても、師弟ともに之を研究し鑑賞し批評するが爲に、共に流るゝ事です。共流、之が私の教授に對する唯一の信條です。教師が児童を流してある目的地に到達せしめようとするのが教師中心の教授で、児童の流るゝに任せて、教師は環境の整理に工夫をこらすのは児童中心の教授です。教師中心の教授でも、児童中心の教授でも、その中に一貫した流がなくつたら、教授は意義をなさなくなりません。流轉が人生だとさへとなへる人があるではありませんか。しかし教師中心の教授には、幼弱なる児童のためにする念が強くて、流れるといふよりも、流すといふ場合が多いやうです。ある種の児童には壓迫をさへ感じさせる事があります。児童中心の教授には、児童はかうした物だといふ念が強うござい

す。児童自身で流れていきますが、流れの亂れる事が度々あります。教師はとかくその流の觀察者、或は監視者といふ格で、流の外に立つ傾があります。共流、之ぞ私の教授の精神です。師弟相共に流るゝ所に、眞摯な理解を生じ、共鳴の熱を生じ、研究・鑑賞・批評についての楽しみを感じ、こゝに向上の大道を歩むことが出来ると思ひます。

大阪名物灘萬の蒲鉾は昨年からなくなりました。それは主人が年をとつて、職工と共に蒲鉾を作る勞役に堪えられなくなつたから、幾十年かのしにせをすて、蒲鉾店を閉鎖したのださうです。ある人が「監督して、商賣を繼續したがよからう。もし閉鎖するならば、しにせを賣つては。」と忠告すると、主人頑としてきかず、「監督では灘萬の蒲鉾は出来ません。店の名を賣つて、年來のお得意様を欺くには忍びません。」といつたさうです。有難い話です。共に流るゝといふことが、何をうむかはこの話によつても明かです。教授ばかりがそれにもれてよいものでせうか。親鸞上人は「弟子一人も持たず候。」と仰せられ、明治天皇は「汝臣民と俱に拳々服膺して、皆その徳を一にせん事を庶幾ふ。」とお諭しになりました。共流は眞劍の生活をいとなむ唯一の道です。

私は高師附屬小學校に訓導をしてゐました頃、日々父兄の參觀や地方教育家の參觀をうけました。時には之が批難の種になつて、「芦田は參觀人にこびる教授をするのだ。」などいはれたことがありました。私はその頃から「教授は一の流れである。よしその流れに緩急があつても、停止してはならぬ。もし停止することがあつたら、師弟が教室に相對してゐることが無意義になる。」と信じてゐました。その児童の流るゝ様を見ようとして集つた父兄や參觀人が、児童と共に流るゝことは當然のことです。參觀人があくびをしたり、外

の遊戯をながめて興じたりしてゐるやうでは、児童はより以上にあくびを催し、外の遊戯に魂をうばはれてゐるのです。私はたゞ流が亂れたり、停止したりすることをおそれました。それが或は參觀者に喜ばれたのかも知れません。

私は國文科の教生諸君に、年々同一のことを繰返して話しました。「皆さんは教授の奥義を既に御領得になつてゐます。といふのは文をお書きになりますからです。文を書く調子で、教授をおすゝめになれば、それで成功です。」と。いふ心は叙事文に尊い所は進行です。叙事文とは人の行動を記した文ですが、教授は叙事文となり得るものです。要するに進行即ち流が生命だといふのです。筆の先では文を綴り得る人はありますが、文のやうな教授をする人は實に少うございました。しかしこれは私が教師中心の教授を信じてゐた頃の話です。

ある教案

この頃地方のある小學校で、尋五の讀み方を主とした研究教授を見ました。教材は尋常小學國語讀本の卷の九第十四麥打(二)でした。教案に

- 1 前時の復習(一の文の場面内容等)
- 2 (一)の文を讀んだ感想文の發表
- 3 目的指示 今日(二)の文を調べて、何物か尊いものをつかみたいと思ふ。
- 4 全文自由讀(力に應じて形式内容を讀みます。)
- 5 朗讀(一二生、自由讀によつて得た所を一步深く。)
- 6 大意(兒童のとらへ得た所を發表さす。)

7 文字(本文と結びつけて教授す。)

8 自由讀(相互研究)

9 質問に應じて教授す。

10 本文をたどりながら内容形式の精査。

11 本文を讀んでの感想

12 朗讀(實況を思ひうかべて)

13 (一)と(二)の文を比較して妙味の吟味(時間の都合によつて、この項吟味の箇所を暗示するにとゞむ。)

この教案による教授は教授者の態度がよく、運び方も巧妙でありましたから、児童は樂々と流れて行きました。この教案のおもてだけで見ると、教師によつて設計されたあとから、児童がついて行く傾が強くございませぬ。けれども2の感想文の發表、4の全文自由讀、ことに8の自由讀、相互研究等には、児童本位の作業が加味せられてゐます。しかし私の立言を基準として、流の上——自然の推移——から評したら、可なりむづかしいものがあります。その最も甚だしい所は、6の大意發表と7の文字教授の間で、大意の發表が何のために文字の教授を必要とするかに想到する時、東する流を北に或は南に向けた位の無理が見えます。實際の教授を見てゐても、こゝが甚だ難關でした。

傾斜のある地面にバケツ一杯の水をあげたら、その水は低きを求めて流れます。窪い所にたまると、流れる力を失つたやうに見えますが、そこをみたせば、また性の赴くがまゝに、低きへ／＼と流れて行きます。

教授と學習
の融合混一
したるもの

試みにお互の前に一篇の小品文がおかれたとせませう。讀まうとする心が動いたと致しませう。この動きは他の力強い動きにさまたげらるゝことの無い限り、これを讀破してある満足を得る迄、自然の流を追つてやまないものと思ひます。兒童の前に讀み方教材を提供した場合も、これと同一であると思ひます。教師が道案内としてあまり多くの世話をやかず、兒童もあまりに我がまゝを振舞はないで、自然の要求に基く心の流にしたがつて、師弟共に研究し、鑑賞し、批評する事が、教授と學習の融合渾一したものかと思ひます。

かやうに立言を進めて來ると、それを實現する方法について如何にすべきかとお尋ねが、必ず起つて來ませう。その根本の問題は、教師の信念態度にあることは申すまでもありませんが、さしづめ改めなければならぬのは教授用語です。教師中心の教授に教師中心の用語あり、兒童中心の教授に、その用語あることは當然です。したがつて共に流るゝ教授には、その精神の籠つた用語があるべきです。「讀め。」とか、「讀んでごらん。」とかいふことは、自然なくなつて、「私が讀みませうか。」とか、「あなたが讀みますか。」といふやうな言葉がさかんに用ひられさうです。「書物と雜記帳を出して。」「何頁を開いて。」などいふ語は、おそらく教室にはきくことが出來なくなりませう。特殊の場合の外は。書物を出すこと、雜記帳を出すこと、本日學習する箇所を開くことなどは、無言のうちに兒童がせつせと運ぶ仕事です。揃つてする必要もなく、それが揃つたとて、人間として別に見上げたことでもありません。むしろそんな事にかゝはつてゐるだけ、人間を低落させてゐるのかと思ひます。

餘談のやうですが、共に流るゝ教授の出發點におかるゝ禮は、從來の級長の號令の下に、そろつて之を行ふものとの考へ方をかへたいと思ひます。これからお稽古がはじまるのですから、先生に對して一禮すると

改良すべき
教授用語

考へても、あるいことではありませんが、これから學習を開始するその事の前に、敬虔の念の發表として、師弟ともに一禮してはいかゞでせう。宣教師が信者と共に神の前に禮拜するやうに、師弟ともに求道の第一歩に於て、禮をもつて開始してはいかゞでせう。この禮は合圖によつて、首の運動を行ふのとはちがひます。まして兒童が禮を行つた後に、教師がこれをうける意味に於て、やゝ後れて行ふやうな、似て非なる禮とは勿論ちがひます。禮一つをすら眞の意義に引返すことが出來ないやうでは、教育を云々することも如何なものだらうかと思ひます。

私の所説がもし現今の教育界にその十が一でもいれられて、教授が改革せらるゝ日があると致しましたら、その教授はしつとりとしたものでせう。無用の言のない教室が現出しませう。無用の言と申したら、多分先生方は耳を鋭くなさいませう。「我は無用の言を用ひたことがない。」と。さうした御用意であるから、十が三四も五六も無用の言です。失禮ですが讀み方教授の際に問答せらるゝ一々を、仔細に詮議したら、無用か有害かに屬する言葉が甚だ多からうと思ひます。「繪をごらんない。子供が幾人ゐますか。」「四人。」「一人は何を持つてゐますか。」「ささ。」「三人は。」「土手をかけてゐます。」「いつた類。——三の巻のさゝ舟——かうして一問一答によつて運ばれて行く繪の觀察は、果して何でせうか。多くは無用か有害のものです。少くとも目のあいてゐる者には馬鹿にしたやうな話です。

さらにその間に答へようとして發言を争ふ兒童の様を見るといかにも大發見をしたやうな態度です。四人ゐる子を「四人。」といひ、みよ子の持つてゐるささを「ささ。」といふのが、どれほどの事件でせう。市場のせりは生活に關する眞剣の仕事ですから、争つて値をつけます。一問一答は自分が答へなければならぬ

静かな教室

發言を争ふ
兒童の舉手

事ではありません。ほめられたさが一ぱいで、この狂態を演じるのです。研究教授の時など、殊にこの狂態が甚しうございます。するとあの組はよく活動するなどいつて、意外の稱賛を博し、教師も得意になる事があります。目的に向つて流るゝ以外の活動が、もしも價值があるならば、教室には鐘や太鼓の囃道具を設備する要があらうかと思ひます。

さる科學者が、教育や教授は常識の範圍に屬するものだと評して、一時教育界に物議をおこしたことがありました。私は教育・教授の研究が進んで、科學になるものならば、成る日の早いことをいひますが、今日の場合には常識を逸しないやうに注意する事が大切です。明治十六年改正教授術の出で以來、この一問一答が奨励せられて、新教授はかくすべきものと誤解せられました。爾來四十年、これがために兒童のまともな考へる慣習のそこなはれたことは甚だしいものです。おそろしいことです。

一問に對して齊答せしむるに到つては、沙汰の限かと思ひます。これは今を去る二十幾年前、源を福岡に發して、九州一圓に廣がり、今は海を越えて、朝鮮に盛んに行はれてゐる事です。魂のこもつた國語は、かう方便的に、機械的に駄用せらるべきものではありません。私は朝鮮を去るにのぞんで、國語の第二義的——機械的——方便的——使用のあらたまらない間は、朝鮮の國語教授は眞の發達をとげますまいと申し残して來ました。

問答がかうした淺ましい事になつたのは、漢文教授を繼承した注入教授が、舶來の新教授・開發教授に移つた時からでした。それは明治二十年から三十年頃のことです。今も教育時論といふ教育雜誌があります。その發行當時の社主故西村正三郎氏が、その社に開發社と命名されたのでも、その時代の傾向が察せら

常識を逸した一問一答

齊答は第二義的

問答の研究

れます。注入はその名のごとく詰込みで、外よりするもの、開發は引出す事で、内よりするものです。そこで従來の漢文教授は、時に輪講などいふことがあつても、多くは教師の獨演を、生徒が傾聽するのでしたから、注入と考へ、開發の新方法として、兒童と問答する事が工夫されました。そこで獨演は注入、問答は開發とはきちがへたものがありました。見てゐても、顔の赤くなるやうな愚問愚答が臆面もなく試みられるやうになりました。それが單に無用といふだけに終れば、忍ぶ事も出來ませんが、學習の態度を崩したり、研究のきつさを折つたりして、甚だしい害を残してゐますから、この際眞剣に考察してみなければならぬと思ひます。

獨演の中に立派な開發が行はれてゐます。問答の中に残酷な注入が行はれてゐます。即ち兒童と共にあることを究明しようとしての苦心・經過・結果等を語るのは、よしそれが獨演であつても、聽者はこれに共鳴したり、疑つたり、解決したり、是正したりして、内的活動は頗る鋭敏なものがあります。所が教師がある事を兒童に教へ込まうとして、それを問答の形によつて進めたとしたら、いかにそれが巧妙に運ばれても、注入であることはいふまでもありません。開發と注入とは、獨演と問答によつて定まることではなくて、兒童を見る態度の上に、相容れない差別のあるものです。開發教授が行はれて、愚問愚答の邪道に落ち、自由教育が行はれて、放縱氣儘の極端に落ちてゐます。皆その末を見て、本を見ないからせう。教育はその開始せられた未開・半開の時代から、今後幾年研究を重ねた時に於ても、根本義は一貫して動かないものであらうと思ひます。

禪家では默の教育を尊重します。語ることにない時に默するのは、その場合に於ける至上の雄辯です。安

默の教育

んじて黙する人は、開發の眞義に直面してゐるのかと思ひます。私は今の小學校の教室に、この黙の義が加味されて、かの噪狂にちかい舉動が少くなりましたら、教育の上に利することが甚だ多からうと思ひます。私は多年の經驗上、教室で目につく子供よりも、目につかない子供の中に、底力——よく考へてゐる——のあるものを多く見ますが、私は教師の深く猛省すべき事だと思ひます。今大流行の自由教育の教室に於て、常に發言の衝に當る者と、一時間殆んど沈黙、別の道を歩いてゐるかと思ふやうなものがありません。はしやぐのが兒童本性の一面ならば、だまつてゐるのもまた本性の一面と考へなければなりません。要するに教授は囚はれない目で、よく研究しなければなりません。

初學年の讀み方教授には、重要な問題が少しも研究せられなくて潜んでゐます。國語教授上の一大暗礁です。之にふれて大なる損害を被むるもの、その損害の大なるがために、一生浮ぶ事の出来ないものなどがあります。昔は村に不學の徒がありました。それは寺小屋に通ふ事の出来なかつたものです。今は學校に通つて、而も不學の徒があります。學校を卒業して僅かに七年、徴兵検査の時には、殆んど文字の全部を失つてゐるものがあります。これを見た検査官などは學校教育の効果を疑ひますが、最初から失つてゐたのかも知れません。私はそれがこの暗礁の所爲ではあるまいかと、近來頗る疑つてゐます。とにかく教育上研究を要する問題です。

暗礁とは何ぞ。入學當初に於ける假名の教授です。はじめて入學する兒童が、文字を持つてゐないといふことは、何人にも想像の出来ることです。故に假名の教授を第一の要件として、讀本が編纂せられてゐます。明治十九年の文部省の讀本は、

國語教授上の暗礁

ハト、ハナ、トリ、キリ、カンナ、ナシ、クリ、ミカン、

と八頁までに單語を出し、九頁から十頁にかけて、

マツニユキ、ツキニクモ、ヨキネコ、ワロキイス。

と句を出し、それから

ユキシロク、カラスクロシ。ソラアラク、ヒアカシ。

と文に進んでゐます。さうして二十八頁までに、清音はいふまでもなく、濁音・次清音も片付けてしまつて、二十九頁から平假名にはいつて、

つる、かめ。

と語は二語、すぐに

うつくしいはな。

と句は一句。たゞちに

あめはれてにじたつ。そのひくいへいのうちに、あたたかいへあり。

と文にはいつてゐます。昔は漢字を本字といつて尊重し、假名は補助文字と考へてゐたのです。その頃の讀本編纂者の假名に對する態度は、頗る軽く見た形跡があります。とにかく二十八頁迄に片假名、二十九頁から平假名といふ思ひきつたやり方は、その事は非よりも、その意まことに壯とすべしです。

その後この文部の讀本と並行して、民間幾種の讀本が刊行せられました。その間に入學當初の假名教授、國語教授の暗礁地點を研究した結果、片假名は一學年に、平假名は二學年にと、難易といふよりも、混雜を

さける上からこれをわけました。國定になつた最初の讀本は、音標文字は音の標識であるといふ見地から、改良範語法といふ名に於て、

椅子の繪の側にイ、枝の繪の側にエ。

と記したやうな讀本が出ました。それがその次の改訂に、

ハタ、タコ、コマ、ハト、マメ、コトリ、タマゴ、ハオリ、ハカマ。

といふ十九年の形にかへり、十九課まで語と句でおしていつて、それから單文にはいつてゐます。その後編纂せられた國語讀本は、

ハナ、ハト、マメ、マス、アメ、カサ、カラカサ。

と三頁まで語でおして、四頁から

スズメガキマス。カラスガキマス。

と文にはいつてゐます。之を通覧すると、假名教授は簡より繁にといふ理法に、兒童の生活にちかい語をとつてといふ工夫が加味されてゐます。その用意すこぶる周到ですが、兒童の發達に關する考慮は甚だ輕視されてゐるかと思ひます。故に入學後の二三ヶ月を、誰いふとなく假名教授の時期といつて、國語教授とは殆んど絶縁した様な態度です。この二三ヶ月間に兒童の學習態度は全く一變して、文字の運用がやゝ自由になつて、記した國語教授にはいらうとする時には、潑刺たる入學當初の氣分は全くなく、多く受動的に變つてゐます。假名教授の暗礁にふれて、多少の損害を被つてゐる譯です。

私は、大正十一年の八月にこの問題に關する活きた研究資料を得ました。それは孫のよし子です。當年數

私の孫

へ年四つ、健全無類にそだちまして、今は國語の使用も、日常の生活には事を缺かぬまでになりました。何の學士何の博士といふ方でも、外國に留學して、これ程自由に、これ程碎けた言語の使用をなさるまでには、三年ではむづかしからうと思ふほどです。日に／＼言語の發達していく工合が、幾度白頭の私をして、反省させたか知れませんが。その中でも最も私を驚かせたものは、その學習態度です。

彼の前には、困難といふ物は無ささうです。何物に對しても全力をあげてかかつて行きます。學ぶ事に困難を認めず、全力を盡して、生活の必要を満たすために學習する彼の態度はすばらしいものです。自分の上にかへりみてもかうした態度を考へる時に、いかに學習が容易であるかが考へられます。私等は暗示にしをれてゐるのかと思ひます。私はこれを心理學的に考察することは出来ませんが、彼は學ぶといふよりも、承認するといつた態度です。その態度の堂々たること、成績の著しいことは、驚くべき事實です。

私が髯でもそつて湯にはいつて歸ると、彼は出逢ひ頭に、「おちいちゃん、シヤンだなあ。」などといひます。その語義は私には全く分りませんが、自分の母などに時々試みてゐるのから推して、「めかす」とか「しやれる」とかの意かと思ひます。自分が湯にいつて、お白粉でもつけて來ると、「別嬪さんでしょ。」などいつてゐます。お化粧をしてゐた人を見て、誰かがこの語をつかつたのでせう。私が大きなあくびをすると、彼は「あくだつて。」といひます。また「ライオンみたいだ。」といひます。また「千代ちゃんち(うち)のとり(雞)みたいだ。」ともいひます。少ない言葉で感じをあらはさうとするのですから、様々にやりくりをしますが、そこに彼の工夫が見えます。

私は彼の過去三年間に、全く言葉を持たなかつた境涯から、日常生活に事をかゝないまでに伸びて來たこ

入學の日

とを、奇蹟のやうに思ひます。——小學校の國語教授に比較して——さらに今後の三年かれの生活が廓大せらるゝと共に、伸びて行く言葉を思ふと、入學當初、すでに可なりな物識りだと思ひます。ことに言葉の發達からいふと、よほど程度の高いものです。若し彼が語る所を書いてみたら、驚くべきものがありませう。私はさらに滿三年と幾月かの後に、彼を學校に送つた日を想像しないではゐられません。母に送られて校門をくゞつた日は、はにかんで、母の側を離れないでせう。先生に名を呼ばれて、二列縦隊にならべられるでせう。その間も彼は母を氣にして、時々そちらに視線を送るでせう。講堂にはいつて入學の式がすんでから、受持の先生に教室に導かれて、教室に於ける自分の席を定めて貰ふでせう。かうして日々學校に通つて、神經衰弱になるほどの緊張振で、先生のおつしやることをきくでせう。さうして學校生活になれようつとめるでせう。

はじめて國語教授をうける日

私はさらに教室に讀み方を學ぶ彼を想像しない譯にはいきません。讀本や雜記帳の出し入れ、舉手や答をする時の作法——家庭と全く異なるもの——等を學んで、いよ／＼假名の教授をうけるのです。まづ先生が幾枝かの開花した櫻を示して、「これは何ですか。」とお尋ねになるでせう。幼稚園で育つた兒童は、かうした問になれてゐるから、少しも驚かないでせうが、言葉を眞剣に用ひて、方便的に用ひた事のない兒童は、實に驚くこととせう。これほどわかりきつた事を、これほどまじめに聞かれたことがないからです。そこで「はいやいだ兒童の二三が舉手して、「さくら」と答へると、先生は「よくお答が出来ました。」とにこやかに褒めて、「これから誰々さんのやうにお答をするのですよ。」と教へられます。今までは家庭の王として光つてゐたものが、平等の小社會生活の中になげこまれて、而もその中に殊勳者を出したのですから、ほめられ

學習態度の一變

たさが一ぱいのよし子は、その殊勳者にまねて、一切を行動しようとするでせう。手をあげて、ときばきこたへる者は、先生のお目鏡にかなひ、反應ののろいものは低能者として見られるやうになります。こゝに生活が家庭と全くかはり、家庭語の調子がぬけて、うるほひの乏しい學校語をつかふやうになります。この間約三ヶ月、五十音を學び終る頃には、先生に對しての無作法な言葉などは全く無くなります。

この三ヶ月、彼には驚の生活です。あきらめの生活です。而もこの生活の變異に順應しようといふ力の極めて強い生活です。而して得た物は、家庭に於て持つてゐたやうな眞剣味の十分な物ではありません。極めて妥協的な、雷同的なものです。こゝに學習態度が一變して、兒童としては、極々微温的のものとなります。優等兒といはれ、よい子と評せられる者ほど、この變化が強くて、運動場と教室、教室と家庭といふ風に、二重三重の生活をいとなむやうになります。これは教育上等閑視すべからざる重大な問題かと思ひます。

よし子がかうした境涯に送らるゝ日を考へます私は、我が孫のみがかはいくて申すものではありません。全國の新人一年生が、大なり小なりこの境涯を通過するのです。近年低學年の教育がしきりに研究せられる様ですが、家庭の生活、ことに旺盛な學習態度をきすつけないで、どうして學校生活に移らせることが出来るかは、重要問題とせう。従來の一年生の取扱は、美しい兒童の生活を、日に／＼墮落に導くやうにも考へられます。

家庭語の擁護

私は兒童が家庭に於て、自由に學んで來てゐるそのことばを擁護したいと思ひます。よしその言葉が上品であつても、下品であつても、彼が學び得た財寶として、尊重しなければなりません。その言葉によつて發表することは、たとひそれがどれほど簡単な事でも、これを尊重しなければなりません。さうして學校では

それを繼承して、お話による國語教授と、繪による發表とが、幾日か續かなければなりません。そのうちに兒童の持つてゐる假名文字の程度も分り、それをはたらかせての新しい假名教授も工夫されます。かくて假名教授の際に於ける國語教授の暗礁は、無難に通過し得るかと思ひます。かへすゝも入學第二週目位から行ふ劃然たる假名教授、即ち一内容整理、二語の練習・發音矯正、三文字教授、四読み方・書き方練習、五應用といつた取扱は、嚴禁しなければならぬかと思ひます。

更に一案を提出してみます。明治の十年代或は二十年代にあつては、一村中に文字を解する者は極めて少數でした。したがつて新聞雑誌の購讀者も極めて少なかつたのです。殊に近年勃興した幼年の繪雑誌、「コードモノクニ」「小供ノ友」「ミソラ」「日本エバナシ」「オトギエホン」「乗物畫報」「正チャンノ冒險」といつた類の物は、その頃一冊もなかつたのです。さうした社會状態の時と、今日の状態では、入學以前に知らず知らずうける教育に甚だしき差があらませう。ことに廣告の進歩や、レッテルの新案は、北海道北見の山中にも、ホシ美の水おしろいや、ライオン齒磨の廣告を見るのです。ましてビール・シトロン・サイダーなどのレッテルには兒童はつよく引付けられるのです。時には必要の上からも、その假名文字——時には漢字——を學習するのです。この知らず／＼の教育を今少し擴張して、五歳六歳の間に、假名文字だけを遊戲的に學ばせるやうに工夫したら、學校では入學當初から、文字、音聲によつて兒童の生活を自由に取扱ふ事が出来て、假名教授の爲に、學習態度に一頓挫を來すことはあるまいかと思ひます。都會などには極めて實行し易いことせう。

今一案

さらに一案は、入學當初から假名を嚴密に教授しようとししないで、假名書きの語を多く示し——讀本によ

入學前の教育による一案

らない場合は音調をつよくとり入れた假名文による——それによつて文字に親しませ、次第にこれを習得させるのです。この方法は七八年前、私が東京高師にゐました頃、二年経験して、なほ工夫の餘地のある事を思つてゐた事です。假名教授の第一日に於て、「ハタ、タコ、コマ、ハト、マメ。」と五語十字を示し、雜記帳に幾度も書きとらせました。——私は復式學級を受持つてゐましたから、一年の自動作業はすべてこの書取によつたものでした。——直接教授の際には、その内容について問答したり、發音を矯正したり、読み方の練習をしたりしました。第二日目もまたこの五語十字、第三日目もまた同様でした。靜かに兒童の様子を見ると、決して倦怠の色なく、その仕事にはまりこんでせつせと働いてゐました。

第四日目はコトリ、タマゴの二語二字を示して、前の五語十字とあはせて練習させました。第五日目はやはりコトリ、タマゴでした。第六日目はハオリ、ハカマの二語、六字を加へ、最初からの七語十六字を加へて練習させました。かういふ調子に、二十頁のサルトカニ、カキノタネ、ニギリメシといふに到達しました。その際も練習の範圍は、ハタ、タコからとりいれてあるのですが、常に當日の材料を基點として、そこからさかのぼらせるやうにしましたから、初の練習が濃厚で、後が稀薄になるといふ缺點は生じなかつたのです。かうして全般の練習が出来て行きました。

私はこれに命名して、「反復による假名教授」と申しましたが、假名教授としては、徹底したものだとも思つてゐます。たゞし今の見地からいへば、家庭で學んで來た言葉を擁護し、これを繼承することによつて、読み方教授をすゝめようといふには、甚だ缺けた所があるのです。丁度「サルトカニ、カキノタネ、ニギリメシ。」を教授しました時、常には練習の範圍を既習の部分においたのですが、この日は未習の部分に

練習の範囲を擴張してみたのです。児童は喜ぶこと限なく、「先生、おしまひまで書いてもよろしいか。」といふ。十九頁から出發して五十四頁に到達する事は、到底不可能のことですが、それでも書いてみようといふ元氣は尊いものです。一生懸命に書いてゐましたが、何分にも十三分の自動時間には、いくらも進むことが出来ませんでした。一番多く書いたものが七頁、少いものは三四頁位でした。私は子供の作業に熱心なことに驚きました。しかし誤解しては下さるな、それが競争に基く妄動であると。児童は作業のあとの確實にこの事には、努力ををしまないものです。

児童は私が未習の部分に練習の範囲を擴張した事を、少しも不審としないで活動してゐましたが、驚いたのは參觀の方々でした。教授が終ると同時に、十数名の參觀者は教卓のまはりにおあつまりになりました。

「此の頃御教授を拜見して、かはつた方法だと思つてゐました。既習の部分を練習の範囲に取入れる事は、まことに結構だと思ひますが、本日のやうに、未習の部分にまでそれを擴張させるのは、如何なものでせう。」との質問でした。私は「未習の部分にありましても、既習の假名に對しては復習であり、未習の假名に對しては、豫習です。復習と豫習をあやぶんでゐては、仕方がありませんまい。」と申しました。問者答者ともに哄笑、喜劇に似たやうなことでした。

とにかく私の假名が教授は、その名のごとく、假名が教授の主體でありまして、國語の教授といふことは、殆んど意を用ひなかつたのです。けれどもそれは本末顛倒の義で、假名は方便物で、語が本體否語も方便物で、その内容が本體です。いかに低學年の、いかに簡易な國語に關する教授でも、この義を逸してはなりません。

さきに音調にのせた假名の語・句・文を示して、文字に親しませるといふ一案を提示しました。その例として、朝鮮の國語讀本の數頁を次にあげてみませう。第一頁には音圖を掲げました。第二頁にはハナ。第三頁にはモモノハナ。四頁にはイヌ、イヌ、コイヌ。五頁にはウシ、オヤウシ、コウシ。六頁にはホン、ホン、ワタクシノホン。七頁にはコノボウシ、アノクツ、ダレノモノ。十四頁にはカン、カン、カネガナル。ケイコノカネカ、ヤスミノカネカ。二十四頁の練習には、コドモトコイヌ、コドモトコネコ、コドモトコネズミ、コドモトコウマ、コドモトコウシをあげておきました。この一の巻を人評して、童謡讀本だといひましたが、私は唯音調を加味したといふだけで、別に童謡などいふことは考へなかつたのです。とにかく異民族に國語の初歩教授をするには音調にのせて運ぶ事が、きはめて有効のやうです。この點は内地人に國語を教授する場合も、同様だと思ひます。現行の國語讀本にはこの注意が全く缺けてゐるかと思ひます。

昨年から今年にかけて研究の勃興して來たのはこの一學年入學當初の國語教授です。私の知つてゐる方で、鶴岡の鈴木さんや、鶴沼の原田さんなどは、既に着手してゐられるやうです。材料を選択せられるについて或は御参考になるかと思ひますから、一言申し添へておきます。朝鮮の讀本の卷の一に音圖を卷頭にかゝげたのについては、中々に議論がありました。「言語教授と文字教授とを混同するか。」など、手ひどいにもあひました。私もその區別位は知つてゐますが、假名の自習に便ならしめんがために、私は之を卷頭に加へたのです。内地の一年生の教室にも、熱心なる教師は、假名教授のすゝむにつれて、音圖を構成していく準備をしてゐる方がありますが、私はむしろはじめから音圖をかゝけておいて、それに親しませるのが假名に對する自學の念をそゝるかと思ひます。朝鮮でもしばしばこの音圖の取扱方を問はれました。「先生こ

れは何ですか。」と児童がきいたら、「何だらう。」といつてもよいし、「皆さんのならふ假名はこれで全部だ。」と答へてもよろしいと申しておきました。又同じ言葉をとむと、そこに親しいやうな一種の聲調を生じます。「イヌ、コイヌ。」といふよりも「イヌ、イヌ、コイヌ。」といへばなだらかです。「ウシ、オヤウシ、コウシ。」もどこかに聲調がきこえます。とにかくかすかな聲調でも、あるのとないのでは、感じが非常にちがひます。児童の前においてみると、それが鮮明にわかります。

文章の教授

文章の教授について話を進めませう。朝鮮の讀本を一から六まで發行して、まだ間のない頃の事でした。新讀本の取扱は甚だ容易でないとの批難が起りました。私はそれを傳へきいて、ある人との茶話に、「新讀本の文章がまづいといふのならば、僕は文章専攻の者でないから、謹んで甘受するけれども、取扱ひにくいとあつては恐れている譯にはいかない。僕は教壇上に三十年も働いて来たものだから。批難の仕様がわるい。」と申しました。それが傳はつてではあるまいが、天安の松崎さんから「一度實地授業をしてくれないか。」との依頼がありました。今更厭とも申し難く、早速おうけして出かけました。私は朝鮮各地の教授を視察して、大體の見當はついてゐましたが、さて朝鮮兒童を取扱つた事が一度もないので、教授がどんなに流れるものか、淡い危険を感じました。しかし人は成功しようといふ執着のある場合には、びく／＼しますが、流のままに進まうと決心すれば、誰に見られても、どんな目で見られても、苦しいものではありません。いはば養度胸をきめて、この仕事にあたりました。

私の教授する組は、二年生と三年生でした。その學力の程度が知りたさに受持の先生に私の教授する教材を、一時間取扱つてみてもらひました。私は申しました。「後から私が取扱ふといふことを念頭におかない

おち葉

で、あなたは思ふまゝに取扱つて下さい。もし補遺すべき所があつたら、まとめて一時間の教授にしませう。」と。これは大膽でも、不遜でもありません。取扱ひにくいといふ所が、何處であるかもそれでわかるし、どういふ部分を補へば、それで圓滿な取扱になるかもわかるから願つたのでした。すると受持先生は、通讀、語義、文字の教授及びそれらの應用について、十分に取扱はれました。教授は至極巧妙でしたが、文の深みにはつひに手がかゝらずに終りました。

十 おち葉 (普通國語讀本卷四)

ねいさんが 小川で 大根を あらつて います。 手を きよくに 動かして、 大根の しろを あらいおとして います。

きれいに あらつて まつ白になつた 大根が、 川ばたに だんだん 高く つまれて いきます。

私は 川上から そうつと ぼぶらのおち葉を ながしました。 黄色な葉が なみに ゆられて、 ねいさんの 手もと 近くまで 行きました。が、 きうに わきへ それて しまいました。 私は もう 一枚 ながしました。 こんどは あらつて いる 大根に つきました。 ねいさんは それを つまみあげて、 川下へ ながしました。 私は 二三枚 おち葉を ひろつて、 それを 一どに ながしました。 其の中 一枚は、 とうとう ねいさんの 手に つきました。 ねいさんは それを はらいのけ ながら、 こちらを ぶりむきました。 私の 居るのを見て、 につこり わらつて、

「いたずらをしてはいけません。」

としかる ように いいました。

そうして 又 せつせと 大根を あらいはじめました。

この文はおち葉を流した弟の作品です。弟がこれを書くに至つた経路を考へてみませう。ある日弟は小川のほとりに出ました。空は限りなくすみわたつて、美しい濃い青色を呈してゐます。日はきら／＼と照つて、空気の濃厚を感じる程です。秋色山野を覆ひ、ポプラの葉も半ば落ちて、寂しさうに立つてゐます。勿論無意識ですが、弟はこの秋の自然に抱かれて、淡いけれども、さびしさにおそはれてゐるのです。何となく人なつかしくてたまらないのです。遙かの川下に、せつせと姉さんが大根を洗つてゐるのを見つけました。「ねえさあん。」と一聲高くよべば、聲のとどかぬ所ではないが、それでは秋のすみきつたこの寂しさを破壊するやうで、さうする氣にもなれません。ふと思ひついたのは落葉のたより、それがこの場に最もふさはしい方法でした。まづそれを試みました。落葉は波にゆられて流れて行きましたが、失敗でした。弟は更に一枚流しました。今度は半ば成功しましたが、姉の注意をひくに至らないで、つまみあげて、川下へ流されてしまひました。

秋の寂しさは決して弟ばかりではありません。たゞ一人小川に大根を洗つてゐる姉には、殆んど意識的に、今のこの寂しさを、何とも仕様がなく思つてゐるのです。大根についた一枚の落葉、もとより弟の流したものだとは知らうやうはありませんが、今の姉の身に之を見落したとは思はれません。つまみ上げて川下へ流すとき、ゆかしいものとは思はなかつたでせうか。

弟は再度の失敗に、もういら／＼して来たのです。けれども「ねえさあん。」とは呼ぶに忍びません。二枚をあつめてなげこみました。とう／＼一枚は姉さんの手につきました。風なきに、ポプラの葉が一度ならず二度までも流れて来たのには、胸のとどろきを禁じ得なかつたでせう。靜かに而も期待する所あるが如く、川上を見ますと、そこにはなつかしい弟がゐるではありませんか。この時の姉の思、胸一ぱいに嬉しかつたのでせう。それがあふれて、「いたずらをしてはいけません。」と弟をたしなめたのですが、その實、かうしたいたづらを常にして頂戴といつてゐるのです。

弟は姉の一顧と、たしなめられた言葉によつて、秋の寂しさはぬぐはれました。姉も弟のいたづらと、微笑に、無限の慰藉を得て、またせつせと大根をあらひはじめました。姉と弟の今のすが／＼しい心は、骨肉の愛情がうみ出したものです。かはいの弟とは、姉の今の心。なつかしの姉さんとは、弟の今の心です。

弟がこの文を書かうとしましたのは、「姉さんをなつかしむ」とか、「なつかしき姉さん」とかいふ心の叫ぶがもとです。落葉はそこに到達する手段に用ひられたものです。

さて昨日受持の先生から、通讀はいふまでもなく、語義・習字・表面にあらはれた内容等について、十分に教へられた兒童は、「弟がポプラの落葉を三度小川に流して、三度目にそれが姉の手につきました。すると姉がこちらをむいて、『いたづらをしてはいけません。』といひました」といふ眼光の紙背に徹せざる讀み方、人間に響を持たない讀み方は出来てゐました。そこへ私は向つたのですから、別天地を一人である感じがしました。ことに語義や文字の暗い部面が、すっかり耕されてゐますので、私にはどれほど有利であつたか知れません。

まづある一人の生徒に通読させました。「どうです、わかりましたか。」といふと、「すっかりわかりました。」と全生徒が答へました。「それで私が黒板に書く事を、皆さんも雑記帳に書きなさい。」といつて、

一 一つ頃でせうか。

二 弟はなぜポプラの葉を流したのでせうか。

三 姉さんはポプラの葉が多く流れてくるのを見て、どう思ひましたか。

四 弟と姉さんは顔見合はせて、何と思つたでせうか。

と板書しました。之を読みあげて、「これにたしかに答へられるやうに、これから私が讀本を讀みますから、聞いてゐなさい。」といつて、例の私のきはめて緩讀するのを、本を見ながらきかせました。次に一回自由讀をさせました。

この時の私の感想を一言致します。研究の目標を示されて、教師の緩讀を聞いた兒童は、薄い皮がはげた皮膚のやうに、頗る敏感になつたやうでした。それは自由讀の讀み振りによくあらはれてゐました。少しもさわがしい所なく、而も考へながら讀んでゐます。それ／＼に考をまとめて、頭をあげた時には、目の色がちがつてゐました。兒童の目は口以上にものをいつてゐました。こゝが教師として面白くてたまらない所です。これに對する満足は有形に評價の出来ない所です。

時は秋だといふことに一致しました。弟が落葉を流したのは、寂しさへにたへかねてといふに、全生徒同感でした。こゝに私は「ねえさあん。」と呼ばなかつた心持をつけ加へました。姉が落葉を見て弟と同じさびしさに、人なつかしく思つたこと、弟と姉が互に顔を見合せて喜んだこと、姉が叱るやうにいつたのは、

うれしさのあまりであつたことなど、よく／＼發見してゐました。

一生に通讀させました。その讀み振はしつとりとしたものでした。「弟はいつ頃から小川のほとりに來てゐたのでせう。」といふを話題にして、思ふ所を語らせると、思ひうかべてゐる場所の相違が、多少はありました。大體に於て一致しました。さらに一生に通讀させて、教授を終りました。この時私は「朝鮮の兒童は感情に淡い。」といふ者を、心からのろひました。淡く導いて、淡しといふ。その罪は何處にあるかと思ひました。

この材料は今一時間かけなければなりません。それは近頃の流行である讀み方より綴り方への取扱です。鑑賞といつてもよいかも知れません。作者の誰であるかといふことから、弟の魂にひしと響いた心の奥の叫をきかせなければなりません。私の讀み方教授は、大體に於て、最初に叫に肉薄するのですが、第一時の受持先生の設計に従つたので、終りにそこへ到達したのです。共に流るゝ讀み方の教授では、最初叫に突入るのが自然で、最後に叫びにまとめようとするのは、どうも無理が多いやうに考へられます。

次には三年生の教授でした。教材は

第九 みかんや(普通學校國語讀本卷六)

或辻にみかんやが荷をおろしました。

そこへ五つばかりの男の子が來て、にぎつていた一錢銅貨を渡しました。みかんやが一番小さいのを

一つ渡しますと、子どもは

「小さいのはいやだ。そちらの大きいのがほしい。」

三 讀み方の教授

といました。みかんやは

「大きいのはねが高い。それを持つてお歸りなさい。」

といつて、相手にしませんでした。子どもは泣き出しました。そこへ子どもの兄が来て

「泣くものではありません。今度お金をたくさん持つて来て、大きいのを買ひましょう。」

といつてなだめました。

みかんやは「みかんや、みかん。」と聲をはりあげて、又歩き出しました。

編纂趣意書には、「道の辻に蜜柑の荷を下して、聲高に「みかんや、みかん。」と賣つてゐるのは、朝鮮の何處でも見る事の出来る風景である。そこへ一錢銅貨を握つて走つて来た幼児があつた。その幼児の不平は如何にも幼児らしい。蜜柑屋は商賣柄、この要求を却けた。それに對して幼児は最後の手段に訴へて泣いた。這般の消息を吞込んでゐる兄が来て、それをなだめて連歸る。蜜柑屋は無頓着に、「みかんや、みかん。」と聲をはりあげて歩き出す。作者は短い時間に、而も複雑な事件を眼前に見た。社會の生活はかうしたものかと、新しいものを見出したやうな感じで書いた。それがこの文である。かういふ事實はあまりに平凡なことで、注意する必要のない事のやうに思ふ人もあるが、人間の生活は、この種の事實以外には存在しない。この路上の蜜柑屋を觀察する眼は、やがて總ての世相を觀察する眼となるのである。

この文の原作は、朝鮮の兒童である。兒童が社會の實相に觸れて、綴り方の材料を得ることは少くない。それを綴つてながめる所に、人生を解し、生きる道を悟るのである。この課は綴り方に影響して、この種の人間生活に觸れる手引となる意味に於て尊い。故にこの課を取扱つては、幼児の心と、蜜柑屋の心と、兄の心とを十分に理解せしめ、その間に生じた活劇の意義を味はう様にさせなければならぬ。三學年の兒童の共鳴し易いのは、兄の立場である。「今度お金をたくさん持つて来て、大きいのを買ひませう。」といふ兄の言は、蜜柑屋にも逃路を與へ、愛弟の願意も通ることになる。それらをよく理解させなければならぬ。」

これもまた受持の先生に一時間取扱つてもらつて、そのあとを私が行くことにしました。教材のやうな風景は、十月、十一月の頃、朝鮮のどこにでも見られる事で、あまりに平凡であるが、この平凡な事實に、自己を投込んで意義を發見する處に、教材としての價值がある。受持の先生はこの骨がよくわかつてゐました。通讀から、語義から、内容の推究から、この課の眞體につきいらうとすることまで、私の意のとほりに進みました。私は見てゐて、編纂者の心持を趣意書に如實に書いておくのは、取扱者にこれほど影響するものかと思つて愉快でした。この課の取扱では、編纂趣意書に書いてある「幼児の心と、蜜柑屋の心と、兄の心とを十分に理解せしめ」とあるのが眼目です。こゝに小社會の大葛藤が描かれてゐるのです。受持の先生は、多分二時間目で之を取扱ふつもりであつたのかも知らぬが、それを私がうけついたので、私の取扱つた念所をざつと申してみませう。

通讀・語義・場面・内容等は、受持の先生に遺憾なく耕されて、些の不安もありません。生徒もよく理解してゐます。私は流の急な川に、輕舟をうけて舵だけあやつつてゐる様な氣分でした。教師がかかる氣分に充ちてゐる時、教授がまづく行く道理がありません。教授は要するに流です。私は通讀一回、今日は「子供の心」「蜜柑屋の心」「兄の心」を深く尋ねませうといふことからはいつて、子供が蜜柑屋の聲をききつけたことから、おあしをもらつて飛び出したこと、蜜柑屋との交渉に大不平を起した事、策つきて泣きだしたこと等、金の價值を知らぬ子供としては、少しも無理のないことまで、兒童の心の赴くがまゝに流して、眼

を轉じました。

蜜柑屋はどんな家に住んでゐるだらうといふことから、朝問屋にいつて買出して来て、それを賣りあるいて、その利益によつて、一家をさへてゐることまで、蜜柑屋の生活を理解させて、小さい蜜柑を與へたことが少しも冷たい心でないこと等、そのいふ所に些の無理もないことまで流していききました。生徒の心はこの無理のない二人の衝突を直視しなければならなくなりました。子供は泣きやむ時がなく、蜜柑屋もこの子をすてて立去りかねてゐました。そこへ兄が飛出して來ました、弟の泣く聲をききつけて。見るとこの衝突です。問題はすぐにのみこめました。そこで弟の意も通る様に、蜜柑屋の顔も立つやうに、この場に解決を與へました。さて私が今その當時を追懷して、きはめて愉快に思ふのは、生徒の大部分が兄と共に解決者となつたことでした。

要するに子供に些の無理もなく、蜜柑屋にもまた一點の無理もない。この間にたつて、兄が蜜柑屋には「今度お金をたくさん持つて來て。」と、弟の主張が不合理なことによつて、蜜柑屋の顔をたて、「大きいのを買ひましょう。」と希望をかけて、弟をなぐさめました。この間に處して、これ以上の解決はないのです。またこれ以上の言葉はないのです。生徒と共にその最上の解決に流れていつて、その最上の言葉を味はうたことを、私は大なる成功であつたやうに感じました。なほかうした平凡な事件の中にも、大なる意義のこともつてゐる事を知らせ、綴り方への道をかすかに開いておきました。

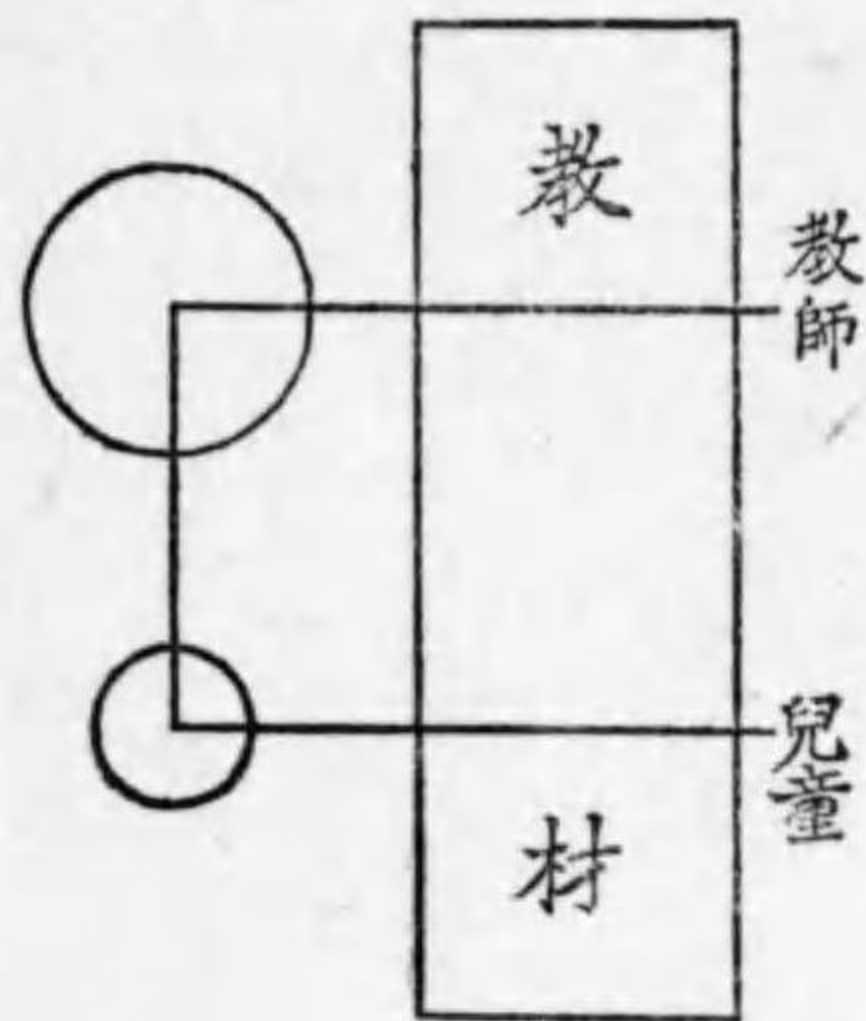
この教材を二學年のおち葉に較べると、却つてこれが低級のやうに感ぜられませう。どうぞよく／＼考へてみて下さい。おち葉は弟が姉をなつかしむ心の表現です。これは小社會の大問題です。もしこれを展開し

ていつたら、現代世相の大部分は、この中に解決せられませう。小作人のいひ分に無理もなく、地主のいひ分にも無理がありません。たゞその間に處して、双方の顔がたつ兄のやうな解決者がないだけです。解決は理でもいかず、情でもいかず、理と情が至誠によつて融合されて、始めてその用をなすのです。讀本編纂者も、大抵の苦勞ではありませぬ。

天安の校長松崎さんの請によつてこのあぶない綱渡を演じましたが、口は禍の門、雉子もなかずばうたれまいと感じました。同時に首の座は存外に坦々たるもの、執着するもののみ、おそろしい所だと思ひました。天安から京城へ歸る車中で、色々な事を思ひました。松崎さんもひどい。「二箇所まで世話物を私になげつけるとは。」と。「おち葉」にしても、「みかんや」にしても、三勝半七酒屋の段といふ格です。時代物で、金ピカの鎧をきたり、冑をかぶつたりする、型のきまつたものならば、面白くはなくても、箸にも棒にもかゝらぬといふ失敗はないのですが、世話物と來ては、狂つた場合には、二進も三進もいかぬものです。松崎さんは福岡の人、博多二輪加の粹も知り、歌舞伎の苦勞も吞込んでゐて、それでこの難題を二つまでといふのだから、ひどいといつた私の言が無理でせうか。柔かい手で、強く攻めるといふのはこの類です。とにかく無事に京城に歸ることの出來たのは幸福でした。序に教授を芝居に、教師を役者にたとへたことを如何と、難ずる方がありませう。演劇と社會の活動とを、一つにして見られないやうな人を、世に道學先生といふのです。

共に流るゝ讀み方教授の意義を説明する時が來ました。私は簡明に一つの略畫を出します。

こゝにある教材があるとして、それに對して、教師と兒童がむかふと致しませう。教師は自分の力一ぱい



これを読み、児童もまた力一ばいこれを讀んで、作者の魂の叫にふれます。——その叫は實は作者の物ではなくて、自分のものです。——その叫が各人各様ですから、互に語りあつて、反省の資料を得るのです。そこに師もなく、弟子もありません。互に育ち育てられて、向上の一路をたどるものです。

觸れ得た魂の叫には比較してこそ大小淺深の差別はあつても、その持主からいへば、それ以上の物はないのです。児童を育てるといふ立場からは、児童の讀み得たものが最も尊いので、それを導き、反省せしむるために、教師の讀み得るものは、参考に提供するといふに過ぎません。決して強ふべきものでもなく、のつとらしむべきものでもありません。さて力一ばい讀むといふことには、必ず疑を持つ人がありませう。それは觀音經の「一心稱名」の「一心」がわかりにくいのと一般で、「力一ばい」と「一心」は或は同一物かも知れ近せん。「一年の讀本や、二年の讀本、よしそれが五年・六年の讀本でも、夫を力一ばいに讀むなどいふ喜劇のやうなことが出来るか。」といふ人がありませう。もしそれが出来ないなら、さらに修養を積んで出来るやうになつて頂きたいといふまでです。觀音の御名を稱へるにすら、「一心」といふ要求があるではありませんか。

人がこの世に生をうけて、幼少青壯老死と轉化していく間に、一日でも、一刻でも、全く同じ時といふものがありませうか。人はその刻々を流轉して育つていくのです。朝に觀音の御名を稱へ、夕にまたこれを稱へる時、御名は同じ御名ながら、それは同じものではありません。一心といふ感じがいよ／＼純に、また眞に

進むのでせう。一年の讀本でも、六年の讀本でも、これを讀む事十回ならば、十回の新しい感が得られませう。名人は千何百回語つた淨瑠璃でも、誦つた謡曲でも、一回として同じ物はないといふではありませんか。教師ばかり「何回讀んでも同じだ、讀まなくても分つてゐる。」などいつてすましてゐられませうか。居られるといふ方は、自己の進展を無視してゐるのです。自己を侮蔑して安んずることの出来る人は幸福です。力一ばいに讀むといふことを、一夕試みてごらん下さい。一回よりか二回、二回よりか三回、その意義が鮮明になります。のみならず教師のこの一心が、いつのまにか児童の上に反映して、力一ばいに讀む心を養ひます。これを悟つた人は一生の幸福です。私が「読み方教授」に於て讀む心を養ふと唱へたのは、こゝをいつたのです。

「讀むといふことを汝は事もなげにいふ。けれども、地方の小學校などでは、よほど努力しても、六年生で十一の巻がかつ／＼讀める位。」といふ方がありませう。これは事實です。日本全國何處へいつても、たしかに見られることです。或は十の巻がかつ／＼の仲間もありませう。しかしそこはお考をねがひます。運動會の單脚や、二人三脚の形に足を結はへておいて、児童の走る力はかつ／＼これだけだといふ人があつたら、これに對しては「その足を解け。」といへば十分です。

義務教育六年、のべ日數で二千百九十一日か二日、その長い間に、十二冊の讀本が讀めるの讀めないのとて、そんなに児童は無能なものでせうか。勿論入學當初の假名教授といふ暗礁にのりあけて、碎けてしまつたものもありませうし、そのいたでが六年まで癒えない者もありませう。また讀本が児童にしつくりあはな

授をうけて、讀む心の痿縮したものもありませう。もしそれらの事情を除去したら、十二卷の讀破が、二百九十一日に、それほど困難なことではせうか。暗示ほど世におそろしいものはありません。幼弱なものと兒童を見るのは、ある場合には兒童を幼弱にし、殺してしまふやうなこともあります。

教科書は自學に便なるやうに、難易の程度を考へて作つたものです。故に一の巻が十二分に學習が出来たら、二の巻は七分の自學が出来るやうに工夫してあるのです。かうして順序してあるものを、十の巻や十一の巻で、落伍者を出すやうでは、まことにいひがひのない話です。私はこれには大なる理由がなくてはならないと思ひます。故佐々醒雪博士が、「いかなる名文でも、それが教科書の中に採入れられると、之を學ぶ者は名文としての憧憬を減じ、學習に苦勞を感じる。これは諸外國に於ても同一だといふ。」と話されたことを記憶してゐます。私は味のある言だと思ひます。教師を中心とする教授に、いかなる名文が教材としておかれても、これを讀み、これを味はふ被教育者といふ立場からは、無駄な干渉を感じる場合が多いのでせう。況んやそれが學期・學年末の許験の種になると思ふ時、いやな感じを伴ふのは當然です。憧憬の去ること、事實は、讀み方教授には大なる教訓です。魂の叫を求める時、教師の干渉は邪魔でせう。發動的に學ばんとする時、教師によつて引廻されるのは、とかく氣が抜けることではせう。私が兒童と共に學ぶといふことを主義として、讀み方教授を考へてみたのも、これらを深く深く考へての事です。讀み方の力をすゝめるには、その憧憬、その氣分等をきずつけてはなりません。

兒童の自習にまかせても、讀本を通讀して、作者の叫に軽く觸れる位のことにはよく出來ます。私がそれを親しく悟つたのは、尋四を受持つてゐた時でした。八の巻——舊尋常小學讀本——の第一課皇太神宮を教授

教授者の猛省すべき事實

兒童は獨でよく讀む

し終つた時に、「第二課參宮日記の一節を下讀してゐる者があるか。」ときいてみました。するとその下讀をしたといふものは、級全體でした。一生舉手して、「五課まで下讀してゐます。」といひました。「よくしました。」とほめると、一生舉手して、「十課までしました。」といひます。すると一生がまた「十五課の下讀を終へました。」といひました。私は少々癪にさはつてゐるのです。「汝等のおもちやにしては、刺があるのを知らないか。」といつた氣分になりました。そこへ一生がまた舉手して、「二十八課まで讀みました。」といふではありませんか。私はむつとして、「遠藤立てつ。」と命じました。「二十八課を開いて。」と「讀め。」と命じました。今から思つても、大變な見幕だつたらうと思ひます。すると遠藤は立つて、靜かに讀み始めました。二十八課といへば、八の巻最終の課で名古屋といふ所です。中には随分むづかしい漢字があります。「四通八達の要路に當り。」などいふ所がありますから、きつと一二箇所はつまづく事と思つてゐました。ところがすらくと讀み終へて、けろりとした顔で腰をかけました。この時の私の手持無沙汰を想像して下さい。こどもの手前、參觀人の手前、私は何ともいひ様のない思に悶えました。そこで、「遠藤、いつ讀んだのか。」ときくより外に道がありませんでした。すると、「頂いた晩。」と申しました。——學用品はすべて學級費で買つて與へてをりましたから。——私はこの時負うた子に教へられて、淺瀬を渡るのだと思ひました。「讀み位は一人で讀めなければだめだ。」と私は常にいつてはゐましたが、その實讀まないものと高をくくつてゐたらしいのです。さうでなければ、二十八課を讀んだ子に、さまで驚くわけがありませんから。この事實は私に色々な事を考へさせました。「讀むむづかしい事のやうに思つてゐるのは、漢文教授の遺物だ。鸚鵡がへしに模唱させてゐる様な心がけでは、獨立して物を讀ます事は出來ない。案するよりは産む

が易い。物はあたつて碎ける心得で進ませるがよい。」と。その後私は讀ませることに努力した事はなく、讀の讀めない兒を一人も持ちませんでした。「それは高師附屬小學校の家庭教師附の生徒で。」とおつしやるかも知れませんが、兒童をこゝに導くには、彼が持つてゐる、家庭教師以上のあるものに、眼をつけさせる一法があるばかりです。

教師も教材を通讀して、作者の叫びにふれ、兒童も教材を通讀して、作者のそれに觸れるのですが、觸れてゐるものが、殆んど本質的に違つてゐることを知らなければなりません。何となれば、兒童と教師は、その生きてゐる世界がちがひます。しばらく私の三生説をきいて下さい。人はどう考へても、一生に三度生れるやうです。第一生は母體から生れるので、これに漏れては、この世に存在することが出来ません。第二生は性にめざめる時で、これも早晚厚薄はあつても、殆んどめざめないものはありません。第一生と第二生の間、十四五年か十六七年間と、第二生後の世界とは、全く世界がちがひます。第一生の世界は甚だ執着味の乏しい、純眞を生命として淡い感じで生きてゐます。ところが第二生は人生の深みに進むと共に、強烈なる愛着を生命として生きてゐます。故に第一生に於ては無頓着で、人の感情等は少しも意としなかつた者でも、第二生に入つては、極めて細心に、人の一顰一笑を意とするやうになります。もし第一生を桃色をもつてあらはしたら、第二生は眞紅の色です。一は輕快、一は強烈です。第三生は悟の境涯で、誰でもそこにはいれるといふ譯ではありませんが、その境涯に生きてゐる人を想像すると、物そのまゝに見て、柳は綠花は紅といふ風な生き方です。第三生は若くてこゝに進む人もありますが、多くは修行が積んで老境に入つた人が到達する境地です。小學教師では多く恩給生活に入つてからです。色でいふならば無色素通しです。そこ

教師の讀み得たものと兒童の讀み得たものは本質的にちがふ

悟つた人の教授

共流教授に注意すべきこと

でこれを教授上の問題にかけてみると、第一生に育ちつゝある兒童と、第二生に育ちつゝある教師が同一教材にむかつて力一ぼいにこれを讀んで、自己を育てるのです。しかし二者は師弟といふ關係で互に相利し、相扶くる間柄です。常にある交渉を保つて進む間柄です。そこで兩者は世界が違ひ、その見る所がちがつてゐますから、どちらを基準として、一に律しようとしても、それは不可能のことです。教師はことにそれをよく知らなければなりません。童謡に熱心な教師の教授などを見ると、眞紅を桃色に強ひてゐることが度々あります。桃色が眞紅に反抗して、吹出させる事が度々あります。教育はその發達の程度に於て、桃は桃に徹し、紅は紅に徹することが最もよいのです。虚偽の眼鏡をかけさせる事は、教育上には大なる禁物です。さて悟つた人の人の扱ひ振は、實にあかのぬけたものです。對者の生活を一掴みにつかんで、思ふ所にぼんとなげます。なげた中から、對者が生きて來ます。こゝをしも教育の殿堂だといふならば、今の教育は參詣道にまごついてゐるものです。横濱西有寺の開山西有穆山師は、近年の禪宗の大徳でした。ある朝小僧和尚に向つて、「いかなるか是佛法の大意。」とき、ましたら、和尚かへりみて微笑し、「板の間をきれいにふけ。」と仰せられました。この境涯の方には、教材の程度などは全く超越してゐるものと見えます。この取扱は所謂物識では到底出來ない事です。やはり腹のすわつた人の獨自の天地でせう。

共に流るゝ教授の効果を完うするには、兒童の生活全般に眼を放つて、見通さなければなりません。教室にならんでゐる兒童は、實に千態萬様であるが、さらにその家庭を見通す時に、千々態萬々様です。その生活の程度をいつても、一家に流るゝ思想からいつても、殆んど思想の外でせう。それを小學校では父兄會といひ、家庭との連絡といつて、年中行事的にあつさり片付けてゐます。稍進んだ向では家庭訪問といつて、

教育の意義
より見たる
家庭

ある家庭では喜ばれ、ある家庭では迷惑がられてゐるやうな事をしてゐます。教育家は多く自由を尊重し、所謂官僚式を嫌ふ傾向がありますが、家庭對學校の問題で、教師對父兄の交渉となると、官僚気分が既に十分です。かういふ有様を見ると、我も昔はと、顔から火の出る思がします。私は今の寺院のやり口にも賛成の出来ない點は澤山ありますが、檀那寺と檀家の關係は、ぜひ學校と家庭の上にもち來したいと思ひます。私は家庭といふものを學校以上の教育所と考へてゐます。いかに不完全な家庭でも、教育としての意義は十分です。家庭教育によらなければ、何處でも出来ない一點があります。それは生活——さしづめ衣食住に關した——の問題です。空飛ぶ鳥は到るところに食物あり、休む枝があります。けれども人は食物を求め、憩ふ家を作らなければなりません。生物を通じて生活するといふ問題は眞劍です。一步これをあやまれば、生命の存続がおびやかされるのです。これは不言不語の刺戟で、一家統率の任にあるものは、夢寐の間も忘れることの出来ないことです。この眞劍な問題によつて教育されるものは、眞劍な魂です。これを有する者は到る所に楽しい天地を建設します。

暫らく財産とか、傳統とかを除いて、完全な家庭といふものを考へてみませう。祖父母・父・母・子・召使等、一家十二三人の一團があるとしませう。年齒の差、性の別、個性の異なるところは、その顔の同じからざるが様です。これらが各その所を得て、各自の生を全うするやうに、共に流るゝ所に、家庭の眞價があります。家長は水先案内であり、警告者であります。かうした集りの上に生命存続の活問題がかぶさつてゐるのです。これを解決するのに、職業があります。私は職業の高下を問ひません。下駄の齒入でも羅字のしかへでも、一家の責任者は夜を日について、生命存続の解決に努力するのです。その努力から發する光に、

幸か不幸か

一家の者は照らされて、生きても行き、また魂を育てても行くのです。私はかうした家庭を、教育的に完全な家庭だと思ひます。

祖先の残した財産のために、世間の荒い風にもあたらないで育つていく兒童があります。生活の恐れを少しも感じないで、生きて行く者があります。「賣家と唐様で書く三代目。」といふ川柳子の皮肉は、多くはかういふ子弟の上にする運命です。生活の眞劍味にふれるのを下品な事のやうにいつたのは、「遊ぶ」といふ事や、「使役する」といふことを、敬語に用ひる民族の、大なるはきちがへです。今後の社會には、生活——總ての物的・靈的——を直視して、その解決を汗に求める者でなければ、役に立たないかと思ひます。不幸続きで、すねも腰も立たず、日々の生活を他人によつて解決しようといふものもあります。内に弾力を失つた點に於て、唐様の三代目と同様です。一は物を多く有して弾力を失ひ、一は物を少く有して弾力を失つたのです。私は過去四十年の経験上、たいていの不幸は、自己をみつめて得た弾力によつて、拂ひのけることが出来ると思ひます。よしそれが出来ないとしても、弾力を失つた敗殘者よりも、どれほど安心の境地がひろいか知れません。

私は家庭の問題に深くくひ下つて論じました。この事がもし父兄に十分理解せられましたら、たとひ學校教育がなくなりましても、相當の成績を収めることが出来ると思ひます。もしまた學校教育がそのさめたる家庭と相まつて發展しましたら、今日の教育の効果を、倍加或は三倍にする事が出来ると思ひます。家庭もさめようと努めず、模倣に始まつた學校教育も、年來の積弊にたへずして、惱んでゐるやうです。またるゝものは、生きた教育者の出現です。

私は略畫をこゝにまた一つ出します。

共に流るゝ教授は、さきに述べたやうですが、その教授に到達するまでの豫習、その教授のあとに續く復習、それを合せて考へないわけにはいきません。教授は豫習によつてその効果を高め、教授の効果は復習によつてまとまるものです。かやうにして得た讀書の力が、豫習の上にはあらはれ、それが教授に及び、また復習でまとまるのです。この循環を集めて、讀み方教授といふのです。

復習	教授	豫習
----	----	----

教授は學校で行はれるものです。師弟の相互學習といはばいはれるものです。豫習と復習は、家庭で、自由に、獨自に、行はるべきものでせう。奈良女高師附屬小學校の第一時限が、すべて自習にあててありますが、私はもつたいやうに感じました。師弟相直面する五時間の第一時限ですから、共に流るゝは教授の場合のみではありません。教授の流が豫習の必要を起し、また復習の流をおこななければなりません。要するに豫習・教授・復習は、つゞいてゐる一つの流です。

近來は豫習が自習といふ名によつて盛んに行はれてゐます。單にことばのうへからいへば、豫習には教授を豫想した響があり、自習にはよしその到達點は低くても、自分で仕上げるといふ語感があります。けれどもそれは語義の争で、實際は相近いものです。私は自習について、一つの問題を提供しようと思ひます。全科詳解や自修書によつて行ふ自習が、どれほどの價値があるませうか。自習用雜記帳の上には、秩序整然とうつされて、一見念入りの仕事のやうに見られますが、これは一種整齊本能のはたらきで、眞劍に考へたはたらきとは、相容れないやうな傾があります。筆記帳をきれいに整

豫習教授復習

自習について

理してゐる子供に、存外力の弱いものを見ることがあります。ことに自習書や全科詳解は、いつでも問ふことの出来る心安い先生で、徒らに依頼心を助長するに止まるやうな弊もあります。學習の面白味は無手ぶつかる所にあるかと思ひます。一讀して意義が十分通ぜず、再讀して不明瞭な箇所が次第にわかり、三讀して自分の讀み得た所によつて、作者の魂にふれるといつたいき方は、讀書の趣味を高め、讀書の力を助長する上に、却つて捷徑ではあるまいかと思ひます。他人の解釋や感想を讀んで、これを承認するよりも、自分の解釋又は感想を基礎として、それを是正していくことが、どれほど獨創的であるか知れません。自修書・全科詳解それを持つことは必ずしも悪いことではありません。けれどもその使用をあやまつたら、一生取返しのつかない悪習病弊をのこさせう。胃弱者が胃散を飲んで、食物を食ふのは、やがて胃を無能ならしめるだけです。それよりも斷食一番胃の力を呼びさますがよいではありませんまいか。

相互學習もこれに似たやうな傾を生じやすいかと思ひます。人は何人も考へることが肝要です。考へる所に發明・發見があります。自己の躍動があります。問ふのに餘りに便利な状態は、案内者付で東京見物をするやうなもので、何回やつても、道筋をしつかり覚えません。ことによほどよく訓練しても、人が數人會すると、そこに群集から來る新問題を生じやすいものです。むしろそれが人間の社會性で、教材を仔細に考察するには、不便な場合があるやうです。とにかく豫習・復習共に、獨力で行はしむべきもので、さういふ風に仕向ける鍵は、教授がにぎつてゐるのです。

自習を経て來た兒童の教室に於ける學習振に、私は身の毛がよだつ程きらひなことがあります。それは自習して來たことの發表の際、自習帳にかちりついて、少しも融通自在のはたらきを示し得ないことです。そ

相互學習

自習の弊

れはまだよいとしても、既に教授が、半以上進行して、自習の是正が十分に行はれてゐなければならぬ場合にも、なほ先生の間に對して、自習帳を固執して答へてゐます。のみならず、教師と兒童の問答が、微妙な國語で流れなければならぬ時にも、自習帳といふ間の宿があるので、國語の味を減却してしまひます。國語は當意即妙、真情流露、圓轉自在な所に眞の味があります。教材を教授するばかりでなく、之にまつはるすべての國語も、また尊い教材です。

自習をよくした兒童の中には、往々自負の鼻がうごめいて、他生の誤讀指摘を、さも得意らしくしてゐる者があります。心得ちがひも甚だしいものです。大體誤讀を指摘するやうな心がけて、他人の通讀をきいてゐては、到底文の深みには觸れないと思ひます。私は東京高師在職中から、誤讀指摘を嚴禁してゐました。たまたま轉校生などで盛んに舉手して、誤讀を指摘しようとする、私は苦りきつて、「先生がついてゐる。よけいなことをいふものではない。」とたしなめたものです。魂の叫をきかうといふ讀み方の作業に、誤讀指摘ははなはだしい錯誤です。

教授の批評會などで行はれる讀み方教授は、語義・意義・文字の書き方まで一つもさす取扱ひますが、私はこれを見る度に、心なきことだと思ひます。精細な取扱は、復習によつて發見する兒童の興味を奪ふもので、教育的ではありません。私は上級に進めば進むほど、要所だけを取扱つて、他は兒童の復習にまかせたものです。さうすると教授に餘裕を生じ、いら／＼した氣分がなくなります。しかし復習の流を起す箇所をよく／＼考へて、暗示することを怠つてはなりません。こゝまでかうした教授に關する説をなして來ると、勢一例をあげなければなりません。けれども前にも申

誤讀指摘も
讀み方の弊町野な教授
も弊

老社長

しましたやうに、私は大正十年九月以降兒童との接觸をたつてゐます。ことに讀み方教授に關する意見をまとめたのは、昨今のことで、これを何處に試みようといふ暇もありません。しかし永年教壇上に働いた私としては、一語も教壇を離れての立言ではありません。私は十が十まで、實行にさしつかへはないと思ひますから、教授の豫測も亦一興です。次に愚案を開陳してみませう。

材料として九の卷第十三の老社長をとりませう。この材料には私も多少關係がありますし、内容は修養問題ですから。

教師生徒共に豫習をしなければなりません。教師は生徒を指導するためと、自分の修養のために、生徒は教をうけるために、かつ自分の修養のために、心靜かに之を讀んで、何物が心に響くかを反省しなければなりません。私が今かういふ心で讀んでみると、「老社長はえらい方だ。前半生の成功と後半生の成功、それは道の上に安んじて、最善の努力ををしまぬといふ性格に一貫されてゐるが、その最も鮮明にあらはれてゐるのは、『なほに、もう一度出直すのです。』といつて、醬油のはかり賣をはじめた所だ。内省すると自分に成功のあとはないが、成功の端緒は日々の生活の上にくらでもある。たゞそれを捉へ得ないだけだ。」といふのです。

さてこの材料を兒童とともに研究・鑑賞・批評するといふ立場にたつて考へてみると、自分のながめ方によつて、兒童も益するだらうし、自分もまた兒童のながめ方によつて、益するだらうといふ豫測が出發點です。畢竟世界のちがつた少年と老年の眼にうつる偉人を、共にながめようといふのです。なほその偉人を各自のうちに仰いで、それによつて行くてを照らさうといふのです。その立場からは、もすこし碎いて考へて

おかなければなりません。

- 一 偉人といふものは、いかなる場合にも光つてゐるものです。父の手紙を持つて行つた少年——この文の作者——は、それを直覺したのです。
- 二 十二の小僧で、近所へ醬油のおろし賣にまはつた。人目にはつらいと見える事が、小僧にとつては、道をあゆむ安心と楽しさで過したのです。
- 三 米屋をして、財産家となり、銀行の頭取となりました。——偉人にもこゝは思慮がたりません。商賣の道には通じてゐても、金融界には存外素人であつたでせう。推されても辭すべきでせう。偉人も名譽の慾のために、非分の天地に足をふみいれました。千慮の一失ともいふべきでせう。
- 四 果然十年の月日は、偉人を失敗の穴におとしました。これはさらに偉人をして偉ならしむる天意かも知れません。
- 五 偉人の目はさめました。而して道を見る目は、少しも狂つてゐませんでした。自分は無一物になつて、結末をつけました。
- 六 世人はよく面目ないといひます。道に立つてゐる者は面目ないといふことはありません。その強みと安心はこゝです。金は天下のまはり持、「なあに、もう一度出直すのです。」は神の聲です。俯仰天地にはぢざる言です。
- 七 偉人の着眼は異つてゐます。この地を去つて、發展の地を他に求めるとしたら、まづその土地を知らなければならぬ、人を知らなければならぬ。故に失敗したる地、ことに自分に同情のあつまつてゐるこの地、そこで昔おぼえた醬油のはかり賣をしよう。と用意は綿密周到です。
- 八 偉人には荷車を借りて引いてあるいた時、既に成算がありました。太陽の朝々東に出て、夜々西に没する底の覺悟で、あせらずに楽しんで仕事にはげみました。
- 九 精米所の成功、それは物にはなくて、偉人の踏んだ道の上にあつたのです。
- 十 少年は偉人の偉を直覺しました。偉人も尊いが、少年としては自分の内に持つてゐる偉人を感知する力、それがより尊いのです。それが偉人となる萌芽です。かうした目で村内を見れば、小偉人は澤山にゐるわけです。

書きあげましたから、いやに事々しくなりましたが、児童と共に研究・鑑賞・批評しようといふには、これほどの豫習はありたいと思ひます。よくこの材料に、十箇條も小理屈がいへるものだとおつしやつて下さるな。偉人の偉なる所は、渾然として一つですが、碎けば行くとして可ならざるなしで、一切の行動にその偉を認めることが出来ます。

甚だ人の悪い事を申すやうですが、私が今まで見た児童中心の讀み方教授では、児童の意見の赴くがまゝにまどめよとの計劃らしいのですが、一回としてうまくまとまつたためしがありません。終業の鈴がなるのが教授の終で、後は折角美しく咲きほこつてゐた花を、むしつてすてたやうな感がつよいのです。さらに二三の人を除く外は、教授者にまとまつた考があるのかを疑つた場合が多かつたのです。相反したやうなことを承認して、もちあぐんでゐた人も可なりありました。教授は児童中心でも、教師がまとまつた考なしにのぞむなどは、不適きはまる事です。

第一日、通
讀は入念な
目的指示

さて教室で児童と共に研究を開始する第一歩は、目的指示などではあまりにそらくしいと思ひます。特に課の順序を變更したやうな場合は別ですが、教師からいへば、「私が読みませうか。」といふべきでせう。児童からいへば「私に讀ませて下さい。」などあるべきでせう。通讀一過は入念な目的指示であり、その材料に對する新研究の第一歩です。私はその材料の豫習がどんなに進んでゐても、教室ではその材料に對して、新しく湧く思想・感情を直視して、師弟ともに進みたいと思ひます。

語り合ふ場
合

次には思想感情について——豫習したこともこめて——語りあふ時を設けなければなりません。その中へは教師も飛出してよろしい。児童の意見も、小異を捨てて、數名にまとめられるならば、まとめたがよいと思ひます。しかしこゝで力み合ふ要はありません、共に流れていく間に、自ら解決されることが多からうと思ひますから。

かへすゝもこの場の話し合ひを、議論に導いてはなりません。いかに甲是乙非と論議しても、一つにまとまることはありません。これに反して、言語の魔力はおそろしいものです。甲の語尾が少しあがつたかと思ふだけでも、乙の目尻がきりりと上ることがあります。難點の的を少しはづした一生に對して、侮蔑の色が部屋一ぱいに漂ふことがあります。有聲・無聲の語が、生きた師弟の思想感情をとがらせてしまふことが度々あります。論議にうき身をやつす子には、餘裕が乏しいやうです。餘裕の乏しいものは、深刻味があちははれないやうです。

読み方に附
帶した話し
方

私は読み方に附帶した話し方を、どこに位置したら、最も意義深いものかと考へてみました。この話し合を思ふにつけて、これは尊い仕事だ、多年求めてゐた解決だと思ひました。材料の多方面であることから、

通
讀

眞剣な自習の産物であることなど、話し方として適材であり、自然な好機會であります。私は只今は單に豫測ですから、斷言は出来ませんが、半月もある學級を導いたら、うつくしい場面を作り出してみようと思ひます。

作業の一轉機として、通讀を一回はさみたいと思ひます。これに引續いて作者の叫びに耳を傾けさせたいと思ひます。きゝ得たものはそのまゝに發表させ、質のよいものを代表的として、不純な點を除き、次第に純に進ませるやうに仕向けていきます。そこでもしそれがまとまつたら、短文に綴つて、それを教師は板書し、児童は簿書し、それを續合せて、まちがひがなかつたら、この叫に對する小話合をおいてもよろしい。たとへば、

小話し合

老社長はえらい人です。

道の上にたつて安心してよく働く人です。

奉公してゐた時も、米屋になつてからも、銀行が破産した時も。

小話し合ひの時に、必ず「銀行の頭取になつた時も。」と加へたいとの議が持ちあがるでせう。これは大問題をもち來す所ですが、それは後にまはして、こゝでは「失敗は道をふみはづしたからです。それは意識してゐても、ゐなくても。」といふ位な所にまとめて置きたいと思ひます。

また一轉機を劃するため、通讀一回をはさむ。しかしその通讀は一回と深いものでなければなりません。次には部分にはいつて、奉公してゐた時、日々の得意まはりのつらさを楽しんでゐる所、人の心は不思議なもので、苦しいと思へば苦しいし、楽しいと思へば楽しい。自分の生活にもこんな事があると、體檢を

通
讀

最後の通讀

語るやうにしたいと思ひます。勿論兒童の體驗も語りあふがよろしい。

教授の終には、通讀を一回おきたいと思ひます。文でも終の一節に、全文を活躍させる力があります。教師になつても僅かに半年や一年のものならば致しかたありませんが、少しく經驗が積んだら、「時間になつたからおしまひにします。」などいふへまな言葉をつかつてはなりません。それかといつて、鈴がなつてから、さらに通讀を強ひるやうな融通のきかないのもこまつたものです。

いかゞでせう。共に流れてこの邊までは行けないものでせうか。私も想像の上に語つてゐるのですが、かういふ場面を想像して下さいまして、何處かに流のとまりさうな所がありませうか。ことさらに読み方教授なるが故にといふ理由で、木に竹をついだやうな仕事をさし加へた點がありませうか。これは私のために考へるなどいふお考でなく、共に流るゝ温いお心で、よく／＼考へてみて下さい。

第二日は老社長は既に知人です。紙面の老社長も昨日とはちがひ、これを見つめる師弟の目も亦ちがつてゐる譯です。まづ通讀ではじめませう。次に昨日の復習について、話しあつたらよろしい。こゝに昨日の短文の訂正なども起るかも知れません。讀本は方便物です。その要所を生きた日常語に浮べてながめる時、自己に深き交流をおこすのです。短文を承認すると訂正するとは、同一の心意状態で、眞剣な研究の結果ですから、これを尊重しなくてはなりません。

通讀に一轉機を劃して、老社長を部分的に見て行きます。しかし全體の叫を顧ることを忘れてはなりません。老社長の偉大な所を、さらに偉大ならしめた銀行の破産、こゝは大きな窪い所で、流はしばらくこゝにとまつて考へなければなりません。論議は嚴禁です。師弟ともに自分の經驗の淺いことを考へながら、きは

第二日

復習についでの話し合

めて謙虚な心持で、偉人すらこの試練にあふといふ深刻な心に、之をながめなければなりません。

得意は油斷をうみ、油斷は失敗をまねきます。

えらい老社長も、一度は失敗の人でした。

老社長はその試練にあつてよく自分をそだてました。

この短文について、小なる話し合ひをするがよろしい。この邊で教授の一轉機を試みてはいかゞかと思ひます。人間はある變化を欲求するものです。航海しても三日も四日もぶか／＼大波にもまれるとあき／＼しますが、風が続いて、油のやうな海を三日も四日もいくのは、また閉口します。朝は静かな海を行き、午後はスコールで大波に一二時間あふ。この邊が大洋を半月航海しても飽きる事のないよい所です。共に流るゝにも、かうした秘訣のあることを知らなければなりません。

「私は、文字にも、語句にも、何の不自由もなくて、しらべる事が出来ませんが、皆さんは随分苦しい所があるでせう。これからそれを話しあひませう。文字や、語句をしらべた苦心でもよろしい。」かうしたちがつた流を作つて、難文字、難語句を三四たがやせば、全篇の明るさがちがつて來ます。この經驗が、形式方面自習の原動力となるものです。通讀によつて、教授を終ります。

第三日目は通讀にはじまり、復習の話し合に移り、通讀に一轉機を劃して、失敗後の老社長をよく見つめさせます。

道の上にたつた人にはうれへはありません。

老社長は「なあにもう一度出直すのです。」と笑ひました。

文字語句

第三日

醤油のはかりうりが楽しさうです。

残らずさし出した財産は、むだではありませんでした。

この短文についての話し合に移ります。「残らずさし出した財産はむだではありませんでした。」に首を傾けるものがありましたら、脚註として、

「財産をすてて、信用を高めた。」「商業の要は、物ではなくて、心だ。」

などつけ加へたらよろしい。なほ全體を見通して、

「えらいとは道の上に立つことです。」

「偉人を見た作者は、やつぱり小偉人でせう。」

といふ邊に流れてみたいと思ひます。最後の通讀に老社長の教授を一段落とします。

いかゞでせう。かうした流が教室に起つて、私の豫測通りに推移したと致しましたら、讀み方の教授として、何處かに大なる不都合がありませんか。かういふ推移が六ヶ年繼續したら、讀み方教授が國民の思想・感情に深くくひいることがなくて終りませうか。思想善導の根本培養を、この邊におくことは出来ないものでせうか。私は國語を熱愛せらるゝ教育家諸君の前に、嚴肅なるさばきをうけようと存じます。

共に流るゝ教授は、まことにのんびりしたものです。よくわかつて嬉しい時にも、共に喜び、わからなくて困つた時にも、共に苦しむのです。先生なるが故に、何でも知つてゐなければならぬといふ、間違つた考から、わからない事の他にも、とやかくと捏ねまはして、結局遠まはりして、わからないといふ事に落着くのです。愚な話です。わからない事をわからないといへないやうな了簡で、何で師といはれませう。師の

のんびりし
た教授

師たる所は、わかるかわからぬといふ智慧ではなくて、わからない事をわからないときつぱりいふ人格にあるのです。柳緑花紅の點に存するのです。自分の經驗をかへりみても、十に二三きつぱりわからないといふ先生は、十に七八の立言は確實であると感じます。わからないといふことがよし耻であつても、ごまかすことはさらに耻でせう。

師の恩を四恩の一に教へたのは、道を想ふ昔のことです。道の失はれ行く世に、形式的に師恩を論じて、三尺下つて師の影を踏まないことを強ひた反動が、師をよぶに仇名を以つてするやうになりました。老社長ではないが、「なあに、もう一度出直すのです。」共に流れて見れば、師のありがたみがわかります。ありがたみがわかつて來たら影もふめなくなりませう。四恩の一にも數へられませう。師道の頽敗も皮肉です。出直しの讀み方教授は、まづ共に流るゝことよりと申しませう。

共に流るゝ教授には、管理の要がありません。「今日は今日、明日は明日とて育ちてゆく、子に従ひて我も育たん。」といふが共流式教授の神髓です。今二十年も前に、こゝに氣がついてゐたら、私の人相も、今少しふくよかにまるくいつたらうと思ひます。一體小學校の先生の相は、賢さうではありますが、何處かにつきつめた所が見えます。安心の缺けてゐる様な點が見えます。教師の努力を黄金に換算することはやめませう。趣味の上に、兒童と共に流るゝ天地を楽しみませう。それで皮膚一ぱいの肉が持てないことはありませんまい。——壯年血氣の方々でも肉がしをれてゐます。皮膚の光澤がよくありません。——これは心が躍つてゐないからでせう。日々の生活が楽しくないからでせう。全國小學教師の平均體重が二貫目もふえたら、學校の内外には和氣があふれませう。いやに肉を氣にするやうですが、肉は靈の産物です。美しい靈は

豊満な肉にやどるもののやうです。

読み方の教授は読むといふことに終止するのです。これが始で、これが終です。しかし読むといふ意義は、正しく解せられてゐません。口で読む者があり、心で読む者があります。口で読む読書家の極端な者は、お寺の小僧さんです。心で読むものは、正しい読み方教授を受けた児童です。ところが十分に注意して、読み方教授を行つたといふ學級にも、読むことと、文の内容とがうまく結びついてゐない児童があります。読みは立板に水を流すやうに讀めるが、読み終へた後に意義や要點をきくと、一向に答が出来ない者があります。これは漢文教授に素讀・講義とわけて考へた事が、因襲の久しき、この禍をなしてゐるのです。私の所謂共に流るゝ教授に於ても、教授の一轉機毎に、一回の通讀をおいて、想の深まつて行くにつれて、読みをも深めようと工夫するのはそこです。特に御注意をお願い申します。私が東京高師の附屬小學校にゐました頃、他から補缺試験をうけて入學した優等生にも、この読みと意義の離れてゐる者のゐることを發見して、これが矯正に力を用ひました。轉校して來たある三年生に通讀を命じて、讀み終ると、すぐに「何が書いてあるか。」ときゝました。すると語窮して、何とも答へる事が出来ませんでした。「よく讀んでも、何が書いてあるかがわからなくては駄目ですね。」といひました。その翌日もまた讀ませて、「何が書いてあるか。」をきゝましたが、又答が出来ませんでした。その翌日もまた同じ児童に讀ませて、同じやうにしまし

たら、また／＼はつきりした答が出来ませんでした。自負心の強い優等生の悪弊を矯正するには、これほどの手強さがいります。三日おしつけられて、彼も癩にさはつたでせう。すると四日目に母親がお出になりました。彼は家に歸つて、母に「芦田先生は稽古のし

読むについで
の注意

學習動機
の弱い教材

にくい方だ。」といつたさうです。母はこの訴に、ともかくも私にあつて、きいてみようとお出になつたのでした。私はかねてから、この母が禅味の深い方である事を聞いてゐましたから、下手に取組めば投げられると覺悟をしてゐました。母は慇懃に、「芦田先生は稽古のしにくい方だと歸つて申すのですが、どういふお稽古の仕方ですらうか。」ときくのでした。私は私の教授振を説明して、轉校後引續いて三日讀ませて、その内容をきいてみたことを詳しく話しました。「讀みと意義とはなれてゐることは、読み方教授の効果は薄弱ならしめることです。」と申しました。母にも私の仕向けてゐる意がわかつて、感謝されました。「家庭でどういふ風に仕向けたらよいでせう。」と來たから、「まかせたら、すておくものです。」と一本失敬しました。「よろしくお願ひします。」といつて歸られました。要を得た問答でした。

教科書の中には、國民生活の必要といふ見地から、取入れられた材料があります。さうした材料には、往兒童の學習動機の弱いものがあつて、教員泣かせの教材だと誰も眉をひそめるものです。たとへば舊讀本十一の卷第十六課の料理などがそれです。これについては、私は忘れることの出来ない喜劇的の話を持つてゐます。

私が朝鮮に赴任してまだ間のない頃の事でした。當時元山中學校の校長西脇さんは、東京高師出身なので、色々御親切に言葉をかけて下さいました。元山府の小學校普通學校の先生方が、國語教授の講習會を開きたといふので、私をよんで下さいました。行つて見ると、内地で知合の方が多くて、他所に行つた感が全くありません。いい氣になつて、よほどメートルをあげたと見えます。すると西脇さんが、「説くやうに行へるものだらうか。」といはれました。之は決して西脇さんの皮肉ではなく、虚心におつしやつたのでした。

私も別に感情を害したといふのでなく、「行へない事は、説かない積りだ。」とやりました。一座哄笑。「一度やつて見てもらうか。」といふ風に、話が流れて、「よろしい。やりませう。」といはねばならなくなりました。しかし引受けたものの、どう考へても厄介なお荷物です。話は急轉直下にすゝみました。「學級は何年位がよろしからうか。」「私の顔を見て泣かない學級ならば、何年でもよろしい。」「それでは元山尋常高等小學校の各學級を見て、よささうなのを選んで。」といふ事になりました。最初に見たのが尋六の男學級でしたから、「私はこれで結構です。」といひました。その日の教材を見ると、第十五課招待文が終つたところでした。第十六課は料理、第十七課は時間、第十八課は畫工の苦心です。西脇さんも、平岡元山小學校長も、氣の毒になつたと見えて、「二三課のうち、何處でもすきな所を。」とのことでした。多少茶氣のある私は、同じしくじるならば選んだものよりも、當てがはれたものがよいと、早速腹をきめて、「御希望のものをやりませう。」とやりました。「では御迷惑でせうが、順序ですから、料理の課を。」と來た。尋六の男學級に、料理の課、私は何としても皮肉を感じない譯にはいきませんでした。私は可なりづう／＼しい男ですが、これを模範教授といふには、少々朝口しました。あくる朝教材を開いて見てみると、學習の動機を強めなければ、教授にはならないと考へつきました。すると壇上に立つ勇氣も自ら湧いて來ました。

尋六の男學級に、料理の課を教授するといへば、人の好奇心をそそのめるのは當然です。八十名も參觀者がありました。私は教壇上の人となりました。まづ一生に通讀を命じました。「何が書いてありますか。」ときくと、「料理の事が。」といふ。「皆さんは何故男でゐて、料理のことをならふのですか。」と問ふと、「お母さんの留守に、料理をしなければならぬ事があるからです。」といふ。私は「それではあなたにこの本を渡

しませう。これによつて、味噌汁一ぱいでも出来るか、考へてごらん下さい。」といひました。他の一人は「大きくなつて、料理をしなければならぬからです。」といふ。私は兒童があまりに兒童の生活にふれない答をするから、馬鹿々々しくも思ひました。左に本文をあげてみませう。

人ヲ招待スル時ハイフマデモナク、毎日三度ノ食事ニモ、其ノ材料及ビ料理法ニ注意スルコトガ大切デアル。同ジ材料デモ、料理ノ鹽梅ニヨツテハ、全ク別物ノ如ク味ハハレ、料理ノ方法ニヨツテハ、其ノ經濟ノ上ニモ、大イナル得失ガアル。

材料ノ種類ヤ料理ノ方法ハ、先ヅ衛生・經濟・味ノ三方面ヨリ考ヘナケレバナラヌ。衛生上ヨリハ、成ルベク滋養ニ富ンデ、コナレノヨイモノヲ選ブベク、經濟上ヨリハ、成ルベク價ノ安イモノヲ求メ、ソレヲナルベク、スタリノナイヤウニ用フベク、味ハ人々ノ好ミヲ考ヘテ、多數ノ満足ヲ買フベキモノヲ選バナケレバナラヌ。

季節ニヨツテ食物ノ選ビ方ニ、多少ノ注意ヲ要スル。寒イ時ハ特ニ體温ヲ維持スル必要ガアルカラ、獸肉其ノ他アラ氣ノ多イ食物ガ適當デアルガ、暑イ時分ハ、其ノ必要ナク、且ツ胃腸ノ弱リ易イ時デアルカラ、アツサリトシテ、消化シ易イモノヲ取ルノガヨイ。又魚類ヤ野菜ハ、各其ノ季節モノヲ用ヒルト、味モヨクテ、消化モヨク、又人々ノ好ミニモ適スル。

食物ハ又變化ガ大切デアル。日々同ジ食物ヲ用ヒルト、アキ易ク、身體ノ爲ニモヨクナイ。ソレ故材料モ料理法モ成ルベク適當ニ變化サセテ、毎日同ジ獻立ヲクリカヘサヌ様ニ注意スルガヨイ。例ヘバ動物質ノ滋養品ニハ、植物質ノ食物ヲ添ヘ、又汁氣ノナイモノノ次ニハ、汁物ヲ出シ、アマイ物ノ後ニハ、鹽カライ物ヲ配合スル類デアル。其ノ他切方、並べ方、色ノ配合ニ至ルマデ、皆ソレゾレノ工夫ガ入用デアル。

常ニ食物ヲ料理スル臺所ハ、特ニ清潔ヲ保ツノ必要ガアル。臺所ハ種々ノ食物ヲ置キ、ニタキ、洗ヒ流シヲスル所

デアルカラ、流シ元ノ戸ダナヲハジメ、料理道具、食器、フキンナドニ至ルマデ、常ニ清潔ニシテ置カナケレバナラヌ。座敷ヤ庭園ヲ奇麗ニシテ置ク人ガ、臺所ヲ不潔ニシテカヘリミナイノハ、ヲカシイ話デアル。

一讀してもうんざりさせよう。こゝに料理についての概念を得たいといふ人があつたら、この上もない名文でせうが、かうした要求を持たない人には、やゝ迷惑な文です。大人でもさうです。まして兒童には縁遠い事ですから、「料理をするために。」とか、「大きくなつてから。」とかいふ、何でもあてはまる様な答をするのです。寄席でよく笑はせられる、「それにつけても金のほしさよ。」といふ下の句は、どんな歌の上の句に配しても、意義をなすといひますが、兒童も五年間、一問一答の修行は、何にでも適用する答を工風してゐるものです。兒童に要求の乏しい材料が、自然にいはずの輕薄です。兒童に罪はありませんが、材料選擇の杜撰は、知らず／＼教育の破壊に進みつゝあることを知らなければなりません。それはとにかく、八十人の參觀者と、五十人の兒童を擁して、この難問に逢着してゐる私を想像して下さい。

この場面を何としても一轉化しなければなりません。そこで自由讀を課しましたが、「何がために、この文を學ぶかを求めて讀みなさい。」といつて。噪音は數分にしてやみました。「誰かみつかりましたか。」ときいたが、一人の舉手する者もありません。萬事休すといつた状態です。そこで窮餘の一策として、私は挿話を試みました。「先生は海岸の大東館にとまつてゐます。今朝のお料理は味噌汁と、玉子焼と、菓子焼と、漬物と、御飯の五色でした。これは誰がこしらへたのか。」といふと、「料理人です。」といひました。「料理人が勝手にこしらへたのだらうか。」といふと、「大東館のおかみさんがいひつけたのです。」「それだけわかつてゐれば、この文をなぜ學ぶのかわかりさうなものだが。」といつても、舉手する者がありません。「それで

はもう少し話させよう。皆さん今朝何をたべて来たか、先生のやうに、少しも偽らないでいつてごらん。」といふと、「私はおみおつけとおしんこで、御飯をたべて来ました。」「私は漬物だけで御飯をたべて来ました。」「その料理は誰がお作りになつたのですか。」「お母さんです。」「それがわかつてゐて、この文をなぜ學ぶか、わからないのですか。」「こゝまで押しておいて、私が靜かに一回通讀しました。さうして「どうです、分りましたか。」といふと、優等兒が一人舉手しました。彼はおそる／＼、「先生、ちがふかも知れませんが、——かう前置をして——この文をよく讀んだら、私等の毎日食べる料理について、お母さんが色々御心配下ることがわかるのではありませんか。」といひました。私の思ふつばを彼はさしたのです。微笑は自然にあふれて來ました。「教へがひのある兒はあなただけです。」といひました。

優等生は教室といふ小社會に於ける先覺者です。これあるがために、その小社會が、率ゐられることは、どれほどだか知れません。しかし劣等生は後覺者ですが、これが先覺者を教育しないといふことはありません。優等兒がその天賦の才能を發見するのは、多く劣等生のたまものです。優は劣により、劣は優によつて育てられるのです。とにかく一優等生によつて、この答を得たのは、行詰つたこの場面の展開には、神のたすけです。コロンブスの卵と同じく、立てて見れば、譯もないことで、求めてゐる道の發見者たることはむづかしくても、承認者となることは、誰にも出來ます。全級の眼はかゞやいて來ました。その刹那に、この教授は成功だと見てとりました。

「皆さんが日々たべてゐるお料理に、お母さんがどんなに御心配をしてゐて下さるか、それがこの文によつてどれ程わかるか讀んでごらん。」兒童の自由讀一過の後をきいてみると、「衛生・經濟・味の三方面から。」

とか、「夏はあつさりした物で、冬はあぶらこい物。」とか、要を得た答を得ました。その答は「自然に食物の小言をいふのは、母の心配をむだにする事だ。」といふに流れていきました。そこで文中の一語一字も、それ／＼分擔の光を放つことになりました。

難語三つ、献立・鹽梅・經濟の意義を取扱つて、文中の暗い所をやゝ明るくしました。最後に通讀一回して教授を終りました。

次の時間に、私は參觀して下さつた方々に、壇上の所感を話しました。私の苦しんだ所は、參觀者諸君も自分の事として、苦しんで下さつたさうです。優等児の一答に、局面が打開せられた時など、全く愁眉を開いたとの事でした。誰かが「面白い型だ。」とおつしやつたから、「型ではありません。私は元山尋常高等小學校に赴任して、第一時間目の讀み方だと、心得てやつたのです。あれでも眞剣でした。」と申しました。それがまた大笑の種になりました。

私にとつては元山はなつかしい所です。海の水の色から、山の色まで、海岸の屈曲から、家のたち方まで、郷里山陰に酷似してゐます。鮮天橋といふなつかしい砂の半島もあります。人も山水もすべてよろしい。さうして北鮮一帯は手を擴げて、裏日本人をまつてゐるやうな天地です。

共に流るゝ筏師と筏のやうな教授を夢想してゐる今日からは、元山に於けるこの料理の教授のきこちなさ、自分でも冷々するやうな所があります。無理な所があります。もし「春の日に流れて、長き筏かな。」といつたやうな長閑な教授がさかんにになりましたら、力づよき生の發展は、まづ小學校の教室からとなりませう。私は幾ばくもない殘年をさうした教授の創始運動にさゝげようと思ひます。私の死所は教壇です。



教授に關する立言を終るにあつて、また略畫を一つ出します。教授法の書物には教授は變化しなければならぬと抽象的には書いてありますが、讀み方教授にはかうすべきだと、具體的に示したものがありません。讀み方教授は、主として音聲による交渉ですが、四十分内外の教授を、それでおし通すのは、あまりに智恵がなさ過ぎます。どうしても中間に、手の働をおいて、變化をつけるのがよろしい。さうすると、はじめの音聲も、終の音聲も清新の感に充ちてきくことが出来ます。

そこで文を筆寫する意義を一言しておきます。文の筆寫は文字の記憶や筆端練習のみではありません。眞に文を精讀しようといふ場合には、これを筆寫するのが最もよろしい。これは私が朝鮮の讀本を編纂してゐる時、自分で全巻を幾回も清書したものでした。清書は決して人に託したことがありませんでした。文は清書の回数によつて、透明の度に差があるやうに感じました。とにかく自分で文をつゞる心持で、讀本の文章——その日に兒童と共に研究する教材——を筆寫する教師がありましたら、取扱の神髓は、そこから湧いて來ると思ひます。筆寫は精讀の方便です。作者と殆んど相似た心的状態になつて文を考へるからです。特に下級生には、筆寫には教材の全文を、上級生には精査を要する部分だけをとるがよろしい。さきにあげた老社長の短文様のものを以てしてもよろしい。

上級になつても、特に精讀を必要とする教材は、全文筆寫を課するがよろしい。とかくこれまでの教授研究は實行を後にして、まづ効果を考へて見る弊があります。いくら考へても、實行してみなければ、効果が出て來ない事は、實行するより外に道はありません。古來文豪がその愛讀書を筆寫したといふ話は、いくら

もあるではありませんか。これは愚さうな賢い方法ですが、當今のやうに頭でばかり効果の有無を商量して、實行の上はその眞義をさとらうとしないのは、賢さうな愚者のすることです。筆寫について特に讀者諸氏の御一考を煩はしたいと思ひます。

要するに教授の秘訣などいふことは、あけてくやしき玉手箱で、開いては何でもない事のやうです。この音聲を前後に割つて、中間に手先の作業をいれるのなども、まさに秘訣の部に屬することせう。いかなる教授法の書にも書いてありません。

四 私の國語教授に關する追憶

讀み方教授に關する研究が、この一二年勃興して來た現象の、よつて來る所を考へると、色々なことが思はれます。週期的に來たものだとも思はれます。社會萬般のことがすべて大きなうねりのやうに、一高一低して進んで行くのですから、讀み方教授だけがその自然の勢にもれる事はありません。しかし週期運動とだけ見るには、あまりにうねりが大きすぎます。本年（大正十四年）の秋季に催される讀み方教授に關する研究会だけでも、實に多數です。就中東京高師の全國訓導協議會、東京市の讀み方協議大會、新潟師範附屬の國語研究会など、實にその勢に於てすばらしいものがあります。私には之をたゞ週期的運動と手輕に觀過することが出来ません。

當るかはづれるかは別問題として、私見を述べて見ませう。前文部大臣江木千之氏の時に、社會の思想善導といふ事が問題になつて、文部省では重だつた宗教家を集めて、色々討議せられました。各府縣でも之を模して、神官・牧師・僧侶等を集めて、思想善導の方法を議しました。一時は世人の注意をひきましたが、その後大臣もかはり、もと／＼民衆の腹の底から起つた運動でもありませんから、源泉が涸れて、遂に流を見なくなつたやうなことです。

讀み方教授の研究熱が、その頃から頭を擡げて來ました。思想が年々あらぬ方に流れるのを、教育者はだまつて見つめてゐたのです。之に對して諸種の防止・善導運動が、殆んど無効に終ることも見ました。さ

うして各自の任務をかへりみる時、全く關係のない事ではないと気がつきました。けれども御堂に説教をする機会も持たず、大道に演説する事も許されてゐない小學教師は、自分の任務の範圍に、思想善導の意義を見出さうとつとめました。修身教授に目をつけましたが、あまりに理に落ちて、満足が出来なかつたのでせう。國語教授に眼を轉じて、何物を見出したのではありますまいか。そこに讀み方教授研究の第一聲がおり、不言不語の間に默解の流れが出来て、この大勢を作つたのではありますまいか。勿論無意識的の運動です。しかし全國小學校教師十五萬の胸に包むに包まれぬ不安から源を發してゐるだけ、この運動は徹底的のものではあるまいかと思ひます。

もし私の言がその幾分でも眞を穿つてゐるとしたら、思想混亂の時代に於ける教育者の覺悟・着眼・事業として、相應しいことと思ひます。教育者らしい運動だと思ひます。この運動がよしがつた動機から來てゐるとしても、それを善導して、當代に於ける教育者の尊き奉仕としなければなりません。單なる週期運動であつても、意義深きものとしなければなりません。

私はかうした諸問題を幾つか持つてゐますが、それを並列的に書きあげていくことは、何となく深みが失せるやうに思ひます。そこで私の追憶として、私の過去の生活に結びつけて申しのべてみませう。

年をとる意

年をとるといふ事は妙なものです。一日々新しい世界に突進することです。私はいつも考へてゐます、最後の一呼吸はどんなものであるかと。しかしその一呼吸の感想は、一呼吸の刹那に於てのみに味はれることです。たとひ次の世界が死であつても、それが爲にこの新經驗が楽しくないといふことはありますまい。自己の生活を尊重するといふならば、最後の一呼吸をきりはなして考へてはなりません。

五十三合目

さて五十三合目といふ山の中腹にたつて、一合目から一日きざみのエスカレーターに運ばれて、私の足もとまでつゞいてゐる人々の上を見ると、泣いたり、笑つたり、迷つたり、脱線したり、いやはや千態萬様です。六十・七十・八十と頂上にむかふ人を仰いで見ると、首をかしげたり、ふりかへつたり、歩いてみたり、しやがんでみたり、すこぶる足並が健全を缺いてゐます。將來は全く想像による外、語ることは出来ませんが、過去は慥にふんで來たのです。小さい板ながら、乗つて來た事は事實です。こゝに私としての強みがあり、今日持つてゐる國語教授に關するすべでも、その足跡からしほり出されたものです。それらの諸問題を發生的に取扱つてみようといふ計劃です。

私の小學校入學の當時は、「イト・イヌ・イカリ。」といふ單語篇、「神は天地の主宰にして、人は萬物の靈なり」といふ連語篇を學びました。何の事か知らないが、たゞ大きな聲を出して、讀んだだけでした。それも下等八級といふ半年だけ、七級——今の尋常一年の後半期——には、小學讀本卷の一、第一「凡そ地球上の人は、五つに分れたり。亞細亞人種、歐羅巴人種、馬來人種、亞米利加人種、阿弗利加人種是なり。」といふを、模唱によつて學び、講義を口うつしに習つたものでした。讀本のあと三冊を下等一級までに讀んだやうに記憶してゐます。若い方にはお目の薬にもなりません。卷の二三四の第一の一節を左に掲げてみませう。

老たる牝鷲の子を多く伴へり。○此鷲の子は皆水の中に飛入れり。○此鳥は其性水上に泳ぐことを好めり。○牝鷲は其沈み溺れんことを恐れて、甚愛ひ悲めり。○然れども鷲の子は牝鷲の心を量り知らずして、隨意に泳べり。○牝鷲は何を憂ひ悲むと思ふや。○牝鷲は、此鷲の游泳水鳥なるを知らずして、我子と思ひ悲しめるなり。(卷二)

水は動物・植物の養液にして、地球上尤も要用のものなり。「水なきときは萬物生育することを得ず。」「水に止水・

四 私國語教授に關する追憶

私の小學校
へ入學した
頃の讀み方
教材

流水の別あり。池水・湖水を止水といひ、河水を流水といふ。「湖水は陸地全く四面を環り、中窪なる地に、停れるなり。」「河水とは、山間の谿谷より湧き出でて、海に注ぐをいふ。」此圖は林中の湖なり。此水は陸地全く四面を圍みたるゆゑに流れ去ることなし。(卷三)

人の天性は至りて相近きものなるを、賢愚の遠く分るゝ所以は、幼時より學ぶと、學ばざると、勉むると、勉めざるとにあり。勉めて學ぶ時は、人々皆大人君子となるべく、又文人才子とも成る事を得べし。かく天然の才智を粟けたる身に於て、學ばず、勉めず、終に自不才無智の人となるは、即所謂自暴自棄にして、其天性を賊するものと云ふべし。數すべきの甚しきにあらずや。(卷四)

これを尋二・三・四が第一學期の第一週に學ぶのですから、いさゝか驚かれるではありませんか。然し

故山高不貴。以有樹爲貴。

故人肥不貴。以有智爲貴。

と漢文の實語教を口うつしに學んだ寺小屋にくらべると、一段の進歩で、新教育の教材は國文によつたといふ譯です。

山高帽子

下等全科卒業の時は、山高帽子を郡役所から各生に下さいました。四十餘年以前に、藁草履はいて、山高帽子を被つた丹波の寒村の兒童は全く奇でした。和服着で洋靴をはいた位の比ではありませんでした。それが大なる名譽であり、父兄・師弟のすべてが眞剣でしたから、一種の喜劇でした。

私が上等八級になる時、學制がかはつて初等・中等・高等となりました。中等科では漢史一班といふ支那歴史の假名交り文を読み、高等科では十八史略七冊を二年間に學びました。私が高等科を卒業した年、尋常

四年と高等科四年にわかれてました。

今日の朝鮮の教育状態を、若い官吏や教員が嘲つたり笑つたりする事があると、私はいつも「日本も今を去る三四十年前は、一切喜劇でした。今の朝鮮よりも、もう少し程度の高い滑稽でした。ただ時の差です。」と申しました。私は私の育つて来た跡から朝鮮の現状に可なり深い理解と同情を持つ事が出来ます。

私が始めて小學校の教壇に立つたのは、兵庫縣氷上郡竹田簡易小學校に於てでした。その時の辭令が今も私の手にあります。

小笠原惠之助

竹田簡易小學校授業生ヲ命ズ

但月給金貳圓五拾錢支給

明治二十二年五月十五日

氷上郡役所

簡易小學校とは修業年限三年の小學校、小笠原惠之助は芦田惠之助と異姓同人です。物價も安いには安かつたのですが、私の一日の給料は、今の敷島一つにも、朝日一つにも及ばなかつたのです。

この時の讀方教授をどういふ風にしたか、今記憶をたどるけれども、何も浮んで來ません。たゞ分りきつたことをどう教へるかといふに苦しんだことを記憶してゐます。しきりに談話をして、兒童を悦ばせたことも記憶してゐます。學校の歸途校長のうちへ孟子の講義をきゝに行きましたから、學校の教授も蓋し模唱の反復主義だつたらうと思ひます。

四 私の國語教授に關する追憶

はじめて教壇にたつ

學校の裏の小山を越すと、大きな山の中腹に、石像寺といふ禪寺があります。こゝにある冬江湖會がありまして、雲水が四五人集りました。學校からあまり遠くはないので、ある日遊に行きました。この時不圖知合になつたのが、今の越前武生在寶丹寺の住職安立洞順師で、師は私より一つの年長、私が十七、師が十八、とうとう師の寮にとまりこむことになりました。臘月攝心の時などは毎朝四時におきて、禪堂にはいつて、坊さんなみに警策をうけて、八時半から學校に勤めるといふのでした。この百日足らずの禪寺生活は私に歸一點——極々かすかながら——を興へてくれたやうに思ひます。それが迷つた時でも、失敗した時でも、本に歸ることを忘れしめなかつたやうです。禪堂教育の一特長かと思ひます。

十九の年京都に出て、下京淳風小學校の訓導となりました。ここで二年勤めました。この時は心理學の術語なども多少おぼえて、人の前に使つたりなどしました。けれどもそれよりも、ちぬの浦浪六の三日月や、奴の小萬や、井筒女之助や、鬼奴を耽讀しました。夫と一方には三國先生について和文軌範の講義をきゝました。その頃落合直文・小中村義象兩先生が、新撰日本外史といふものをお書きになりました。「あはれといふも世の常にして。」といつた風な、兩先生一流の文に引つけられました。猿の眞似事で、自分でも貧しい語彙をやりくりして、半擬古文を書いて見たことなどがありました。

二十一の年京都を去つて、丹波に歸りました。何の理由もありません。友人が自分の下に來て助けてくれよといつたからです。多少給料がよくなつたのかと思ひます。たゞ引く手にしたがつて、流れたといふきりでした。餘談ですが、二十七八年戦役で、大阪にゐる兄に召集令狀が下つた時、その令狀を持つて、夜を日についで、京街道をかけ、向日町に出て、汽車で大阪に達し、兄に手渡したことなどを思ふと、若い血の沸

つたいきくした時代を、今でもなつかしく思ひます。

かうしたはづみのよいまりのやうな時代に、「汝に最も尊いものは、汝の生活である。」と一言教へてくれるものがあつたら、三十歳以前によい境地に達したことだらうと思ひますが、好機に直面しても、自らさめず、さましてくれる人にも逢はず、たゞ衝動に妄動してゐたかと思ひます。

二十八年に一子を擧げて、二十九年に大洪水にあひました。二階にゐて、濁水が臍に達しましたから、こゝにゐて死ぬか、屋根に出て死ぬかだと覺悟をきめて、裸になつて、一子をしつかと背負ひ、小屋根に出ました。すべる足をふみしめて、隣の大屋根に上り、一族の二階にゐるのを助け出して、さて更に高い屋根に避難しました。さて決潰の箇所はと見ると、水の急激に押寄せたのも道理、家の裏手一町のかなたは、濁流滔々たる大河——きのふまでは町——です。その川筋に立つてゐた小さい家は一軒も見えません。今は學校・税務所・倉庫などの大きい建物が倒壊してゐます。屋根に避難してゐる人が、建物のたふれる土煙と共に、濁流に身を投げる悲惨は到底見てはゐられませんでした。この時はまだ朝の程でしたが、午後の四時頃まで私どもは屋根で暮しました。

私が死に直面したことは、この時が始めでした。しかしかういふ際に死ぬのは、生きん／＼と藻掻いて、力盡きた時が死ですから、我が事終ると感ずると共に、死が到來するのです。生きんとする奮闘が、死ぬる過程却つて悶々の情は少いかと思ひました。

五十年も七十年も先にあると思つてゐた死が、一夜の中に面前におしよせて、知人の幾人かはその手に握まれたのでした。二十五歳の若者にも、この事ばかりはひどく考へさせました。

水がひいたから、學校にかけつけて見ると、凹字形の建物の片側が倒壊して、正面の講堂が危殆に迫つてゐました。門をはいった松の木の下に女の死體が一つありました。講堂の中に男のものが一つありました。校長中島錦三郎君と二人御眞影奉安の倉庫へいつて見ると、こゝも危険です。すてゝはおかれぬから、戸をひらかうとしますが、戸がぬちれてびつくりとも動きません。止を得ず鋸で戸前をきりやぶつて、私のはひこみしました。御眞影を背負て外に出て、聯隊區司令部の樓上に安置しました。學校附近のせまい場所に二百ばかりの死骸、驚いたのは最初だけで、なれては流木と擇ぶ所がありませんでした。

無期の旅行

私は十數日、この水害あとで人夫と共に働きました。そのうちにこの復興には世間の同情を仰がなければならぬと思ひました。校長に「僕一人に無期の旅行を許してくれないか。こゝにゐても壹圓五十錢——人夫賃金壹圓五十錢——の働も出来ぬ。僕は乞食をしても義捐金を集めて来る。」といひました。校長も快く許してくれましたので、三十幾日京阪地方をさまよつて、涙の金品を得て來ました。

記 丙申水害實

この洪水は私にとつては、思想の一轉機でした。死に直面しました。眞摯な人心と、輕薄な人心とを同時に見ました。どうしても書かないではゐられない心持になりました。筆を執りましたが、半年かゝりました。

「丙申水害實記」と題して、百四十枚ありました。これが私の一生には大なる基礎を與へてくれました。

筆の自由

筆をとることはまづいながらも自由になりました。何か彼か所感をかきつけました。人は冷かしました。「筆まめな男だ。」と。私は今から思ふと、筆まめであつたがために、子も三人育ち、自分も生きがひのある生活が出來たのだとしみじみ思ひます。

唱歌適用實
驗遊戯

三十年の秋京都に遊戯の講習がありまして、私は天田郡の選出講習生として、滞在致しました。日々三四

尋常小學校
作文科教授
方案

種づつ教はる遊戯を歸つては筆記して、一月がほどに唱歌適用實驗遊戯をまとめました。講師横地捨次郎先生の校閲を経て、京都の村上書店から發行しました。これが私の名が本の表に書かれた始です。

この講習中にきゝこんだのは、明年の秋京都市に開かれる、第四回内國勸業博覽會に際し、京都市教育會では、小學校創立三十年記念會を舉行し、その事業として、尋常小學校作文科教授方案といふ懸賞文を募集するといふことでした。多少作文については考へてもゐるし、さきに「丙申水害實記」をまとめた経験もあるし、かたがた書いて見る氣になりました。或は五十圓といふ賞金に、食指が動いたのかも知れません。何人にも極々秘密で材料をあつめ、それを綴つて提出しました。

審査の結果をまつてゐると、ある朝の新聞にその發表がありました。驚くぢやありませんか、私が一等當選ですもの。當時俸給十三圓約四箇月分を握つた譯です。請取らないさきに、使ひ道の計劃です。「どうかして東京に行きたい。」これが私におさへきれない希望でした。ことに友人近藤常吉君——今大阪の住友につとめてゐます——が高等師範學校の教諭樋口勘次郎先生の宅に出入してゐましたから、まづ今回の成功を報じ、東京にて求職の希望を書きそへておきました。

この時ほど私が得意であつた事は、今までにはありません。しかし心竊かに自分の無力な事を知つてゐるから、他の讚辭には恥ぢながら、何だか嬉しくてたまりませんでした。それもその筈です、思ひがけぬ舊知から、成功を祝つてくれる手紙が、日々引もきらぬ様だつたからです。中には京都の書肆が發行の約束などを持ちかけて來ました。うれしい心持に十月一月はすきてしまひました。

スグコイ

十一月の七日だつたかと思ひます、「スグコイヒグチコンドウ」といふ電報がまひこみました。二人の子

の父だとはいつても、まだ二十七歳の壯年、血が沸きかへりました。「イタタノム」と返電しておいて、「長男が尋四卒業の日には迎へに来る。それまでは何としてでもはぐくんでおいてくれよ。」と妻にはかつて同意を得ました。すぐに中島校長に所志を語ると、「よし、行け。」といふ。恩給年限が七年あるとかで、右坐骨神経痛といふ患者以外に診断のつかぬ病名を附せられて、——校長の同意——表面をつくるつて十七日の未明に、京街道を京都へむかひました。

弱い男

町はづれの土師川橋の上で、提灯をつらりとならべた教へ兒や、我が子や、友人・縁者に別をつけた時は、泣けて／＼しうがありませんでした。三里いつた生野で、やう／＼朝飯時、京都に二泊して東京にもかひました。

東の風

馬場——今の天津驛——から東は始めての旅です。見るものがすべて新しいだけ、心細さは次第に高まつて來ます。濱松の親類にやどつて、かつ／＼梁木の中程まで來た感じ、たよりなさが胸に一ぱいでした。不安ですけれども、まはれ右をするのは、さらに不安でした。ともかくも新橋についてと東へむかひました。秀麗な富士の姿を見て、箱根をこして、關東の風に吹かれると、筋骨に緊張味を感じました。新橋につくと車を驅つて近藤君の湯島切通の下宿屋に落着きました。近藤君は神田錦華小學校の訓導でした。

樋口先生

話は脱線してしまひましたが、こゝに樋口勘次郎先生を御紹介申しあげます。先生は信州諏訪の人、明治の三十年代では、教育思想に於て、我が國第一の新人でした。高等師範學校附屬小學校にはいつて自ら兒童を教授し、自發活動による教授法を創始して、天下を驚かせた方です。金港堂のために教科書の編纂に着手し、十分まとまらないで洋行なさいました。文部省留學生として、パリにいらつしやいましたが、とかく世

自發活動の
教授

評面白からず、御歸朝後は官邊の壓迫が強くて、つひに野に下つて、晩年を不遇に終られました。私は今も先生を思ふごとに、偉人のかうした終を告げるのは、その偉大なためであると思つてゐます。

私も自發活動の教授がすきで、先生を遠く仰いでゐましたが、着京の翌朝湯島のお宅にうかゞつて、少時間語る機會を得ました。忘れもしない、八疊の一間に對座して、我は二十七、先生は二十九。「宜しく願ひます。」と初對面の挨拶をすると、先生は愉快げに笑つて、「君、何しに來たか。」と。きはどい所で一本とられました。眞直にいへば、自分が電報をうつて呼んだ者に、「何しに來たか。」はひどい。しかしこれは偉人の慣用手段です。これが人物試験です。私は面喰ひながら、「先生の自發活動の御教授が拜見したくて。」といひました。先生は大笑、その日から附屬小學校に伴はれて、三部——單級——の教員として紹介せられ、朝倉政行先生に隸屬することになりました。所が幸か不幸か、天田郡の右坐骨神経痛に文句がついて、

上をなみする不屈者とあつて、處分するといふことになりました。「これなら言分あるまい。」と、辭表をなげつけて知らぬ顔。それやこれやで、高師では年の内に發令になりませんでした。樋口先生の助手格で擬戦の一方の大將になつたり、採點表の記入をしたり、傍教授を參觀すること一ヶ月。多少は自得する所もありました。その冬先生が信州上田に出講せらるゝのに尾して、講演を書き集めたのが、かの統合主義新教授法で、書肆同文館の出世出版だといはれた書です。私も随分と古い者です。

單級教室の
准教員

その頃の三部はお茶の水の聖堂の中になりました。尋常科八十人が、朝倉さんと私、高等科が四十人許、それは藤原覺因君の擔當でした。それが三十二年ですから、故佐々木吉三郎先生、乙竹岩造先生、樋口長市先生がまだ教生の頃でした。私は資格が尋常本科正教員。准教員が適任です。准教員の仕事は、教授前に小

黒板の準備をしたり、成績簿や身體検査の統計などを作る事でした。二月・三月となれて見ると、准教員がうまくまはらないと、正教員が思ふ様に動けないといふ事實を發見しました。そこで正教員は家長、准教員は主婦といったやうな見地から、正教員は教授をたてに見るもの、准教員は教授を横に見るもの、相まつてその効果を高むるものだといふ研究報告を主事に出しました。

私の高師准教員の生活一年半は夢と過ぎて、樋口先生留學の日は迫りました。先生の事業、教科書の編纂に多少關係したので、先生の留學三年間に、自分も多少修養しなければならぬと、國學院入學を思ひたちました。學資は先生の手で作つておくといはれたのが、御出發後にかかりと當がはづれました。學校にはいつたが、學資がつまぬといふ悲況に陥つて、私は筆耕をはじめました。この時です、棚橋先生の理科書の教師用を書いたのも、佐々木先生のお話をうかゞつて「小學校に於ける今後の國語教授」を書いたのも。

郷里の友人から金を借りたり、其不足分を本屋からもらつたりして、國學院の一年はかつ／＼終りました。が、あと二年この苦をつづけることは、得策でないかと考へて、早速兵庫縣の知人に縋つて國學院の撰科一年修業といふを賣物に、賣店を出しました。國學院の一年間は書物の名を多くおぼえた位、それを賣物に田舎をしようといふのだから、づう／＼しさの程が知れません。しかし在學中に接した一流の國學者の學習態度には心から敬服しました。それは今に至るまで私には尊いものです。

その頃の初等教育界の大立物は、故佐々木吉三郎先生、富永岩太郎君たちでした。所謂參觀人が酔つてしまふ教授で巧妙は巧妙ですが、これに教材自身が要求する所を加味したら、眞に落着いた教授が出来るだらうと考へました。准教員と國學院を通じての三年は、東京を理解した事と、國語研究の方面を知つたこと

姫路中學校
の教諭心得

姫路の満三
年と一日

と、國語教授の缺陷を材料の上に見たこと位でした。

拾つて下さる方があつて、姫路中學校に教諭心得といふ名義で勤めることになりました。俸給は三十圓、校長は今の體操界の重鎮永井道明先生でした。資格はなし、力はなしと來ては、教諭心得もあさましいものです。しかし知らないことを知つた顔して通らなければならぬ境涯も亦決して悪いものではありません。これに處する道は二つです。岸然自大を装うて、生徒をしてその壘を摩せしめないか、胃をぬいで、極々ザツクバランにいくかです。前者にしたがへば、生徒は遠卷にまいて峻烈な冷笑をあびせ、後者にしたがへば親しい心で、諧謔様の冷笑を送るのです。要するに有るべきものがないのですから、落ちる所は冷笑ですが、人は性格で、前者にがんばるもあり、後者に安んずるもあります。私は後者で押し通しましたが、いつか「駝鳥」といふ仇名を辱くしました。蓋し間が抜けてゐるとの義でせう。

姫路に満三年と一日ゐました。一學年三組の十五時間でしたが、一時間分の國語漢文の下讀に、脂汗を流したものでした。周防灘が鯉洋と書いてあるのに泣きました。文法と來てはさらに苦しうございました。作文はたゞ彼より一日の長であるといふ腹がありました。私は姫路の三年を國語教授に關する私の一轉機として、常に感謝してゐます。いかに無力な者でも、無力と知つて三年努力すると、何等かの光明を認めるものです。國學院の一年につぐに姫路の三年をもつてしたのは、國學院を卒業したよりも、有效だつたと信じてゐます。國文の形式方面について、多少目が開いたやうでした。

同僚に足立謙三君といふ小學校長出の教諭心得がゐりました。私とは意氣投合して、一方文部の受檢のためや、一方斯道を思ふためなどで、集つては話あつたり、研究したりしました。ある年足立君が東京の夏季

講習に出て、歸つて私に傳習してくれたのは、垣内先生の日本文学史と横地先生の日本文法とでした。文章を職能によつて書きわけて、その上から正確な意義をつかまうとする試みでした。國文の數學的研究とでもいつた氣分で、私は熱中したものでした。始は中々むづかしかつたけれども、少しなれるとわけなく出来ることでした。文の意義のむづかしい所を、これでむかへば快刀亂麻をたつ思でした。しかし文の味が出て來ないので、修辭學もぞいてみました。しかし修辭學は文法程數學的でないので、あまり強くもうちこまなかつたのでした。

「長男が尋常科を卒業する日。」と妻に誓つたことはあます所二年ばかりになりました。無資格でも、力がなくても、この場合月給があげてほしいのです。でなくては、二子と妻を引取ることが出来ません。笑つてはいけません、六年と限つた四年が既に過去つた今日、而も一切失敗の跡ばかりである今日、時には寂しい感のおこらないでもありませんでした。しかし月給は家事の都合で上るものではありません。この際資格をあげるが上分別と、三年目に豫備試験をうけて合格しました。けれども本試験には自信がありません。私は蓄積本能が貧弱で、本の數が多く読んでありませんから。

自信のないことに、手を拱いてゐる事は私には到底出来ません。當面の問題解決に、別の途を選ばなければなりません。別の途とは再び東京にはいるといふことでした。東京は金の落ちてゐる都です。目さへあいぬれば、努力によつてこれを拾ふことは自由です。かつ姫路にゐては、教諭心得といふ體面がありますが、東京はある場合以外人間は平等です。したがつて働くによい所、貧しき生活をするによい所です。私がこゝに目をつけたのが窮餘の一策でした。

中等學校の
教員試験當面の問題
解決の途

その頃富永君の大教授法が同文館から出ました。二冊本で大に行はれました。その國語教授の部を讀んで、自分の腕をさすつて見ました。富永君は天稟に任せて各教科に手をかけたが、自分は國語のたゞ一科を突いてみよう。或は君に尾することが出来るかもしれない。これをこれ自惚といふのですが、人間にはこれがなくては生きてゐられません。

もとの丹波福知山の校長中島錦三郎君が、さきに越後の高田師範に轉じ、その頃は東京高等師範の附屬小學校に勤めてゐました。私は事情をうちあけて、「東京に引張つて呉れ。」とたのみました。すると小泉主事にしつかりと頼んでくれたと見えて「取つてやらう。」と有難い仰。三十七年の九月休暇後まだ幾日もたない時、中島君から電報が來ました。「ホウキウニ〇クルカ」私はたゞちに「イクヨキニタノム」と返電して、永井校長にその旨を申し出ました。校長は「よく考へたがよからう。」とのことでしたが「考へる餘地はありません。」ときつぱり斷つて、東京に走りましました。

足立君に事情を語ると、「君、考へたまへ。二〇に減じては、子供の始末がつくまい。」と自分の事としていろ／＼戒めてくれました。「東京の金は僕は拾ふ道を知つてゐる。滿三年ゐても一回も増俸にならないやうな所はいやだ。」といつたら、「そこもある。」と足立君は同情してくれました。

その時姫路中學を去つた者が二人でした。一は歴史の高屋君で一は國語の私でした。高屋君は召集されて、出征するのでした。二人の告別式で、私はかういひました。「私は姫路中學に奉職して丁度三年と一日になります。今度もとゐた東京高等師範學校附屬小學校の筆生として轉じます。永々ありがたうございました。高屋先生は日露の戦場に赴かれ、私は東京の生活戦場に赴くのです。高屋先生はもし戦死なさつても、

再び東京高
師附屬小學
校へ

姫路の告別

赤い血が出ませうが、私の戦死する日は、流れ出る血はありません。諸君も馴染甲斐に、私の末路を注意して見てゐて下さい。」といつて分れました。私は可なり悲痛な感じて、この告別を致しました。十圓の減俸が胸にこたへてゐたものと見えます。

小泉先生の
試験

小泉先生は私の仕へた主事の中で、一番名主事でした。人の命をたしかに預る方でした。そのかはりよく叱る主事でした。中島君が私のために、「現俸のまゝで取つてやつて下さい。」と願つてくれた時、小泉先生は「芦田はこゝを出る時が二十圓だ。それをあげて取ることはしない。来ないでもよい。」とおつしやつたさうです。これは小泉先生の私を試験なさる問題でした。偉人は退引ならぬ所で、腹を据えなければ、ものいはれない問題を出すものです。この第一問には幸にパスしました。

後藤さんの
筆生

姫路は好きな所ですが、事をなす場所ではありません。東京へ復歸するのは、心から嬉しうございました。東京について、おそろしく小泉主事の前へあいさつに出ると、主事は「よく来たね。」とお笑ひになりました。さうして「後藤君の命をうけて、主として事務をとるのだ。生意氣いつてはいけない。」と約五年前の私を御承知の主事は、急所をしつかり押へられました。

安全地帯

倍臣といふ格で、後藤さんに仕へることになりましたが、後藤さんと私とは、私が朝倉さんの准教員になつた時から知己で、私としては安全地帯にはいつた感でした。書きものといつても、一日に数枚を出ない程度。時には「後藤さんこれでは罫紙一枚の筆料が、三十錢以上につきますよ。」といつて、からかつたものでした。

受験の断念

そのうちに文部の本試験に出て、筆答はとほりましたが、口答は夜のおとと不の字の用法で見事失敗しました。この時柄にもない事をこひねがへばこそ、落第のうき目も見なければならぬが、得ようとする心を去れば、晏如として後藤君の下に安き日が送られると決心して、中等教員の受験を断念しました。友人の中には「豫備試験の有効期中に、本試験をとつてしまへ。」とすゝめてくれる者もありましたが、右に走らうとすれば、左の生活がおびやかされ、左の生活を見つめると、右の受験に手が伸びないといふ有様ですから、つひに断念しました。今となつては、取つたが幸か、取らなかつたが幸か、にはかに判定する事も出来ません。

長男の卒業

長男が尋常科を卒業する日が来ました。私は迎に行く準備をしました。讀者諸君、笑つてはいけません。俸給は二十圓、借りておいた家は敷金なしの五圓五十錢。三間を合して疊が十二疊。堀田君の残しておいてくれたおへつが一つ、さを竹が二三本、今だつたら到底出来ない藝當です。それで平氣で迎へにいつて、妻子をして十二疊の中に花のお江戸を見せようといふのです。解氷期に深淵の氷上に行く様な藝當です。勿論萬全の道ではありません。けれども萬止むを得ざる際の十全の道です。これも處世の一秘法です。

親子四人の
東京生活

親子四人の東京生活は開始されました。一切の非望を除却して、生きること——物的に——だけを見つめた時は、存外天地は朗かなものでした。貧しい者にも楽しい境涯は恵まれてゐます。ポイントのうち所が違ふと、そこが餓鬼道であり、修羅道でありますが、それさへ心得てゐれば、貧もすてたものではありません。

涙のある主
事

四月八日學校に出ると、小泉主事が「子供を連れて来たか。」とおつしやいました。「はい。」と答へると、「兄は高等科だね、弟は。」とおつしやるから、「尋常一年を修了して来たのです。」といふと、すぐにその學級の受持指導を呼んで、「芦田の子をどこかに入れてやれ、缺員がなくても。」と鶴の一聲に、二子の學籍が定まりました。願ひ出ようとしてゐる矢先に、この取扱を受けては、親の身としてかすならぬ努力をさ

けて、この恩に報いようとは、腹の底から湧いて出る感謝と覺悟です。凡と非凡の差は、頼んでからと、頼まない前と位のちがひでせう。

緊張した生活

父は夜を日について働いて、生活の保障を得ようとし、二子は着なれない洋服を着て、日々嬉々として通學し、母も朝早くから夜おそくまで働いて、安き生活へと努めてゐます。私は私といふものを別として、かうした家庭を考へる時、之が恵まれないものといはれませうか、いかにその収入が少くとも。私はこの恵まれた、而も苦しい生活に、安心なやうな、不安なやうな日を送りました。

補缺の教員

私の身の上に妙なことがふりかゝつて來ました。私は後藤さんの筆生として、腰巾着たるものが許されなくなりしました。それは高等一二年——今の尋五六——の受持堀田君が、名古屋に轉勤して、後任萬福君の着任が後れたといふ事件が出來わいたからです。さしづめの手あきは私です。「補缺にいつてをれ。」と主事の嚴命です。そこで筆生の私は、ある時間だけ訓導の假面をかぶることになりました。

郡視學講習會

そこへまた一事件持ち上りました。それは文部省の第一回郡視學講習會——會期三ヶ月——が開かれて、毎週二日實地授業研究のために、附屬小學に來ることになりました。複式高一二といふ目ぬきの學級で、訓導缺員といふために、參觀させない譯にはいきません。十三しかない學級に、多數の郡視學を引うけて、教授の指導をするのです。各學科・各年級・單式・複式に通じてといふことになると、高一二にはどうしても七八回割當てなければなりません。そこに假面訓導として私がゐるのでした。

一學期だけの擔任

ある朝小泉主事が私を呼んで、「芦田、一學期だけ高等一二年を受持つのだ。二學期に訓導が來るから、考へ違ひをしては相ならぬ。」と嚴しい申し渡しがあつて、有期訓導といふ姿になりました。修身・讀方・

初めての講師

綴方・地理・歴史・理科・體操の七科の實地授業をして、佐々木・柳橋兩先生の批評材料を提供しました。最初の修身の時、佐々木先生が一時間、敢へて仰ぎ見ることなく觀てゐて下さいました。青いまづいものであつた事は、人にきかなくても、私がよく知つてゐます。讀み方や綴り方は、比較的らくにやりましたが、理科・地理・歴史、ことに體操と來ては、面喰ひました。しかし物を知らぬものは、知つて遲疑する者よりは、無邪氣で目安い所があります。

一學期が終らうとする時小泉先生が私を呼んで、「芦田、國語教授の講師になる自信があるか。」ときかれました。私は「あります。」と無雜作に答へました。「それでは香川縣の白鳥に行け、郡視學とよく相談して。」との事でした。それからは一生涯命で準備しましたが、思想にはかに發達するものでもなく、まともなものでもありません。そこで高一二、一學期間に經驗したことを、如實に語ることにしました。その講習の相棒は、兒童心理學の松本孝次郎さんで、とてもうまいものだ、毎時間傾聴致しました。これが私が講師としての初舞臺でした。

履歷書を出せ

一學期末に主事が「履歷書を出せ。」とおつしやいました。何の爲かは知らず、差出しておきますと、ある日文部省から電話が私にかゝつて來ました。主事が訓導任官の申請をして下さつたのでせう。「あなたは芦田さんですか。」「はい。」「履歷書が出てゐますがあなたの學歴は。」「それに書いてあるだけです。」「といふと。」「小學校卒業。」「それから。」「國學院理科一年修了。」「それだけですか。」「はい。學問は學校にはいゝらなくても出來ます。」「アハ……。」それで電話がきました。訓導の任官はアハ、でおちやんかと思つてゐましたが、旅行から歸つて見たら、任官されてゐました。私はこれを見た時、もう働くといふことがある

花壇の作業

ばかりだと考へました。

訓導にはなりませんが、有期擔任です。二學期の高一二はどうなることかと、興味をもつて見てみると、後れて着任した萬福君は、高等三四にまはつて、堀田君の後任はまだ來ません。そこで心得ちがひのないやうに、もう一學期高一二をうけ持つことになりました。この高一二と有期擔任の私とを、しつくり結びつけてくれたものは、花壇の作業でした。音楽學校分教場裏に、あれはた花壇がありました。毎日兒童とこれをほりかへして、整理しました。西ヶ原へ養蠶の見學にいつた時、もらつて來た赤茄子の苗などを植ゑました。蜜蜂が分封して、音楽學校の小使室にはいりこんだ時、子供と共にあやまりにいつた事がありました。今一つの分封を豫期して、あらかじめ箱を作つておいて、うまく捕へた事がありました。その花壇の作物を、二學期に共に眺めることになつたのですから、子供も喜び、私もむやみにうれしうございました。

綴り方から
読み方へ

高等師範の訓導は、すべての教科に堪能なことが望ましい事ですが、止むを得ずんば、一科に没頭して、趣味を高め、その研究の過程を他科にうつして、これをつりあげる工夫も、また一案です。私は片輪に育つたものですから、後者に従ふより外に道がありませんでした。そこで當時最も沈滞してゐた綴り方から掘つてはいつて、読み方に達しようと思つてみました。一學期にも範文を寫させたり、課題して綴らせたりしましたが、どうも綴り方は綴ることが本體で、その一作業の上に自ら作文法を發見し、自ら推敲を工夫して進むものだといふことを痛感しました。そこで研究の第一着手としては、綴るといふ作業を第一義的にしなければならぬと考へてみました。

隨意選題

第二學期に入つて、思ひきつて隨意に選題して書くことを命じました。すると高二の前島といふ兒は、「愛

鼠死す」と題して、「自分が白鼠を買つて愛してゐたこと、ある朝種を與へるのを忘れて、學校に來たこと、心にかゝつてはゐたが、すてておいたこと、歸へつて見ると、箱のすみに白鼠が小さくなつて死んでゐたこと、自分が色々考へて申譯がないやうに思つたこと、庭に穴をほつて、鼠のお墓を作つたこと、たべのこりの種をすつかりそのお墓にまいてやつたら、二三日たつて、小さい稗まきの山が出來たこと」をそれは／＼美しい文で書きました。また高二の岩瀬といふ兒が「偽地震」といふ文を書きました。「この頃は小さい地震が度々あります。誰がいひふらしたのか、今日・明日に家のたふれるやうな大地震があるといふので、何處でもその噂でもちきつてゐました。私のうちの女中は、梅が谷のやうによく太つてゐます。昨夜その女中が、二階へふとんをしきに上ると、にはかに家がみしり／＼といつて、ぐらぐらと動き出しました。さうでなくても、おちけのついてゐる店の小僧や私は、土間に飛下りたり、机のしたにもぐつたりして、大さわぎをしました。この時二階で笑ふこゑがしました。いつもならば一番先にかけて出す梅が谷が、あんまりおちついてゐるので、これはをかしいと土間から上り、机の下から出て、よく／＼きいてみると、梅が谷が二階で力ぎりゆすつたのだとわかりました。「なあんだ。」と皆あいた口がふさがりませんでした。この時から梅が谷を「偽地震」といふやうになりました。」これは私の記憶から書いたものですが、この二文を見た時、私は到底この兒等に及ばないと思ひました。「子供には子供の天地がある。課題などによるよりも、各自の持つてゐるその生活に、書くべき事を求めて、書かせるがよい。綴るといふ作業にさへ狂ひがなければ、指導や處理はそこに自然に湧いて來る。教師は自然のその端緒を見つけて、指導し、處理して行くがよい。」とやゝ隨意選題にまよつた考を持つやうになりました。

児童中心の
綴り方

五年以前京都で當選した作文科教授方案は、全く教師中心主義で、形式練習から課題に、自作を作文の到達点において考へました。高師の教壇にたつた今日、どうしても教師中心では児童の自發活動による文章が出来ないと見て、児童を中心とする綴り方に乗換へたのです。児童も障物物競走から、徒歩の堂々たる競走に放たれたやうに、力量本位の天地に力きり驅けるうれしさを感じたやうでした。これは今から足かけ二十一年前のことです。

随選の前身

随選といふ方法は私が見つけたものですが、この思想は樋口先生の自由發表主義の作文教授をうけついでものです。しかし自由發表主義が物語を材料として、一ヶ月もロビンソンクルーソーの記述が続いたといふ奇態を呈したのに鑑みて、日常生活を重んじたといふのがちがつてゐる所です。しかし自由發表主義の作文教授が、我が初等教育界に葬られた事實を、目の前に見た私は、決して輕學を致しません。十分の確信を得なければ、うっかり發表しては、樋口先生の名まできずつける事になると、深く／＼秘し慎んでゐました。

しかし忍ぶれど色に出にけり、參觀人が児童の成績に驚いたり、私がより甚だしく驚いたりする事が、いつとなく部長にきこえて、質問された事などありました。そこで三十九年の第二回初等教育研究會の冬季講習會で、綴り方教授法を三時間發表しました。今から思へば、粗雑きはまるもので隨選の一角をつかんでゐた位のことでしたが、多少世人の注意をひいたやうです。この頃から綴り方は大潮時に針路をむけたやうでした。この氣運の先驅をなしたのは、廣島高師附屬小學校の訓導、藤井・新國・久芳・岩田の四氏によつて著はされた綴方教授法精義でした。

高一二の第
三學期

話はもとに歸ります。高一二の第二學期は、隨選の端緒を見つけて、無事にをはりました。次は第三學期

です。私は誰かに引繼ぐことと思つてゐました。所が第三學期は教生練習期で、新任の訓導では、勝手がわからないといふ事情があります。それですから今度は主事の申渡しなしに、そのまゝ高一二に居居る事になりました。その時の國語の教生は、中野明一郎さんと立川伊三郎さんでしたが、治にゐて亂を好む訓導と、鼻柱の強い教生との出會ですから、議論に花がさいて、教室の暗くなつた事も、幾回だつたか知れません。三學期も事なくすんで、高一二の成績表には、たしか、擔任訓導として私の名を署したかと思ひます。私はこの怪しき一年間を追懐して、人は自ら動くものか、他に動かされるものかを疑ひます。自分の動かうとするやうに、他から動かされるのを運がよいといひ、自分が動かうとするのに反して、他から動かされるのを運が悪いといひます。順に來ても、逆に來ても、自ら動くといふことが人生の眞髓だと、今も考へてゐます。

尋常一學年

三十九年度には尋常一年生三十名の一組を渡されて、いよ／＼國語教授研究の出なほしを始めることになりました。私の新天地はこれから開けて來たかと思ひます。しかし後藤さんの筆生たることは、依然としてかはりませんでした。

文の分解

こゝに私が工夫し、發表いたしましたことで、今思つても顔のあつくなることは、一學年の教材が簡單なものに乗じて、發問を文法的に進めていつたことです。それはかうした事からです。當時の初學年の國語教授は、一般に内容教授と稱して、分りきつたやうな内容に關する問答を、二十分もつゞけるのです。さうして文字を教へ、その讀み方、書き方を練習する時は、児童のやゝつかれた頃なのです。これは本末顛倒である。内容はたゞ數分既知の事實を整理するにとゞめて、文字の教授、その練習に重きをおかなければなら

いと考へたのです。それですから教材は必ず板書し、これと同時に児童は簿書し、それを讀合せることによつて、假名遣に注意を與へ、次に單文ならば、語の職能に、複文・合文・混文ならば、節の關係を明かにするやうに取扱ひました。たとへば

ミノ ガ アリマス。
カサ ガ アリマス。

といふ場合に、アリマスといふに——アリマス——枠をかけて、何かと問ふのです。するとミノとかカサとか答へますから、——ミノ——カサ——と枠をかけるのです。これは文は職能を異にする語から出來てをるところを知らせ、さらに應用としては、主語の所をさしかへればよいといふやうに考へてゐたのです。

オヤドリ ガ ココココト ヨビマシタ

ビヨコ ガ ビヨビヨト ナイテ キマシタ

又

ヨイ オヂイサン ハ コブヲトラレテ ヨロコビマシタ

ワルイ オヂイサン ハ コブヲツケラレテ コマリマシタ

又

ワタクシ ハ マイアサハヤク メヲ サマシマス

日ノ デナイウチニ ナンベンモ ウタヲ ウタヒマス (主語省略)

ワタクシノウタヲキクト 人 ガ ダンダン オキテキマス

文章の數學的取扱とでもいつたものです。これが兒童の用ひなれてゐる國語だからよろしいが、もし外國語を學ぶ場合に、これが何を意味するかを考へてみると、價値のある仕事でない事は明瞭です。しかし私は新しい工夫を見つけた喜にもえて、中々に得意でした。内心では文の味にふれない寂しさを感じてゐました。ことにこの方法から出發した應用に至つては、不安の甚だしいものを感じてゐました。

文中の節の關係を明かにすることは、文章の取扱には有效の場合もあります。形式方面の取扱として、これに固執することさへなければ、今も有効な方法だと思つてゐます。教師の教授準備としては、教材を文法的に解剖する位の親切さは、なくてはならないことと存じます。

四十年度も一年生の擔任でした。四十一年度は一二年の複式でした。四十二年度も一二年の複式でした。四年間低學年にをりましたから、私は自ら一年博士だと號してゐました。ある時嘉納先生のお嬢様の神經衰弱を發見して、殊勳を奏した事がありました。入學後間もなき頃お嬢さんの顔色がすぐれず、時々涙ぐまれますので、「病名は分りませんが、健康兒でない事はたしかです。お醫者さんに見せて下さい。」と家庭に通

椿の實

しました。果して強度の神經衰弱で、久しくおやすみになりました。四年間八九歳の兒童を毎日見通してゐると、目がよく利くやうになります。

話の脱線は御免を蒙りまして、一挿話を試みます。この四十一年度に入學した一年生は昨年大學を出たか、今年出たかで、年は二十五六といふ所です。昨年の一學級會を私の家で開きましたが、會すべきもの十五六人のうち、十一人集りました。白頭の私を真中に、懷舊談に夜をふかしました。「先生は怒らない方とおもつてゐたら、おそろしいことがあつたんだよ。」と一人がいひ出しました。「うん、あつた。」「椿の實の時だらう。」「あの時は全級皆ふるへたよ。」といふ。事件はかうです。彼等が六年の時、今も高師の占春園の側にある椿の木に上つて、實をとつてゐました。夫が揃ひも揃つて私の學級でした。それを故佐々木主事に見出されて、子供等はしたゝか叱られました。その投足が主事から私に來ました。「芦田君、學級をもつと引締めたまへ。」と。そこでその投足は勢兒童に行かざるを得ません。まづ主事に沒收された椿の實を教室のテーブルに堆く積みあげておきました。翌朝朝會を終へて、兒童は教室にはいりませんでした。テーブルの椿の實を見て、まづぎよつとしたさうです。苦りきつた私は「世話がひのないやつだ。」とやつたらしい。「役に立つものをでも取ることか、こんなものをとつて何にするんだ。」「主事先生から先生はお小言をくつた。先生のこと考へないで、いたづらするやつはたのもしくない。」ときれぐにやつたらしい。——學級會で大きな兒童の話す話のきれぐを綜合して——みんなが今更のやうに私の顔を見て、稚い表情をしますから、私は「月給の廉い間は先生は怒るよ。上等の先生ほど怒らないものだ。」といひますと、皆笑ひくづれました。この會があつて後、その兒の母から手紙があつて、「先生、子供等の會ばかりではなく、どうぞ

綴り方に没頭

友納友次郎君

私は因果な
たち

この次には、兒等と共に私どもも召集して下さい。」とありました。私は從七位をもらつた時より、嬉しうございました。この金でははれない満足は、教育者にのみ許されたものやうです。

四十三年は尋三四の複式、四十四年度もまた尋三四の複式でした。この間には讀み方にも注意は怠りませんでした。主として綴り方の研究に力をそゝいでゐました。注いだと發動的にいふよりも、注がせられたと受動的にいふ方が至當です。日々の參觀人からうける質問だけでも、きりぬけるのが大抵ちやありませんでした。相手が苦勞人ですから、ごまかしは通るものではありません。分らない事は胃をぬぐより仕方ありませんでした。しかし人間の通有性として、胃はぬぎたくないものです、ことに年の若いうちは。

私はしつかり腹を据ゑなければならぬ場合に逢着しました。それは私の綴り方の立言に對して、反對の立言を試みた強敵手、友納友次郎君があらはれたからです。友納君は私にとつては大なる恩人です。私より一目つよい、頗る小手の利いた人です。君は福岡縣の人玄洋社氣分の男らしい男です。分りのよいさつぱりした、蟲のすく男です。撃つも撃たるゝも戦場の慣ひさと呵々大笑して、ビールの滿を引く底の男です。私はこの強敵の現はれたことを常に感謝してゐます。私を大成させたのは友納君です。蓋し友納君を大成させたのは私だらうと思ひます。感謝は互にしなければならぬ仲だと思ひます。

私は因果なたちで、どうしても人の言葉の上に、自分の説を立てて、安んずることが出来ません。自分に經驗のあることをほかの學說中に見出すと、その言によつて我に光をそへるうれしさを感じますが、私にその經驗のない場合には、他の學說は私以上の世界だとあきらめてしまふのです。私の友納君對策は、たゞこの一手でむかつたのです。友納君の攻撃によつて、二進も三進も、いかなくなると、私は教壇に逃げこんだ

ものです。さうして半年もたつと、大い光が見えて來ました。それですからしつべし返しに敵を壓迫して、我も人も快哉を叫ぶやうなことは一度も出來ませんでした。事實で勝つたやうな安心は、いつも持つてゐました。友納君はいつでも得な役廻りにまはつたものでした。

大正八年七月友納君が「綴方教授の思潮と批判」といふ書をあらはして、私を自由選題者と命名し、鐵槌を頭上に下しました。ぐしやんとつぶれる筈の私が、その著によつて自己の弱點を知り、反省研究して、一步完成に近づいた喜を得ました。「打つ人も打たるゝ人ももろともに如露亦如電應作如是觀。」といふ良寛上人の即吟のやうな感得をえました。九年には小倉の立合講演となりました。参加せぬといへば、怯に近い、行くとしては興行師のやうだし、とつおひつ思案の末、出かけることにしました。さうして自分の言ふことだけ思ふ存分にいつて歸つて來ました。少しも立會らしい気分はなく、何とかいふうまい料理を食はすうちで、大いに飲んで、笑つて來ました。最後に友納君に對する私の心持を要約してみると、私は弱いけれども、つぶれないといふ自信はいつも持つてゐました。

長男が中學四年になつて、次男が中學の一年にはいりました。いよく生活戦がはげしくなつて來ました。力の限働いても、年末には必ずマイナスでした。出る杭はうたれ易く、——勿論私が不遜であつたことはいふまでもありませんが——内憂外患に頭をいためました。その頃耽讀してゐた漱石の猫の巻頭に、私がいたづら書をしてゐるのがその書と調和して、面白いと思ひます。「いけなきや車でもひくさ。」と。主事にも叱られた時の解決はいつもこれでした。これは私が貧しい家に育つた一徳で、苦しい境涯にも可なり趣味を持つてゐるからです。

弱いけれど
もつぶれな

いけなきや
車でもひく
さ

静座

四十二を初老といふ義が、心身の上に明かに見えて來ました。三十八九でこんな調子ならば、四十二には何等の厄がなくても、老込んだ氣分になるだらうと思ひました。所が、この時岡田先生の坐下に參じて、靜座をはじめました。四月日には體重も増し、食ひ物もかはり、思想も一變しました。ある時岡田先生が「寂しくはありませんか。」といはれました。私が「今までは、讀んだ本や、經驗がたよりになると思つてゐましたが、今ではそれが脱落して、自分の貧弱さをさとりませう。」といひますと、「これからあなたは眞の發達をとげるのです。道を見る目が開くのです。」といつて下さいました。その頃から子供の思想が純眞な尊いものに見えて來ました。自分には教育の意義がかはつて來ました。さうして若返るのを覺えました。今年をとるといふことを、少しも苦勞にすべき事とは思ひません。日々新しい境涯に歩を轉じていくのです。日にく育つて行くのです。それがいつまでも若く生きる道だと信じてゐます。

その頃大日本圖書株式會社に榊元熊藏君といふ快男兒がゐりました。鳥取師範を出て、東京府の女子師範に轉じ、次に圖書會社にはいりました。他日出版界にその手をのばさうといふ野心でした。私とは同じ山陰の産である爲か、妙に意氣が投合して、助けたり、助けられたりしてゐました。ある日榊元君はいはく、「先生の原稿をもらふことが出来るならば、私は獨立して書店を開業します。同意を得なければ、到底見込がありません。」と。私はその意氣に動かされました。「よろしい、書きませう。」と「綴り方教授」を書きあげました。今から思ふと、甚だ幼稚な著書ですが、いたく世の歡迎をうけて、版を重ねる十七、部數壹萬四千を突破して、つひに震災にあひました。かの著は榊元君の出版業者としての第一歩を固めました。そのおかげで、私も生活の苦戦から徐々に逃れて行きました。榊元君今は亡し。その追懷を共にする者がありません。

榊元熊藏君

綴り方教授

綴り方教授は大正二年の發行かと思ひます。靜座の道がやう／＼手に入つた位の所で、教育の根本義に肉薄を試みようといふまでには達してゐません。あの深い綴り方をこの浅い所で説いてゐることは、誠に罪の深いことと存じますが、何分にも今を去る十三年以前、文は人なりと御寛恕をこふ外はありません。

私の綴り方の研究が多少進んで、文は眞剣なもの、技巧を弄するはむしろ罪惡であると感じて來ると、讀本の文章もまたこの目で見なければならぬものと感じて來ました。そこでその頃の讀み方教授が、目的指示から、文字・語句の摘書にはいつて、通讀・意義に進むやうな微温的な仕事の運び方であるのを見ると、それで文を取扱つたといふには、あまりにお粗末だと氣がついて來ました。今こそ譯もなくかうは申しますが、その當時何とはなしに起つて來る不滿を、わづかに／＼切開いて行つたので、その苦しい中の樂しさは、また格別なものでありました。

最初に通讀をおいて、すぐに大意——一回の通讀に對するもの。豫習してゐればなほよし。——をきくこと、これを自分が工夫した時など閉せる狹霧を吹拂つたやうな感でした。文字を音聲に移すことを、讀むと心得る誤解などは、この一取扱で、積弊を一洗することが出來ます。したがつて堅板に水を流すやうな無關心な讀み方は矯正されて、だん／＼力のこもつた、緩かな、我が物としての讀み方が起つて來ます。かういふ經驗をした私は、通讀の次に大意をきくことを力説しました。ある年熊本縣を旅行して、實地の教授を見るたびに、「大意をきくといふおさへがきかないから、學習に力がはいりません。」と到る所で評してまはりました。よほど共鳴して下さつたと見えて、その後その取扱が強度に行はれたものやうです。私の通過した跡を、故佐々木主事が見られて、お歸りになつた時の參觀報告に、「當校の訓導も、地方に出かけて、あま

讀み方教授の缺點を見る

最初の通讀につぐ大意

り極端な事を力説しないがよい。通讀の次にすぐ大意をきくなんて、あれは何か。何をきくのか。」と頗る不興を被りました。この頃になつて、通讀に次ぐに兒童の文に對する直觀をきくことは、可なり重要視されて來ました。否この事をぬいては、取扱が成立しないとまで考へられて來ました。

綴り方から出發して、讀み方にはいると、漢文學習の流から來た取扱とは、全くちがつた味の取扱が生れて來ます。これが眞の國語の取扱かと思ひます。私は朝鮮を去る時、「朝鮮に綴り方教授がめばえなかつたら、新國語讀本は動くものではない。」と申し残して來ました。綴り方の研究は讀み方研究の先驅をなすものかと思ひます。

精査深究の手段として、文法的の取扱、修辭的の取扱等を致しますが、これはそも／＼末の事で、想の上から、この文法・修辭法によつて生ずる所以、またその妥當なことを悟らせるのが根本です。綴り方の教授からはいると、讀み方教授は外からする教授が、内からする教授にかはつていきます。

靜座五年、私の思想も内からする傾を持ち、綴り方教授の研究も次第にそちらに伸びていきました。その目で讀み方教授を見るとき、改良すべき多くのものを見出しました。誤讀指摘が無意義等いふよりも、罪惡だと感じたのもこの頃です。「讀むとは自己を讀むのだ。」と直覺的にいつて、自分だけ満足したのもこの時です。なほ研究の道中にさまよつてゐると思ひましたが、辨元君が「先生一冊書いて下さい。」と頼むがまゝに、「讀み方教授」をまとめる事にしました。それが「第一讀み方教授」で、この書を「第二」と命名する因縁がそこにあつたのです。「第一讀み方教授」は版を重ねる十六、一萬四千を賣盡さうとして、震災にあつてたふれました。

内からする教授

自己を讀む

柄にもない
立言

その頃女子高等師範學校教授であつた垣内先生が私の「讀み方教授」を御覽になつて、著者以上にお読み下さいました。私が「自己を讀む。」と申しましたのは、たゞさういふはなければ氣がすまなかつたので、別に思索の結果でも、研究の結果でもなかつたのです。自己とは何ぞ、讀むとは何ぞと攻められては、太刀打は叶はないのです。先生はそれらに明確な意見を持つて、おほめ下さるのですから、私としてのうしろめたさは中々心苦しいものでした。「柄にもない立言を試みなければよかつた。」と思ふことさへありました。

主語は何か

東京女高師の櫻蔭會で垣内先生にお目にかゝりました時、「自己を讀むの主語は何ですか。」ときかれて、ぐつとつまつた事がありました。これを完全文とするには、どうしても「自己が自己を讀む。」としなければなりません。その主格となる自己と、目的格となる自己とは當然ちがひます。どうしても讀む自己と、讀まるる自己とでなければなりません。讀まるるものは、自己の色彩の鮮明な思想・感情・理法です。いかへると、目的格におかれた自己は、それら一つにしていつたのです。いくら考へても、この邊までしか私としては考へることが出来ません。口あいて腸見らるゝ蛙の愚を、こゝにまねた次第です。

國語の力

朝鮮にゐました大正十一年五月のある日、垣内先生から御高著「國語の力」をいたゞきました。通讀していくうちに、解釋の力の條下、六「センテンスメソッド」から見た讀方の現状といふ所に、私が取扱つた「冬景色」が、實例として引用されてゐました。私が、漢文教授の方法を繼承した我が國語教授にあきたらないで、壇上で悶えたり、考へたりして到達した「冬景色」の教授が、垣内先生のお見出しにあづかつて、お役に立つたことは、たゞもうありがたいといふ外に言葉はありません。私も二度目に東京高師附屬小學校にはいつてから、足かけ十八年、こつ／＼壇上に働いた足形が、これによつて酬いられた譯です。

模倣はやめ
たい

それについても思ふのは、天下幾萬の小學教師中、多くのかくれたる研究者、努力者です。必ずしも海の彼方に一切のよるべき道を求めなくても、國語の教授などは特に我が國特有のものであらうと思ひますが、和製はとかく値が安いならひで、あさましいことです。文化の程度の甚だしく喰違つてゐた時代はともかくも、ある標準點まで進んだ今日では、他の模倣はやめたいと思ひます。よし内地の小學教師のすることに、系統なく、確固たる基礎がないと致しましたが、それはやがて系統だてられ、基礎づけられるはじめです。模倣は創作の道ではありません。維新以來何回模倣して、何回放棄した事でせう。もし我が國の明治・大正の教育史を通觀したら、外國にきつき上げられた學說や方法が、一三年我が國に弄ばれたものの幕場です。これによつて國民の有形無形の經濟上、どれほど大きな損失をしたか知れません。外來のものには無理があります。それを參照して内に芽ばえたものを生ひたゞせ、基礎づけ、系統だてる様にしたいと思ひます。教壇上の教師の反省を仰ぐと共に、學者の方々にも反省をお願いしたいのです。

中等學校の
入學試験

讀み方教授を書きましたのは尋三四・尋五六・高等科を各二年宛受持つた時の事でした。この間に私を苦しめたものは、中等學校の入學試験でした。今日の教育界に、最も非教育的なことで、教育者の最も苦しんでゐることといつたら、中等學校の入學試験でせう。私が小泉主事から一學期さきみに擔任を仰せつかつた高等一二年、——今の尋五六——その二年は推選生三名、受験入學生二名で、十五名の中その三分の一は附屬中學校に進み、他はそれ／＼の中學に進みました。私はこの時さすがは高等師範學校だ。教育的だと敬服しました。——姫路中學校入學試験の準備などに比較して——その後六七年がほどに、入學の競争が激甚を加へ、父兄の思想も、教師の思想も一變して來ました。中等學校入學率のよきはよき教育の結果で、よき教

育はよき教師の行ふ所であるとなつて來ました。そこで児童も入學試験に血眼になり、父兄も選舉競争のやうな態度になり、教師はなほさら眞劍勝負のやうな覺悟になりました。三者誰一人間違つた考ではありません。児童は己のために、父兄は我が子のために、教師はそのをしへ子のために、幸福なれといふのであるから、難すべき所はありませんが、さてその長い豫習中の學習態度のまづいこと、——すべて對他的の態度——非衛生的の生活、さうして野分過てのみじめさには、子も泣く、親も泣く、先生も泣く。泣いて歸らぬ事に泣く。さうして小さいながら、自暴自棄して變な生活をつゞけます。附屬中學入學試験後——三月十日前後——の附屬小學校尋六高等科の教室は、これもまた教育所かと思ふやうな變調を呈します。氣の毒なことには、成功者にも、失敗者にも、健康を害する者が出來て、病の床につくものさへあります。内面的に人間としての態度に狂ひを生ずることや、親や師匠もある事情の許には、異様な色彩——功利的——の濃厚になる事を、児童に直覺させる事などを思ふと、入學試験は成功しても失敗しても、身の毛のよだつ様な事です。

悲惨な挿話を一つ試みませう。父は某學校の教授でしたが、數年前になくなつて、その後は母の手一つで、遺子を育てていらつしやいました。兄は成績優秀で、中學の入學がうまくいききましたが、弟は成績が普通で、つひに試験に失敗しました。するとヒステリックな母は、夜半その弟を拉して護國寺境内の父の墓前に伴ひ「意氣地のない子だ。親の顔に泥をぬる子だ。こゝにいらつしやるお父さんは、どんなにふがない者と思つていらつしやるでせう。こゝに短刀がある。さあ、死んで、お父さんにお詫をなさい。お母さんの見てゐるまへで。」と母がきつぱり言渡しました。すると子はだまつてうつむきました。暫らくして子はいひました、「殺して下さるならば、殺して下さい。私は自分で死ぬことは、どうしても出來ません。」と。そ

の父を知り、母を知り、その子を知つてゐる私は、地下の父の涙を見、母のやるせない思も察し、さらに兄の言のよつて來る心の底を、よく／＼洞察する事が出來ます。私はさすがに父の子で、教育をうけただけである。この際の兄の言葉としては、この外にはあるまいと思ひます。母も子の徹底した語に我に歸り、だまつて家に歸りました。すると兄はそのあとからついて歸りました。母が家にはいつて、戸をたてると、「明けて」ともいひかねて、疲れた身を戸に寄せました。姉が椽側から出て、連れてはいると、安心したと見えて、兄はぐつたりそこに眠つてしまひました。何といふあぶないこととせう。これは私の今までに聞いた入學試験に關する最も悲惨な話ですが、度の強弱こそあれ、入學試験のために親子の感情にかうしたひびのいる事は少くありません。これが何をうむでせうか。今の教育が命がけで受けるほど尊いものでせうか。

しかしこの劇甚な競争試験が行はれる中に熱狂する父兄・児童をいかに導いたものでせうか。これが當面の問題です。まづ教師が教育の眞意義に立つて、児童の自己を育てることを擁護しなければなりません。學習態度を崩すやうな環境は、これをよく整理しなければなりません。さうして育て得た所によつて、試験をうけて、はいる者はいり、はいれない者はいらないで、共に最善を盡した自己の努力に満足したらよいでせう。出來る者は出來る事情が具備し、出來ない者は出來ない事情があるのです。「人事を盡して天命をまつ。」といふ所に、安んじさすべきものではありませんか。一體教育はさうした自然の大法に安んずる人を作らうとて、努力してゐるものではありませんか。父兄に對しては、この眞劍な問題を教材として、児童の教育を眞に考へさせるやうに仕向けたらよいではありませんか。もし今の世の流を逆に、児童の發達を直視して、少しもいら／＼することなく、歩武堂々入學試験に進む者がありましたら、或はよい成績を得られ

るのではあるまいかと思ひます。但し入學率が少くて、東京高師でいつも物議の種になつてゐた私が、かうした立言をしても、それは無効かも知れませんが。

中等學校の入學試験問題も採點の便宜からのみ考へないで、國語の本質から工夫してもらひたいと思ひます。小學校教師も、「背に腹はかへられない。」とか、「泣く子と地頭には勝てない。」とかいふ心持で盲従しないで、兒童の爲に質のよりよき試験問題を得るやうに、努力しなければなりません。今の世に、假名遣や漢字の書取を重視するなどは、時代錯誤の甚だしいものです。

序に學期末・學年末の試験が、今の教育界に何を貢獻してゐるかと思ふ時、私はいやな感じがします。私は學習態度を攪亂する以外に、何物もあるまいと思ひます。その試験のはじまつた頃、朝の電車に乗つてごらん下さい。車内の讀書・暗記・擬問・擬答のやかましいこと。「あれはジギスカンよ。」「あら、李鴻章だわ。」「私はかうした對話をきくたびに「ジギスカン」でも、「李鴻章」でもよろしいが、それでは東洋史はあてものに等しいと思ひます。ある問題に對して「ジギスカン」と答へて十點を得、「李鴻章」と答へて零點を採つたとしても、籤引の籤が當つた位なものです。そんな事に教師が眞面目に問ひ、生徒が眞面目に答へてゐるのは、念の入つた喜劇です。試験といふものは、大凡この類です。さて答案に對する評價——それが何を意味するかは別問題として——はよいとしても、修身・讀方・綴方・書方・算術・地理・歴史・理科・唱歌・體操・手工・圖畫の得點を合計し、之を平均したその平均は、何を意味するものでせう。明治の初年代に制定した試験制度を踏襲して、後生大事と遵奉してゐる教育者は餘りに働けがなさすぎます。試験される時には試験に反對しても、試験する身になると、前説を俄かに翻すとは、何といふ皮肉な言でせう。

中等學校の
入學試験問
題學期末學年
末の試験

學生が採點簿を閻魔帳と呼ぶのにも、可なり皮肉があります。教育界の事なかれと仕來つた事に、一掃し改良すべき幾多の弊害があります。上にお氣が付かなければ、下之を建言して、上下一致改革を企劃してはいかゞでせう。そのために教育會といふ團體があるではありませんか。私は今の教育會の神經と脈搏にふれてみたいと思ひます。

私の國語教授に關する追憶としては、故佐々醒雪先生を逸してはなりません。ある夏の夜、私は突然先生の訪問をうけました。あまりとしても意外なことなので、おそろしく御用の次第をきくと「こんど文章研究録といふ學術雑誌を出さうと思ふ。ついでにはあなたの御協力が得たい。中等學校方面は主として私があたるが、小學校の教授に關しては、主としてあなたを煩はしたい。私も月々六十頁書くから、あなたもそれだけ書いて貰ひたい。」とのことでした。私は自分の力量をかへりみるいとまなく、その知遇に深く感じて、承諾しました。今から思ふと、大膽きはまる話です。月々催される放談會には、大町・杉・岡田・武島・下村・沼波氏等、斯道の大家が出席せられて、中々大きな議論がありました。私はその席末にあつて、これをきゝながら、高等學校から大學と進んだ方の感情には、清い川水で白地の浴衣をあらつたやうな所があるとおもつて、こせ／＼した私をはなはだづかしく思ひました。私が佐々先生のお仕事に参加して得たものは、多くの國語專攻の士に接して、共通な美點の存することを發見したことでした。

佐々先生は私よりも一つ年長で、樋口先生よりは一つ年少でした。佐々先生と樋口先生とは、ざる蓑友だちで、話もよくあつたらしいのです。しかし兩先生が蓑敵の頃には、佐々先生は東京高師の重鎮、樋口先生は野の不遇の人でした。佐々先生は常に樋口先生を評して「憎む所のない男だ。惜しい男だ。」とおつしや

佐々醒雪先
生